
CHAOS ONLINE

giallo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CHAOS ONLINE

【Nコード】

N2425J

【作者名】

gallo

【あらすじ】

シェイド「どうもはじめまして、私はシェイドという者です。このCHAOS ONLINEというVRMMOでギルドマスターをしております。さて、あらすじを言わなければならないのですが・・・この物語は私が山あり谷ありのバーチャル世界で獅子奮闘してあらゆる敵を倒し、いろんな人との出会い、そして別れが描かれたゴッツ」

トール「なんであんたがここにいる。みなさん騙されてはいけません。この物語は俺が主人公の俺が辿る軌跡を描いた物語です。この

人が言ったことは八割方嘘です。では、CHAOSONLINE
ごゆっくりお読みください」

s t o r y 1

始まりは唐突に（前書き）

どうも、はじめましてジャツロといいます。

V R M M O R P G 物を描くにあたってこの話では説明が少なすぎるという方・・・ご安心下さい話が進むに連れて疑問に思う細かい部分が入つくと思いますので御了承下さい。

あと、文章力も高くないので稚拙な文章になるかもしれませんが暖かい目で見てもらえるとありがたいです。

story 1

始まりは唐突に

「生い茂る森、晴れ渡る空、微妙に湿った土そこには二人の人がいました。めでたし、めでたし。」

「いや、待てい何がめでたしだ。そして、あんたなんでついて来るの。」

そう、俺はとうとう売られたVRMMORPG《狩りをしよう！》をプレイしているのだが何故こんな状況になったんだ……

30分ぐらいまえ

俺は、一日遅れだがVRMMORPG《狩りをしよう！》のソフトを手に入れた。

ソフトを入れ、ヘルメットから無数のコードが垂れ下がった装置を被り起動した。

セットアップ・・・仮想現実空間での自分であるキャラクターの設定を行った後光りに包まれた。

おっと、名前を名乗っていなかったな。

俺の名前は篠田亮^{シノダトオル}、ゲーム内の名前はTHORでツール多分平凡な高校2年生だ。

光に包まれた後に動作確認用のステージにワープ(?)されて移動、攻撃、メニューの開き方などをNPCに手ほどきをうけた

そして、また光りに包まれ、はじまりの森に飛ばされた。

はじまりの森中央部ここがハンター達の出発点でありこの森を抜ける事が初めのクエストである。

いろいろ詳しい事が省いてあるがおいおい語るとして・・・まずは現状だ

そして俺は森を抜けるため進み始めて5分ぐらいで《やつ》が現れた。

ただ今5分ぐらいまえ

歩いていると目の前に黒いローブに包また謎すぎる人がいた。いや、正確にいうなら木に背をあずけて何かを悩んでいた。

ローブのフードに顔が隠れていて男か女か判別できない……
とりあえず話かける事にした

「失礼ですが、あなたは何をしているんですか。」

黒ローブは質問に何か悩んでいた。俺自身も変な質問したと思
った。

だが、どう考えても彼がここにいるのがおかしい。なぜなら、
この森はゲームを始めたばかりの人しかいないはずだ。なのにこの
人は初期装備である布装備じゃない。

と、そこまで思考してから別の事を考えはじめた余計な事を言
ったと

これは、MMORPGなのだらうんな人がいたって何も不思議で
はない。とりあえず弁解しようと思をだした

「すみま……」

「いやー、実は暇してましてね。ふらふらしてたんですよ。」

弁解する前に質問に答えられてしまった。まあいいこれで悩むこともなくなった。

「そうなんですか、じゃ機会があればまた」

これで、この人とのコミュニケーションは終わったと思った。
が、俺が進んだ後について来てさらに何か言い出した。

30分まえ回想おわり 「ナイスつつこみ、ククク欲しいね
ーうちのギルドに」

俺はギルドという単語にかなり興味を惹かれたが・・・

「俺は絶対嫌ですけどね」

これだけと思う。こんな訳のわからない人のギルドは入りたくない
と

「まだ勧誘すらしてないのに否定はひどいんじゃない」

「名前も知らない人にはついていけません」

ここで、黒ローブは疑問をもったようにみえたがすぐ解決したようだ。唯一見える口許がへの字からU口に変わった。

「ああ、そういえば君はついさつき来たばかりなのだね。メニューを開くといい、そしてマップを開き緑色の点を凝視するといい・
・騙されたと思ってやってみるといい」

そんなことを言われるとやらざるをえない

俺は、左手を3回振り長方形のメニュー画面を開きマップを開いた。

そこには、青点と緑点があった。言われたとおりに凝視するとSH ADEの文字と緑のバーが見えた。

「それが私の名前で緑のバーはその人のライフポイントですよ。
一応、名乗らせてもらいましょう。シェイドと申します。君は・・・

」

「ツールです」と、短く名乗った。

「ふむ、君はまだ知らないことが多そうだが情報サイトなどで下調べなどはしなかったのですか」

「ええ、偶然手に入れたソフトなんで・・・すぐにやりました」

「情報がないのか・・・なら、ますます私のギルドに入りなさい。うちはいいですよー皆いい人だらけですし」

何をもってこの人はいい人を決めているのだろうか。いや、それよりもこの人自体がわからない・・・話を変えよう

「そつえば聞きたいんですけどこの森にモンスターっていないんですか」

「え、私の提案スルー。まあいいですけどね。ちなみにここらへんのモンスターは・・・」

黒ロー・・・シェイドさんは言いかけて立ち止まっています。俺は疑問に思い「どうかしました」と聞いた

「リアライズ ハーベストサイズ」

シェイドさんの手に鎌ができました。ここではリアライズ武器名と言つとセットしておいた武器を出せます。

でかい黒光りする鎌を見てかっけ〜とか思っていたときに目の前に正方形のポリゴンが少しずつ現れ広がっていった。

「トール君、これが突発性エンカウントです。これは最近よく起こるようになった現象なんです。さがっていてください。」

意味がわからなかった目の前にいきなり3メートルぐらいのドラゴンが顕れた。

story 1

始まりは唐突に（後書き）

次回予告

シェイド（以下シェ）「はい、始めましたシェイドの予告コーナー。わーぱちぱち」

トール（以下トー）「シェイドさん、やってて恥ずかしくないのか」

シェ「ちつとも、恥ずかしくないですね」

トー「というか、まだキャラ確立してないのにこんな事やる作者って・・・」

シェ「おーっと、もう時間がないですね。ではトール君」

トー「次回、突発性エンカウント」

シェ「最後にもう一言」

トー「というか次回、俺活躍しないだろ・・・あつ逃げるな」

story 2 突発性エンカウント

「グオオオオオオオ」

ドラゴンが唸る声

その咆哮に俺は動くことができなかった。

「早くさがりなさい。死にたいのですか」

死にたくはないだが、俺の足は動かなかった・・・いや、動けなかった恐怖でびびってた

「・・・・・・・・」声すらでない

それを見たシェイドはしよいが無いという顔をしていた。

「では、しっかり見ていなさい私の闘い方を」

シェイドが一步前に出た。それが闘いの始まりとなった。

シェイド視点

トール君は・・・まあ、初めてこの世界に来てチュートリアル
のネズミの後にこんなドラゴンを見たのだからしょうがない。

私がなんとかしましょう。

一歩前に踏み込んだ、ドラゴンが動き出した。

目の前にいるのはレベル58の1番弱いドラゴン。攻撃パター
ンを知っているし、無駄に物理攻撃力が高いことぐらいだ。

だが、背後にはレベル1のトール君がいる。

なので私は出し惜しみせずに《死霊使い》スキルの最大物理攻
撃力を誇るアーツで倒すことにした。

ここまでの思考時間 0・12秒

アーツを使う方法は2つある1つはボイスアクション。名前で
わかるかもしれないがこれはスキルにあるアーツを言葉に出すこと

によってシステムが補助してくれるもの。
もう一つはフォームアクション。アーツにより型が存在しその型にはめることで発動する。

私は、トール君の前であえてボイスアクションを選んだ。かつこよくみせるためだよ。ふふっ

なお、ここまでの思考も短いので一歩足を出した時点でシェイドの顔はにやけていた。（本人気づいてません）

トール視点

おい、あいつおかしいだろあんな化け物を前に笑っていやがる。

シェイドはにやけ顔のまま（本人気づいてません）鎌を後ろに引き

「アーツ デスセイバー」

シェイドが声に出した。シェイドの持っている鎌に黒い謎の物質が纏わりつき肥大かし鎌の刃の長さが1メートルぐらいになったところで、シェイドが跳躍した。

あとは、予想がつかだろうその大鎌でドラゴンを斜めに振り落とした。

ドラゴンは真っ二つに……

ありえないドラゴンの存在もだがシェイドがもっとありえない。

そんなことを考えていると、真っ二つなったドラゴンが光りの粉よつにさらさらと消えているときにシェイドが近づいてきた。

「俺のギルドで強くないか」

実力を見せつけられて言われた。ただ、この人ならついて行けるとなぜか思えた。

次回予告

シェ「シェイドの〴〵アーツ紹介コーナーの時間でーす。わーーー」

トー「ひとりで盛り上げるの止めたら。そして次回予告は・・・」

シェ「今回紹介するアーツはこちら」

トー「俺の意見はスルーか」

シェ「なんと、私のアーツ《デスセイバー》アーツレベル4 即死効果12.7% 《死霊使い》スキルで最大物理攻撃力をもつ」

トー「ていうか、スキルについてもアーツについてもまだ1つしかないし」

シェ「おおっと、時間のようだ。それではまた次回で。さよーなら」

トー「いや、次回予告は・・・あつまた逃げやがった」

s t o r y 3 勧誘（前書き）

どうも、ジャツロです。

なかなか話しが進みませんが&ツールが活躍しそうにありませんが
気長に読んでいてください。

story 3

勧誘

「俺のギルドで強くないか」

シェイドに手を差し延べられた。

もちろん、俺は握手した。そして、言葉にした

「こんな俺でよければ入れてくれ・・・いや、入れさせて下さい」

頭を下げた。この時の俺はここに入れてよかったと思った。いや、誰だっと思うだろ強い人を目の前にしたら・・・

「そうですか、ではとっと入れようと思うのですがまずこの森を抜けましょう。」

と、歩き始めた。ここで俺は疑問に思うことがでてきたので歩きながら話しかけた。

「ギルドに入る方法ってどうやるんですか」

「簡単です。ギルドに入ってる人があなたに勧誘のメールを送ってその勧誘を承諾すれば入ったことになります」

「シェイドさん、ギルドの名前は何て言うのですか」

「ふふふー、私のギルドは『MISTY DREAM』霧の夢です。ああ、そうそこらへんのモンスターは私が狩りましたからリポップするまででてきませんよ」

俺は話しているうちに、疑問が増えていったがこの森を抜ければいろいろ解決するだろうと

考えているうちに木が減っていき町が見えてきた

「ここが誰もが初めに来る王都セルテット。そして、多くの人が集まる場所です」

とりあえず俺の感想を言おう。でかい。いや、広いというべきか。だめだスケールが大きすぎて混乱している。

「では、ギルドに勧誘します。メニュー開いといてね」

俺は町の大きさにパニックになって慌ててひらいた

SHADEさんからギルドの勧誘が来ました。承諾しますか。
という文面ができた。俺はすぐに承諾した。

承諾したのが確認出来たのかシェイドは笑顔で「やたー」とか
万歳していた。

「ではではちよつとばかり説明をギルドにはギルド間でできる
チャットやホームをもつ事ができます。MMORPGをやった事がある
人はお馴染みですね。まず、メニューにギルドの項目が増えます。
メニュー画面見えたり使えたりするのは、ギルドの状況、ギルド
メンバー、ギルドチャット、最後にギルド勧誘」

「ここまでよろしいですか」とシェイドに頷いた。

「後はホームについてからいろいろ説明しましょう」

なんでも彼のギルドにはギルドホームがあり王都にあるそうだ。
町に入っているいろいろなものがあり目移りしていると

「いろいろ見たり行ったりしたいかもしれませんがまずギルド

ホームまで行きましょう」

武器屋街を抜け中央の広場まで抜けた。真ん中に大きな噴水がある事が印象に残った。

噴水に魅入っていたら、「こっちですよ」と呼ばれた。噴水を中央に六本大通りがあった。そのうちの赤い道を通った。ちなみにさっきの武器屋街は緑の道だった。

「ここですよー」とシェイドさんに連れて来られた場所は何と言つか屋敷という感じだ。いや、門とか塀はついてないがイメージにあいそうなもので言えば吸血鬼でもいそうという感じだ・・・

シェイドさんがさっさと進んで行き。俺もそのあとをついていった。

story 3

勧誘（後書き）

次回予告

シェ「さあ、シェイドの次回予告コーナー」

トー「これ、俺が主人公だよな」

シェ「なんと、次の回でキャラが一人増えたり減ったり！」

トー「あんたが消えてしまえ」

シェ「次回、ギルド。少年を待ち受ける者は何か」

トー「それ、俺のセリフだろ。くそ、また逃げられた」

story 4 ギルド(前書き)

どうも、ジャックです。

前書きもシェイドさんにまかせちゃいたいです。

story 4 ギルド

俺はシェイドさんのいや俺のでもあるか・・・ギルドホームに入った。

入ってすぐがボロボロの木造建築・・・ではなくてコンクリートで現代の建物だった。1階はピロティのようでカフェテラスのような場所だった。奥の方に大きな掲示板が見える。外と中が違う、違いすぎる点について考えていたら

「あ、お帰りなさいシェイドさん」「どうでした」「後ろのは誰ですか」「お金貸して下さい」などなど椅子に座っていた人や掲示板を眺めていた人が次々と声をかけてきた。

俺はそれにびっくりしてしゃべるタイミングをのがして黙っていたら

「はい、少しだけ静かにしてください」と言った。だんだんと皆のざわめきが静まっていき

「この子がさっきチャットで紹介した新人のツール君です。突発性エンカウトモンスターを狩ってた時に捕まえました。これからはみんなの仲間だ。よろしく」

そこでシェイドさんが「君も何か挨拶を」と言われたので

「トールです。これからはよろしくお願いします」とだけ言っ
た。

すると皆が集まってきて挨拶を交わしていった。

一通り挨拶を終えたのを見てシェイドさんが「今日は新人の歓迎会やるー」とかい出し出した。まわりの人も「いいですね、やりましょう」「じゃあ、バーベキューにしよう」「やら「ヘルナッツ早食い大会やるうぜ」やら「シェイドさんそれはひどいですよ」やら賑わっていた。

俺は本当にいいギルドに入れたと場を楽しんでいた。

30分後

俺はいろいろこのギルドの情報を手に入れた。まず、驚くことはシェイドさんはギルドマスターだった。まあ、ギルドマスターとは簡単に言つとギルド内で1番偉い人のことだ。初めて会った時ずいぶん生意気なことをいったかもしれないと後悔している。

シルクに聞いたのだが、ああシルクはこのギルドで俺と同じ年だったので仲良くなった人だ。このギルドはなんでも屋みたいなギルドらしい。素材回収、モンスター討伐はたまた配達などいろいろな依頼を受け持つ。

シルクいわく「うちほど依頼が殺到している所はない」という。

そんな、なんでも屋だがトップの人達はこのストーリーの真実を突き詰める上位パーティでもあるのでギルドの全体のランクでいうと第五位なのだそうだ。

あと、簡単な説明をギルドメンバーは全員で77人ギルドホールは4つある。ちなみに王都には38人ぐらいいるらしい。今は出払っていて20人近くしかいないが歓迎会を開こうとしている。

「えー、えー、はいじゃあツール君の歓迎会を始めます。みなさん、後は全力で愉しめー」「イエー」「とまあ俺のために歓迎会が開かれた。

なんだろうか……この皆さんのノリの良さ……いや俺が暗いだけか……

疲れているのだろうか……今日やったことを振り返ろう。

1・調子のいい黒ローブに出会った2・ドラゴンの恐怖3・町を眺め疲れた4・ギルドでの歓迎会（現在進行形）

・・・ハードすぎる

「あ、ツール何やって・・・何か疲れ切った顔してるぞ」

彼は先程でできたシルク、銀髪ショート碧眼、身長は俺と同じぐらいで170センチ前後ちよつと痩せ型、白を基調にした装備をしている。

「ああ、うん、初日から無茶苦茶だなんて」

「君はまだ良い方だよ、ドラゴンが顕れたんだっけ。もし、シエイドさんがいなかったらトラウマものだっただろ」

確かに、その通りである。上位のプレイヤーに助けてもらってなおかつ上位ギルドにまで入れてもらったのだから。

「でもなあ・・・」と俺がぼやいていた時

「どうだ、愉しんでるか。」と黒の長髪黒眼、中性的な顔、服が全体的に黒い……。誰かわからなかった。メニューを開いて確認するのも失礼だと思い

「すいません、まだ名前を……」と言ったところで

「どうも、シェイドさん」とシルク

「……は？思考が止まった。

「……」
「どうしました、ツール君何か固まっていますよ。おい、やほ

「ツール、おいツール、固まっていますね。シェイドさん」

そういえば一度も素顔を見ていなかった。今の今まで黒ローブでフードを被っていたイメージしかなかった。

「え、黒ローブは」これしか言葉がでてこなかった。

「何を言ってるんですか。こういう時はローブは外しますよ」
そんな事を言っていると「シェイドさん」と呼ばれていた。

「ちゃんと眼を醒ましてくださいね」とシェイドは呼ばれた方へ行った。

「なあゝシルク、あの人誰」

「いや、だからシェイドさんだつて」

「そんな言葉信じられるか」

「諦める真実だ」「いやだゝ」「とりあえず君は一度眼を醒ますべきだ」などなど他愛もない話をしている間に初日が過ぎていた。

story 4 ギルド（後書き）

次回予告

シェ「今回はゲストにシルク君を向かえました。ぱちぱちぱち」

シルク（以下シル）「あ、どうも始めまして」

シェ「なんと、次回に私はでれないのです」

シル「はあ、それはなんといいいか。普段の行いがよろしくないからでは」

シェ「かはっ、それだけの理由で・・・ガクッ」

シル「シェイドさん、シェイドさん・・・しかたない、コホン、次回、ユニークスキル強すぎる力は破滅をもたらす」

トー「・・・・・・・・・・」

story 5 ユニクススキル

昨日は酷かった。俺とシルクでしゃべっていたら、ヘルナッツ
早食い大会が始まった（もちろん強制参加）。一粒食べただけで・
・・やめようこの話しは

とりあえず今日はこの世界での二日目だ。ん、ああこの世界で
は現実の1時間が36時間に相当するのだ。だから、現実2時間で
3日間になる。

ちなみに、現実が春だがこっちは夏がもう終わりそう。

今日は、シルクにいろいろこちらの事を教えてもらうつもりだ。
といっても目の前にもうシルクはいるのだが

「今日は戦闘全般について話すよ」とシルク

シルクのレベルは5彼もまた最近始めたばかり。ただ、持つて
る情報の量に差がある。

「俺に教えてくれるのはうれしいがシルクはいいのか。レベル上
げとかあるだろ」

「何を言っているんだ。困った時はお互い様だろ。それに、同じ年代でレベル帯も同じなのだから一緒にやったほうがいいじゃないか」

俺、マジ感動

シルク、あんたマジ最高だ。

と、感動していたら話を進められていた。

「まず、スキルはわかるよね」から始まった。

俺は頷いた。スキル・アーツの大元、アーツを使うならスキルを覚えなければならない。

「スキルには種類があってコモンスキル、エクストラスキル、ユニークスキル」

「なんだ、ユニークスキルって」

「悪い質問は最後にしてくれ順番にはなすから」

「ああ、悪い」とだけ答えた

「まず、コモンスキルだ。コモンスキルは覚えるのにとくに条件はない。何か武器を装備するだけででてるだろう。例えば、チュートリアルで選んで装備した武器のスキルを覚えていたとか」

その説明に、俺は理解した。俺は、チュートリアルで片手小剣のコモンソードと腕小盾のコモンバックラーを選択したがスキルの中に《片手小剣》と《腕小盾》のスキルがあった。まあ他にも初期から《集中》や《索敵》や《気配》などもあった。

「次に、エクストラスキル。これは一定の条件を満たせば誰だって習得することができる。例を上げよう。今、君にも《気配》と《索敵》スキルがあるはずだ。それらを熟練度500まで上げると《隠蔽》スキルがでてる。このように何かのスキルを上げるとでてるのがエクストラスキル。熟練度についてもあとで説明するから。ここまでのいいかい」

「ということは、エクストラスキルを上げたらでてるエクストラスキルもあるのか」俺は疑問を消しきれなくつい質問してしまった。

「その通りだ。1番認知度が高い例がコモンスキル《初級炎魔法》だ。これを上げると、次に《中級炎魔法》またこれを上げると《上級炎魔法》さらにもう一段階あるんだけど、そんな感じでエク

ストラ上げた先にエクストラもあるんだ」

「悪い、ありがとう。続けてくれ」

「うん、最後にユニークスキル。これも一定の条件を満たせば習得するはず」

「はず？」つい俺は聞き返してしまった。

「こればつかしは一律にこうだとは言えないんだ。まず、ユニークスキルは一人しか持つことができない。だから二人以上同じスキルを持っていたらただのエクストラ一人しか持っていなかったらユニーク」

「でも、ユニークだったからって強いとは限らない・・・こともないのか」

「残念ながら、今あるユニークはどれもチート気味でゲームバランス崩壊するぐらい強いよ。ツールは見たんだろ。《死霊使い》スキルのアーツを」

確かに、やばかった。

「ドラゴンが真つ二つだった。しかも一撃で倒してたし」

「えーと、ドラゴンがでくるのは最低でもレベル55からか・
・そんなもんなんだよユニークスキルって」

ユニークスキル恐るべし。俺はそう思ったが同時にどうにか手に入れないかなと思ってた。そんな考えをシルクに読まれたのか

「ユニークは狙ってとれるようなものじゃないからあきらめろ」

そんな事を言われて俺はうなだれた。

「そろそろ復活しろ次の話をするから」とシルクは話し始めようとしていた。

次回予告

シェ「えゝ、シェイドの次回予告コーナー」

シル「んゝ、んゝ」

シェ「どうやら、私の出番が当たらないとかなんとか」

トー「んゝ、んゝ」

シェ「その二人うるさい。せつかく縛り付けておいたのに、これは私のコーナーだ」

トー&シル「んゝゝゝ」

シェ「次回、シェイドさんの冒険。私を待ち受けるものはいつたい」

トー「ぷはぁ・・・くそ、あのやろー。俺達を縛った揚げ句、嘘の予告までしやがって・・・もう、いない」

story 6

シルクは良いやつ

「次は熟練度についてだ。まず、メニューを開いてスキル一覧を開いて」

俺はシルクの言われた通りにした。

「開いたか、じゃあまずスキルをどれでもいいから選択してしたらアーツ一覧表とグレーのバーがでたでしょ。まず、グレーのバーは熟練度のバーです。熟練度が上がると左側から赤色になっていきます。ちなみにバーの左にある数値は熟練度の数値です」

俺は《片手小剣》のスキルを見ながら理解した。

「次に、アーツ一覧表、今は少ないかもしれないが熟練度を上げていくにつれてアーツは増えていく。さらにアーツは熟練度分だけ強化するために振り分けることができる。例えば《片手小剣》のスキルがある。熟練度が10ちなみにどれであっても熟練度は最高1000だから、《袈裟切り》のアーツがあるとする。《袈裟切り》は攻撃力と攻撃速度を上げることができる。そこで熟練度分の10を《袈裟切り》に振り分ける事ができる。といっても《袈裟切り》の場合攻撃力も攻撃速度も10振り分けないと変動はないのだけどね」

説明を聞いて、《袈裟切り》を見たが《片手小剣》スキルが熟練度0だったので今はいいと思った。

「じゃあ、最後にスキルはスキルスロットにセットしないと意味がないんだ。セットした状態で戦わないとアーツは使えなかったり熟練度は手に入らなかったりするから。スロット数は10、この数字は減りもしないし増えもしないよ。だから、どんなプレイヤーも常時セットしたスキル10種類だけしか使えないんだ」

「ということは、対人戦だとスキルの探り合いもあるわけだ。スキルの知識の有無で勝敗が決まりそうだな」

そんな俺の考えを言ったらシルクは苦い顔をして言った。

「多分、認知度の高いスキルなら見破れるかもしれないが、何せ戦闘スキルの種類はだいたい500種類以上あるって言われるし僕だって知らないスキルはまだまだあると思うよ」

こんな事を聞いて俺は「これは楽しめそうだ」と「そんなたくさんあるのかよ」がいりまざった。でも、俺はマイナス思考な考えは捨て前者を口にだした。

「そいつは楽しめそうだ」

「僕もそう思っている。このゲームの醍醐味はそれにあると思う」

このシルクの言葉を聞いて前者を言っでよかつたと思つた。

「よし、じゃあそろそろ話すだけでもなんだから実際にモンスターと戦いに行こう・・・と思つたがその前にアイテムを揃えに行こう低レベル者用の店を紹介するよ」

俺は内心では「マジ感謝、あんた本当にいいやつだよ」と思つていたが「助かる」とだけ言つた。

シルクと俺は噴水のある町の真ん中まできた。ここでシルクは何か思つたのか

「そういえば、この地理についてまだ知らないよな。この噴水のある広場がこの町の中央部分なんだ・・・」

ここで、シルクからいろいろ教えてもらった。まず初めて入つた緑色の道は武器や防具やアクセサリーなど装備品全般が固まつている。このように他の道も赤色の道はギルド関連、青は消耗品関連、白は宿屋、飲食店関連、黄色は闘技場やカジノなどのアミューズメント関連最後に・・・

「最後に黒色の道・・・ここは王の住む城につづいてる。いろいろな店があることで便利なんだ。でも、城は違う。城には王はいなくてモンスターが徘徊する王城跡になっているんだ。間違っても入ろうとするなよ。モンスターの平均レベルは60だから」

「城にモンスターってどういう設定なんだ」俺は疑問を口にした。

「シナリオの設定では王やその従者や騎士達が一夜で謎の死を遂げたってなってる。だから中にいるのはアンデット系や死霊系ばかりか、スペクターとかデユラハンとか。まあ、今の僕達には関係ないさ」

とまあこんな風にあらかた王都について説明してもらい緑の道を進んで行った。

s t o r y 6

シルクは良いやつ（後書き）

次回予告

シェ「はい、私のコーナーがやってまいりました」

トー「いや、次回予告だろ、てか久々に俺喋れてるな」

シェ「そう、つまるところ最近ずっとシルク君のターンなのです。
つまり、シルク君を消せばぐえっへっへ」

トー「なあ、俺って主人公なんだよな」

シェ「シルク君を消し・・・闘いにいざ行かん」

シル「次回、武器。ツールは何を選んだのか」

トー&シェ「シルク「君~~~~」」

story 武器

俺達は緑の道を進んでいた。噴水から歩くこと5分。盾の前に剣がxを描いた看板がある武器防具屋マルチーズという店についた。

「ここがそうなのか。えっと……《マルチーズ》」

「うん、ここはね、初級者から上位者まで幅広く武器防具を売っているんだ」

さらに、補足しよう。シルクから聞いた話ではここは同じギルド霧夢の人らしい。

「へい、らっしゃーい」

「どうも、こんにちはジンさん」

「はじめまして、昨日入ったツールです」

彼のネームはGINでジン、ギンじゃないよ。見た感じ年は20ぐらい。身長は2メートルはあるのではないだろうか大きい。そして、輝くヘッド……失礼、スキンヘッドの眼の色はグラサン

をかけていてわからなかった。

「おう、よろしくな。俺はジンだ。主に鍛冶をしている。ところで、今日は何のようだ」

「ええ、彼の装備を調べようと思ひまして」

「おう、見てけ見てけ。そして、買っていってくれ」

ここで、また補足だが同じギルメンなら5%割引してくれるらしい。

俺は悩んだ。何を武器に選ぶか。もちろん臨機応変にいろんな武器を使えばいいのだが……

「~~~~ん」

「何に迷ってるんだ」

「なあ、シルクは何使ってる」

「僕は、片手小剣と腕小盾だよ。将来的に《魔法剣士》になりたいからね」

「あゝ、そうか将来的になりたいもので決めてもいいのか。」

「普通はそうじゃないのか。じゃあ、君はどんな闘い方が好きなんだ」

「……こう、大技をどんどん出すような」

「魔法職じゃないのか……だったら、これはどうだ」

指を指していたのはショウケースに入っていた剣、いや普通の剣じゃない長さは1メートル半両刃で幅も長い、いわゆる大剣という部類だ。

「……《ゲイルソード》、装備制限Lv・1、攻撃力はコモンソードの倍か……うん、いいかもな」

「じゃあ、買おうか。ジンさん」

呼んだジンさんがやってくる時に気づいた。金が足りない。

「なあ、シルク金が足りない・・・」

「え、・・・高いな」

そこには10000nと書いてあった。ここの通貨単位はn、ノールである。俺の所持金は950n描写はなかったが昨日宿に50n使った。全然足りない。

二人で《ゲイルソード》を前に落胆していると

「おっ、そいつか」とと持ってけ。武器一つはシェイドさんが払ってくれるそうだ」

・・・はい？

「本当に、シェイドさんが・・・」俺は疑ったが、ジンさんから手渡しされ手に入れた。

「いや、シェイドさんもたまには良い事するな」と、ジンさん

「僕の時は無かったのにね」と、シルク

ここまで聞いて俺はシェイドさんに感謝していた時

ぴぴぴっ、ぴぴぴっ、とメールがきた時の音になったので俺はメールを開いた。件名にシェイドよりと書いてあった。

俺はメールの文章を開いた

メール文

件名 シェイドより

本文 どうですか、そろそろシルク君と一緒に武器でも購入してひとつすきな武器を私が替わりにだすという事を知ったのではないでしょうか。それは、私からのほんのした饞別です。どうか、受け取って下さい。

ついしゅん　もう、受け取っちゃいましたね。これで君は私に借りをつくっちゃいましたね。はははははは。ジンさんもグルなんだヨ。いや、この借りは大きいですよ、何ていったって一万ですからね。低レベルの君にはつらいでしょうね……………

メール文章おわり

ああ、初めは感動したよ。なんだよ、　って。何が、ついしゅんだ。くそ、はめられた。だいいち何で本文より追伸のほうが長いんだよ。ぶつくさぶつくさ……………

「どうした」と、シルク。その後ろで「ククッ」と、笑いを堪えているジンさん。

俺は、無言でシルクにメールの内容を見せた「うわ〜」とだけ言われた。

その後、ジンさんを問い詰めたが、「君らが、甘いだけだよ」と言われて言い返せなかった。

店を出て購入した武器防具を装備して

「でも、その《ゲイルソード》かなり良質な武器だよ」と、シルクに言われた。

実際、その通りで攻撃力が高いのはもちろん風魔石という鉱石を使ってジンさんがオーダーメイドした。奇跡の一品で風属性が付加されていたり、本来大剣は攻撃速度が遅かったり、重量があったりするのだが……とまあ借りをつくってしまったがとんだいいものを手に入れてしまった。

次回予告

シェ「はい、どうも。お待ちかねのシェイドの次回予告コーナーです」

トー「多分、俺よか人気でしょうよ」

シェ「どんどん卑屈になっているツール君に耳寄りな情報だ」

トー「……………」

シェ「これから2話後に君が活躍しますよ」

トー「な……に……？」

シェ「ようやく、主人公っぽくなれますよ。よかったですね……
・死んじゃえばいいのに」

トー「日ごろの行いがいいせいかな。シェイドさん、俺は主人公なんですよ」

シェ「いきなり復活しましたね。ですが残念です。《デスセイバー》」

トー「ちょっとまで。俺はまだかつや」

シェ「次回、ツール君の死。ツール君はいたい誰に」

シル「皆さんだまされては」

シェ「《デスセイバー》・・・ふふふ」

s t o r y 8

《ゲイルソード》（前書き）

どうも、ジャツロです。

最近になって気づいたミスですがシェイドさんが某メーカーのデイズシリーズの大佐と一文字違いだしネクロマンサーだしとかぶりまくりな事に気づきました。

・・・ま、いいか。

story 8

《ゲイルソード》

《マルチーズ》で装備を調えたあと、1番安い薬瓶を五本買って赤色の道を通って町を出た。

「……………」見渡す限りの草原に俺は言葉がでなかった。

俺が景色に見とれていたら。シルクが「おいてくぞ」と、言われたので気を持ち直してついて行った。

20分後

「はぁ、はぁ」俺は息を切らして、向かってくるホワイトウルフを《サイドステップ》で交わし《ソニックエッジ》で斬撃と衝撃波の二つのダメージで白狼を倒した。

また、向かってくる白狼を《バックステップ》で交わし、シルクと背中があった。

「そっち、何匹倒した」

「五匹倒した。そっちは」

「同じ」と短くいった。まだこっちだけでも七匹は見えた。

どうして、こうなった。

10分戻す

俺達は、草原にある整備された道を通って行き、森に入った。

この森には、わかりやすい名前がついていた。《狼の森》、名前通り、狼系モンスターが頂点にいる。といってもこの森のモンスターはレベル1〜10なのでよっぽどへましない限りは死なないそうだ・・・シルクの情報より。

確かにそのとおりでレベル3のチャイルドウルフを相手に着実とアーツや闘い方を身につけていった。俺はレベル4、シルクはレベル6となった。

もう少し、奥の方へ行こう。という事になって行ったら、前から五匹、左右背後からも何匹かに囲まれて今にいたる。

ついさっき倒した白狼でレベルアップのファンファーレがなっ

たが喜んでる場合ではない。

「何か、大技はないのか形勢が逆転するような」と、俺

「そんなものがあれば使っています。」と、シルク

「じゃあ、地味に一体ずつ倒すしかないのか」

「ええ、じゃあまた」とシルクは背後にいる方の狼を倒しにいった
った

俺の目の前にいる狼は七匹、チャイルド二匹と白五匹。

俺はまず数を減らすためにチャイルドねらいでいった。

アーツ《ダッシュ》によりシステム補助の加速をして、チャイルド一匹を斜めに切って一撃で葬った。

二匹が襲ってきたので、アーツ《バックステップ》で交わし、スキル《両手大剣》のアーツ《ソニックエッジ》を使い、隙だらけの白狼二匹に衝撃波を当て消し飛ばした。

- - - 残り四匹。

思いの他一撃で葬れているのは、一概に《ゲイルソード》にあった。トールの使うアーツのほとんどが風属性にあたるので《ゲイルソード》の風属性付加がいい作用をもたらした。

この後、^{ダッシュ}切る、《バックステップ》のパターンに嵌めてそうからないうちに倒した。

俺は七匹を倒し終えたのを確認して振り返った。シルクも最後の一匹なのか《袈裟切り》を使い倒した。

シルクは振り返り走ってこっちへ向かって来て

「急いで、この森を抜けよう。これは異常だ」「ああ」と言った時には手遅れだった。

俺達二人の目の前にポリゴンがいくつも出てきたからである。

story 8

《ゲイルソード》（後書き）

次回予告

シェ「シェイドの次回予告コーナー。今回はジン君をゲストとしてお呼びしました」

ジン「どうも、ジンです。霧夢ギルドで生産職をやっています」

シェ「ジン君は生産職として店を持っていますが《両手大槌》使いとしても優秀です」

ジン「ところでシェイドさん、シルクとツールは」

シェ「……………彼らは用事があってでれないそうです。ふっ」

ジン「シルクー、ツールーいたら返事してくれー」

シェ「それでは、また次回予告で。さよならーツール君シルク君」

ジン「!」

不幸にも俺達は突発性エンカウントに出くわしてしまった。

俺達の目の前のポリゴンがすぐに完成していった。

銀色の毛並みの狼、《判別》スキルによってレベルと名前が見えた。

シルバーウルフ、レベル20・・・10以上も差があった。
俺のレベルは7、シルクも上がっているだろうがせいぜい9レベルぐらいだろう。

「どうする」

「僕が時間を稼ぐから君は逃げてくれ」

「何普通にカッコイイセリフを言ってるんだ」

「いや、僕は・・・」

「俺はぜつたいに逃げない。たとえ死んだとしても友を見捨てるような真似はしない」

「トール……」

トール内心

よっしゃー、決まった。今のは我ながらなかなかいいこと言っただぜ。シルクの好感度アップ成功。

「死力を尽くそうぜ、それでダメだったら悔いる事はないじゃないか。……行くぜ」

「ああ！」

トール内心

俺、こんなにカッコイイセリフ連発していいのだろうか……
・まさかの死亡フラ……いやいや、まさかね

俺は《ダッシュ》で銀狼の正面に突っ込んだが途中で《サイドステップ》により直角に横にずれた。すると俺の背後で今まで隠れ

ていた炎球が銀狼に直撃した。

これは、チャイルドを狩っていた時に出来たコンビネーションアタックだ。銀狼から見れば俺が前にいて死角になっていたので俺がずれた時に突然炎球が出てきたように見える。

一割とまではいかないが目に見えるぐらい減ったことがわかったので、倒すことは可能だ、と確信した。

俺は、銀狼が炎で怯んだ隙を見逃さなかった。《ダッシュ》で近づき《ソニックエッジ》を斬撃と衝撃波の二つともを浴びせた。

銀狼のライフポイントの三割は削った。さすが大剣としか言いようがない威力だ。白狼を一撃で消すアーツは伊達ではなかった。

だが《ソニックエッジ》はもう二回しか使えなかった。大技は決まってAPの消費が大きかった。ここではMPマジックポイントのようなものでAPアーツポイントを消費する。

一回でも外せばそのぶん決定打を入れられなくなる。シルクも同じであった。スキル《初級炎魔法》のアーツ《ファイアーボール》を四発撃つ分しかなかった。

俺は、隙をつくるためにも銀狼に立ち向かった。

《ダッシュ》をして銀狼の横腹目掛けて大剣を振り下ろした。

だが、空を切るだけだった。初めは奇襲でうまく攻撃できたがここからはそうもいかないことを悟った。

銀狼は速かった。チャイルドや白なんて比較の対象にもならない。
い。

接近戦を俺にまかせていたシルクも参戦したが、いつこうにかすりもしなかった。

唯一の救いは攻撃は見切れることだけだった。

攻撃の瞬間、初動があつて……ん？

いや、待て。攻撃見切れてるよ、という事は……

俺は、銀狼の攻撃の初動。体当たりに近い突進する前の後ろに下がるのを再度確認した。

やっている

俺は突進を交わし、次の突進の初動を待った。

．．．．．きた！

俺は、《ダッシュ》で出来るかぎり距離を縮め、《ソニックエッジ》をお見舞いしてやった。

さらに、その隙を逃さないために「シルク、袈裟切りだ」と銀狼の横方向にいたシルクに指示を送った。

シルクの《袈裟切り》もヒットし銀狼のライフも残り五割を切った。

ここで俺はさらに《袈裟切り》で怯んでいる銀狼に突進気味に突きをし切り上げた。

銀狼のライフの残りが四割を切ったのが見え、「よし」と俺は口にだしてしまい。それを聞いたシルクも顔に余裕ができたように見えた

だが、銀狼はただの狼には終わらなかった。

次回予告

シェ「なんと、今回はいつもより長めで行う。シェイドの次回予告コーナー」

シェ「なお、今回は私一人でのこのコーナー」

シェ「……いじりがいないのでやっぱり誰か呼びます。メールを送ろう……『早く来なさい、来ないと……ふふっ』とこれでいいでしょう」

シェ「ではまず、こちらのコーナーから」

シェイドさんのアーツ紹介コーナー

シェ「こちらでは説明不足だったアーツを紹介するコーナーです」

トー「着いたっ」

シェ「いいところに来てくれました。これから君が使っていたアーツについての紹介ですよ」

トー「いや、まず呼び出した理由を……」

シェ「えー、今回は多用に使用されていた《ダッシュ》について……まず、このアーツは《歩法》というスキルのアーツです」

トー「これ、次回予告か！シェイドさんの気まぐれで呼ばれてなかったのか」

シェ「そこ、うるさいですよ。おっと失礼。アーツ《ダッシュ》は左足に重心を傾けて一秒間ためて前進したらシステム補助により直線で速く移動することができなおかつＡＰも消費しない優秀なアーツです。ただし、再度使用するには２０秒待たなければなりません」

シル「失礼します。遅くなりました」

トー「よっ」

シル「あれ、ツールも呼ばれたのか？何かシェイドさん語ってるけど」

トー「俺にわかることはアーツについて語っていることとこれが次回予告ということだけだ」

シェ「続いて《ソニックエッジ》。このアーツは《両手大剣》スキルのアーツです。剣で縦切りをしてついでに風属性の衝撃波が飛ぶアーツです。技の速度もそこそ早いので大剣使いの人は上位の方でもよく愛用されます。ただし、ＡＰの消費には注意です」

トー「なあ、俺達なんて呼ばれただろう」

シル「僕が分かるわけじゃないじゃないか」

シェ「ふう、終わった。それでは皆さんまたの次回予告でお会いしましょう」

トー「え、終わった？なんで呼んだ」

シル「トール、たとえ勝てないとわかっていても闘わないといけな
いときがあると思うんだ」

シェ「いや、呼んだのはいいんですが・・・おっと、闘う気で
すか。いいでしょう。・・・ふふっ、ははっ、ひよひよ」

シル「ありえない。あーー」

トー「シルクー、ちくしょー。よくもシルクをー」

シェ「ふははははは。むだむだむだあ」

トー「あーーっ。ばけも・・・」

シェ「ふふふ、ほんとに残念です。」

story10 モンスターアーツ

銀狼のライフを七割近く削ったが、ここからが悪夢だった。

グルルウと唸り声を上げたすぐに銀狼は身体を鋼鉄のように金属化していった、いうなら銀化か

「こいつ、ライフが致死量になったらアーツを使うのか」

「え、モンスターもアーツ使うのか」

「あとで説明するから今攻撃のチャンスだ、行くぞ」

俺は、知らなかったモンスターがアーツを使うことを……いや、今は目の前の敵に集中だ。

身体が全部金属化するまで動けそうにないのを理解し完全に金属化するまえに攻撃した。

俺は頭を、シルクは背中を狙い切りつけたが、キィィィンという音ともに弾かれた。

だが、俺は諦めず最後の《ソニックエッジ》をお見舞いしてやった。

それと同時に銀狼は完全に金属化したので《ソニックエッジ》
バックステップ
ヒット後で距離をとった

信じられないことにライフはほとんど削れる事はなかった。さつきまでとは物理防御力違いすぎた

完全に金属化した銀狼は軽く跳び上がり回転し始めた。

俺もシルクもその行動に一つだけすぐに理解した、攻撃がくると。

俺とシルクは高速回転し始めたものに集中した。

その直後に、回転している銀狼が動いた。

車のタイヤの如く前進してきた。

- - - 速い！

ほぼ一直線だがかなりのスピードで俺とシルクの後ろにあった木を一本破壊していた。

俺とシルクの間を通過して後ろの木に衝突したようだった。驚愕の威力だった。

防御力がありえなくなっているのに攻撃も威力が増してはもう勝ち目がない

そんな風に考え俺は「なあ、逃げ……」まで言えたがここから先はシルクの言葉に消された

「トール、君は言いましたよね。死力を尽くそう、それでダメだったら後悔はないと、僕らはまだ戦えるライフが尽きるまで」

その言葉にはっとさせられた。

そうだ、まだライフは残っているのになに諦めているのかと

「悪い、シルク。俺は全力で奴を倒すぜ」

この俺の言葉とともに二人は動いた。

俺は、弾かれながらも着実に金属の身体に打ち込んでいった。

シルクも《ファイアーボール》を確実に当たるように狙いを定めて二発当てた。

その攻防戦をおこない俺の残りライフが二割を切って、銀狼ももはや一割。

やれる！と思ったがダメだった。最後の最後で大剣を弾き飛ばされてしまった。

無防備になった俺を銀狼は無視する訳がなく突進してきた。

死んだ、と思ったが

残り、目の前一メートルぐらいだろうか、そこで一本の槍が金属な銀狼を貫いていた。

次回予告

トー「はい、今回は余計なものがないので本来の次回予告コーナーです」

シル「ちなみに、余計なものはギルドの会議でこれなくなりました」

トー「ええと、次回では新キャラがでてくるそうです」

シル「……余計なものがないだけですごく平和ですね」

トー「さらに、まだまだアクションシーンも入ってます」

シル「次回……」

シェ「待ったー、次回、ヴァリアブルアタッカー。三つの武器が交錯する。それではっ」

??「待て、くそ。何処に行きやがった」

シル「副ギルドマスターとうしました。しかも、本編に出てないから名前の表記?になってますね」

??「そんなことはどうでもいい。シェイドはどうした。あの野郎会議中にいきなり抜けだしやがった」

トー「シェイドさんならあっちにありえない速度で走って行きまし

たよ
」

??「助かる、サンキューな。…………シェイドオオ、姿顕せ」

ト「結局、シェイドさんに掻き回されたな……次回予告も持っていたし」

シル「トール、僕らは所詮このコーナーでは活躍出来ないんだよ」

ト「オチもないしな」

シル「ああ」

ト「&シル」……………」

s t o r y 1 1 ヴァリアブルアタッカー（前書き）

どうも、ジャツロです。

文章が短くて話数が増えてもあとかきのネタは尽きない・・・
とても不思議です。

突如としてあらわれた槍によって銀狼はライフを失った。

「ふう、やれやれ。大丈夫か？」

槍が飛んできた方からその声が聞こえたのでそっちへ向いた

茶髪で短髪、耳に銀のイヤリングの眼は黒、体型はスリムで筋肉質、身長は180ぐらいそんな人がいた

「んん。シルクじゃねーか。俺だ、俺、ハンクだ」

「え、どうしてここに。ハンクさんはクロル山脈に行ってたのでは」

この人はどうやらハンクという名前らしい。ちなみにクロル山脈は下級ドラゴンがわんさかいるらしい場所だ

俺は話しについていけなかったのでそのまま二人の会話を聞いていた

「突発性エンカウントあるよな。ここに銀狼のエンカウントが多数確認あるから行くついでに調べてついでに倒しとけとシェイドさんに頼まれたんだが……はあ」

「そうなんですか、こちらハンクさん。こっちは最近入ったトールです」

やっと紹介されたので俺は名乗った。

「トールです。さっきはありがとうございました」

「ハンクだ。なあに、困った時はお互い様だ。よろしく」

俺達は一旦王都まで戻ることにした。ハンクさんはクロル山脈へ行くには一度森をでないといけないので一緒に森を出ることにした。

森の中を歩きながら会話している時にシルクがハンクに質問していた

「そつえば、ハンクさんレベル上がったのですか」

「いや、それがシェイドさんの報告で銀狼が五体はいるって言われて『全部片付けておいて下さい』って。で昨日からこもってさっきので五体目……はぁ」

「ため息がたえませんね」

「シルクにツール、くれぐれも気をつける。レベルが高いとその分シェイドさんに頼まれ事が多くなるからな」

そんなハンクさん大変そーだなー、と呑気に構えていたら

目の前にまたポリゴン群が出現した。

「あゝ、くそつ、お前ら二人は下がってろ。俺が片付ける」

俺達下がった時にポリゴンが形を生成して一匹の黄金色の毛並みの狼が出てきた

俺は即座に《判別》で確認した。ゴールドウルフ、レベル？、判別スキルはレベル差20まで見ることが出来るが、今の俺のレベルは銀狼の経験値で11になっている。だから金狼はレベル31越えのモンスター

俺は微力だが力になろうと前に進んだがシルクに止められた

「トール何やってるんだ」

「シルクっ、あのモンスターレベル相当高いぞ少しでも加勢しないと」

「落ち着け、僕らだと一撃死だと思うからいつでも無駄だ。それに・
・・・」

「それに」

「ハンクさんはかなり強いよ」

と、最後にシルクに言われハンクさんと金狼の闘いが始まるうとしていた。

ハンクさんが先に動いた。そして終わりの始まりでもあった。

ハンクさんは槍を投げた。もちろんただ投げた訳ではないスキル《長槍》のアーツ《スローランス》だ。

さらにハンクさんは槍の後を追うように走り出した……ように見えた。うまく言えないのは彼の攻撃、移動が早過ぎるからだ。

槍は命中して金狼の肩を射ぬいた。さらに追い撃ちといわんばかりに《片手斧》スキルの《ストライクスイング》をお見舞いしていた……ここでありえない事実には俺は気づく。

彼はメニュー画面を開かずに武器を交換していた。

普通はメニューの装備欄に武器を一つだけセットできるが、そこで武器をセットし直さなければ武器を交換することはできない

俺はおかしいのではないのかと思いそのことについてシルクに聞いた

「なあ、シルクあれはなんだ。なんで武器がなんとも変わっているんだ」

「……普通は武器は一つしかセット出来ないし戦闘中に武器を交換はできない。けれどハンクさんの持っているスキルがそれらを可能に出来るんだ」

《ヴァリアブルアタッカー》というスキルなんだけどこのスキルの初期アーツの中に《三器装備》というものがあって片手剣、長槍、片手斧を一つずつセット出来るんだ。

そして、《連鎖攻撃・剣》《連鎖攻撃・槍》《連鎖攻撃・斧》があの戦闘中に武器を変えれてるアーツだよ。例えばさっき使っていた《スローランス》からの《ストライクスイング》これは《連鎖攻撃・槍》のアーツであれで一つの技なんだ

……あ、もう終わるよ」

ハンクは斧を持っていた。金狼は金属化していたが、すでに残りライフは一割とちょっとしかなかった。

ハンクは《片手斧》スキルの《フォールインパクト》空中に跳躍して斧を思い切り投げ落とすアーツを使い小さなクレーターが出来ていた。交わされたはずが、金狼は足を引きずらせていた。

謎はすぐとけた、ハンクさんが持っていたのは片手剣しかも《片手剣》スキル《スラスト》のアーツ使用後の構えで地上にいた。

物事をうまく理解し遅れているのはハンクさんの動きが加速しすぎているからだった

その後、ハンクさんは片手剣で二度ほど金狼を斬って倒した。

次回予告

シェ「シェイドの次回予告コーナー。今日は名前もまだ出てない副ギルドマスターの『ピー』です」

??「いや、シェイドお前なんで俺を呼んだ。今話にでてきたハンク呼んでやれよ」

シェ「『ピー』はギルド内でピーしていて、最近よくピーしていたりします」

??「おい、シェイドさりげに『ピー』を『ピー』するな。ええい、鬱『ピー』い」

シェ「ははははは。ざまあみろですね。キャラも確立してませんしファンの方もまだいないはず。いつも、私を追いまわ……暴力反対ですよ」

??「よし、黙らせた。次回、副ギルドマスター。俺がでてくるぜ、よろ『ピー』。待て、シェイドオオオ」

s t o r y 1 2 副ギルドマスター（前書き）

どうも、ジャツロです。

前書きに顕れたが何も無い事実！

ごゆるりとお読み下さい

story 12

副ギルドマスター

ハンクさんの闘い方は芸術の域だった。武器三つを巧に操る様はすごかった。

「よし、いままでレベルが上がったぜ」

「何レベになったんですか」

「レベル68だ、ちなみにさっきの金狼は58レベだったわ」

どうりで強いわけだ、と俺は思った。

その後、俺達三人はギルドまで戻った。

ああ、ハンクさんは金狼との戦闘でレベルが上がったので一旦戻る事にしたらしく一緒にギルド戻った

ギルドホーム前

「ねえ、何か中騒がしくない」と、シルク。「何となくわかり

そっだ」と、ハンク。いや、騒ぎの現況一人しかいないだと、思
って口にしようとしたら

「そんなの……」

「と~~~~~。おや、ハンク君達お帰りなさい。今、私は忙
しいのでさらば」

ビュウン。という効果音がつきそうな速度で街中の人混みの
中に消えていった。

それにしても速い。と感心しているともう一人腰に剣を二本吊
った人が顕れた。

「くそ、どこ行きやがった。おつ、ハンクかシェイド見なかつ
たか」

「見ましたが追っかけるなら無理ですよお」

「ああああつ、くっそ、ギルド別の大会打ち合わせがあると
いいのに。あ~~~~」

紹介しようシェイドさんの事を呼び捨てできる人の一人副ギルドマスターのベクトさん。

さらに補足すると副ギルドマスターの方は四つの支部があるギルドホームに必ず一人いるようにしてありベクトさんはここ王都支部にいます。

「お前ら、今戻ったのか。だったら掲示板確認しとけよ。おもしろいイベントがあるぜ」とそんなことを言ってベクトさんはホームに戻っていった。

「ベクトさんでもシェイドさんは捕まえないんですね」と、何気なく呟いた。それに

「ん〜、ああ単純な速さだけだったらシェイドさんに追いつける奴あうちのギルドだったらホリイさんとシエルぐらいだぞ〜」とハンクさんが答えた。

ちなみにホリイさんとシエルさんは二人とも霧夢ギルドの副ギルドマスター。面識はないが聞いた話だとどちらも女性プレイヤーでホリイさんはユニークスキル《魔人》を持っていて、シエルさんはユニークスキル《虚構》を持っててらしい。

霧夢の副ギル全四名はみんなユニーク持ちらしい。

そんな会話をしながらホームに入り掲示板を見に行った。

『第二回ギルド対抗闘技大会』

でかでかと、掲示板を埋め尽くしていた。細かい内容が下に書いてあった

『一週間後に行われる二回目のこの大会。各ギルドから四人一組のチーム一つとギルドマスター一人の二チームでトーナメント形式で行われます。』

参加するギルドは前回と同じく第一位から第八位のギルドです。なお四人チームには副ギルの四人に選びました。

不服のある人は誰でもいいので副ギルを一人倒してから講義へ来て下さい。

予約チケットのみ参加ギルドは半額となっています。当日チケットは通常料金ですので注意してください

w r i t t i n g b y s h a d e
『

これは、また一
波乱おきそ
うな気が
した俺だ
った

次回予告

トー「はい、始めました。次回予告コーナー」

シル「今回はゲストに霧夢の副ギルドでもあるベクトさんに来てもらいました」

ベクト（以下ベク）「おう、よろしく」

トー「では始めに、Sさんから伝言があります・・・『やあ、ベクトめんどくさいから代わりに出といて下さい』だそうです」

ベク「なあ、そのSさんシェイドだろ」

シル「続きまして、Sさんからの報告です・・・『来週の定例会さばります』だそうです」

ベク「いや、おい出席しろよ。お前はギルドマスターだろ」

トー「次回、シェイドの陰謀。俺達はシェイドさんの手のひらの上に躍らされている」

シル「ベクトさん、僕達はシェイドさんの指示通りに動いていたのです。嵌められましたね」

ベク「くそ、シェイドオオオ~~~~~」

トー「そうしないと次回予告では生きていけない!!」

story 13 実力（前書き）

どうも、ジャツロです。

最近どんどん文章の質が落ちているような気がしてならない。

・・・仕切りなおして、今回は文章量を増やしてみました。

今後一話ごとの文章量を増やすことによって更新速度が変わるかもしれない。

気長に待ってもらえとうれしいです。

一週間後にあるギルド対抗戦。掲示板に書かれた言葉にア然と
していた。

『不服のある人は誰でもいいので副ギルを一人倒してから講義
へ来て下さい。』

この記述だ。これってシェイドさんの何を考えているのだろ
うか

「ほう、こいつぁ・・・よし、ベクトさんと決闘してくるぜ
え」と、ハンクさん

「ハンクさん。うちのギルドってこんな身内を倒してこいつて
いうのはよくあるんですか」と、俺は疑問をなげつけた。

シルクも似たことを考えていたのかハンクさんの顔を見ていた。

「滅多にないぞお・・・あゝそうかツールもシルクも前大会
を知らないのだったな。だったら俺が教えてやるか

前大会もこれと同じことがあったんだが……あ、めんどくせ
くからシェイドさんの意図だけ簡単に言っな。

副ギルは全員ユニークもちだろ。今はもう少ないが『強さ』を求
める奴は多くいるから、腕試しでそいつらがシェイドさん達に決闘
を受けにくるわけだ。

ま、そのことごとくを拒否した訳だが、さすがにギルド内でも煮
えたぎらない奴らが多くいたからな、『副ギルを倒してチームに
参加したい』を理由にこの期間だけ決闘していい事になってるんだ。

シェイドさんの大きな気まぐれだと思っがな」

長い説明を俺達は聞き、ハンクがベクトさんの方へ行くのを見
た。

「ベクトさん、決闘いいですか」

「お、ハンクか。いいぜ受けてたつぜ」

そんな、会話が進んでいてホーム内の人達もいろいろ言いだし
た。

「ハンクがんばれ」 「負けんなよ」 「ベクトさんなんて倒してしまえ」と、ほぼハンクさんを応援する声しかなかった

「なあ、シルク。ベクトさんとハンクどっちが勝つと思う」

「ハンクさんが勝ってほしいけど多分ベクトさんが勝つと思うよ」

と、俺達は俺達でこの決闘について話していた。

「みんな、ハンクさんしか応援してないけどそんなにベクトさんは強いのか」

「僕は実物を見たわけじゃないからどうすごいのか知らないけど、ベクトさんの《神速剣》っていうユニークスキルがすごいらしいよ」

そこまで言ってみんなが動き出しので俺達も動き出した。

このギルドホームにはミニ闘技場があり、みんなそこへ向かった。

ミニとは言つが訓練や一対一での戦闘を行うには申し分ない広さである。

みんなが見る中二人が一定距離で立っていた。

上の方にREADYと出てきた。

- - - 始まる。

fightの表記がでて真っ先に動いたのはベクトさんだった。

速い。とにかくにも速い。シェイドさんやハンクさんも速いがベクトさんのほさらに二段階上をいつていた。

ベクト視点

俺は、シェイドのように『力』の出し惜しみはしないタイプだ。

だから、俺は開始と同時に《神速剣》アーツ《瞬動》を使った。俺の敏捷パラメータは二倍に跳ね上がる。

一気に間合いを詰めた俺はアーツ《分影剣》を使い虚像の分身二体を飛ばした。

だが、ハンクは冷静に《スローランス》、風の刃を剣に纏わせリーチを伸ばして斬撃をおこなう《スラスト》のコンボで《分影剣》の虚像は倒され俺の剣とかちあった。

「やるじゃねーか、ハンク」

「こっちは余裕ないですよ、ベクトさん」

と話して、一旦距離をとった。

次に攻撃を仕掛けたのはハンクだった。

《片手剣》アーツ《ウルブストライク》突進系の攻撃で剣を前に飛び込んできた。

ベクトは考えた《ヴァリアブルアタッカー》を使うハンクの攻撃はどれも次の攻撃への足掛かりになると、だから次に繋げるとしたらどのアーツを繰り出してくるか。

すぐに、二つ《ウルブストライク》に繋がる技を思い出した。
一つは《槍》アーツ《旋風》に繋げるか、もう一つは《斧》アーツ
《ストライクスイング》に繋げるか、二つに一つ。

だが、俺はすぐに予測がたった。《旋風》を使うと、《ストライクスイング》は確かに攻撃力が高くていいが技の初速が遅いこれは俺だとかわせるとハンクは分かるはず。だから、当たらない《ストライクスイング》は使わず初速が速い《旋風》を使うことを。

剣を前に飛び込んできたハンクの攻撃をかわして槍に武器が変わっていることを確認した。

そして、流れるような動作で《旋風》の構えにうつろうとしていた。

もともと、読んでいたので《旋風》を止める攻撃をした。

《神速剣》アーツ《三瞬斬》俺の一降りと風の刃二つで三回同時に切り付ける攻撃で無理にでも槍で防がせた。

俺は、このチャンス逃さなかった。《神速剣》アーツ《瞬影連閃斬》を使った。こいつは、このアーツの攻撃コンボ中だけ敏捷パラメータを四倍にできる

初撃は突き、次は右肩への斬撃、次は槍への斬撃、次は……
・と、計48連続攻撃を浴びせた。

ハンクのライフは残り一割を切っていた。

「よし、終わりだハンク。俺の勝ちだ」

勝ち負けの基準はライフの八割を削った方が勝ち。逆にいえば残りライフが二割を切れば負け

「はあああ、ありがとうございました。やっぱり強すぎます
よくベクトさん」

ツール視点

俺は、最後のシーンに言葉もでなかった。微かにしか斬撃が見えなかったが、あれは間違いなくかなりの連続攻撃。

ハンクとベクトさんが握手して、周りから歓声と拍手が挙がった。

その後、俺とシルクはさっきの決闘について語り合い。大会の

予約チケットを購入し宿へいった。

次回予告

シェ「ファイ ルファン ジー?? 最高」

ベク「お前は初っ端から何言っていやがる」

シェ「だって今回 story 13 じゃないですか」

ベク「ああ、そーだなー。てか、お前クリアしたのか」

シェ「そんなことはどうでもいいです」

ベク「お前がふった話だよな」

シェ「はい、今回は名前はあるけど容姿についてあまり語られてない人達の紹介です」

ベク「あゝ、せめてホリイがいればいいんだが……」

シェ「ストップです。ホリイさんやシエルさんの情報はどうせ大会が始まったら紹介があるでしょうから今回はなしという方向で」

ベク「おい、どうせって本人聞いていたら知らねーぜ」

シェ「全力で逃げるので大丈夫です……おっと、話が脱線しますね。ではではまずこちらにいるベクトサン綴りは VECTSU N……」

ベク「嘘つくな。誰がベクトサンだ。さんを棒読みするな、そして名前に加えるな」

シェ「しかたありませんね。彼の名前はベクト、綴りはVECT身長は・・・何センチ？・・・ああ、そうでした172センチです。黒髪ショートヘアの赤眼ですね」

ベク「お前紹介するなら覚えとけ途中で聞くな。とつ、次は俺が言う番か・・・ツールか、こいつ主人公なのに容姿の説明もなかったのか・・・あゝ、身長は168センチ。青髪黒眼、髪型は・・・説明しづらいな。言わなくていいか？・・・いいのか・・・以上だ」

シェ「今はこんなものですかね」

ベク「なんか後半てきとーだったが。まあ、いいか。帰って寝るか」

シェ「それではまたの次回予告で」

s t o r y 1 4 レッドプレイヤー（前書き）

どうも、ジャツロです。

ユニーク1000人越えていました。

読んでくれている方ありがとうございます。

あれ、何か日本語がおかしいな。でもうれしいからいいや

story 14 レッドプレイヤー

今はハンクさんの決闘があつた翌日の朝。

昨日、シルクにパーティー組んでレベル上げをしようと言つたが先約があつたようで断られた

なので今日は一人なのである

「そういえば、俺って今のところシルク以外仲いいやついないな」

といつてもまだ二日しかたっていない。あまりにも二日間の内容が濃すぎたため時間が長く感じる。

俺は何にしてもこのまま宿屋で待機しているわけにはいけないと思ひとりあえずギルドへ向かった

――ギルドホーム前――

また何か中が騒がしい。まあ・・・どうせシェイドさんが元凶だろう。と思ひながらホームに入った。

中でざわめいている集団のほとんどが掲示板の前に密集していた。

俺は何があるのかわからないから近くの人に聞いてみた

「すみません、何かあったんですか」

「ん、ああ、レッドプレイヤーギルドが一つ崩壊したんだよ。しかも三日前ぐらいにギルド間で注意があるほどのギルドがだ」

レッドプレイヤー……プレイヤーキルPKを複数人行ったプレイヤーのギルド。

ここでは、プレイヤーには三種類ある。《判別》系スキルによりプレイヤーは三色の色により見分けられる。緑、黄、赤。まず緑、これは普通にゲームをプレイしていればこの色である。

つぎに黄色、決闘以外の時に他プレイヤーに攻撃したり、一人までPKをした場合に黄色になる。ただし、誰にだってミスはある、ということと黄色になってこちらの時間で20日間誰にも攻撃を加えたりしなければ緑にもどる。だが、逆にまた人に攻撃したりしたら赤になる。

最後に赤、危険域だ。黄色の際に期間内に他プレイヤーへの攻撃、もしくは複数人をPKした際になる。基本的に前者はうっかり、後者は故意にやっている場合が多い。そして、比率でいっても前者より後者の方が多い。

もちろん赤に一度なってしまったら黄にも緑にももどれない。

だが、赤プレイヤーにはデメリットがある。デメリットとして、一つにデスペナルティが1レベルダウンになる。そして、もう一つモンスターと同じ対象になる。

普通に考えるとこれほど厳しいものはないが、ほとんどの赤プレイヤーはPKによるアイテムドロップをおこなっている。

決闘以外の方法でPKをおこなうとPKされた人の装備品の一つが一定確立でドロップされる。

他にもいろいろ理由があるかもしれないが主にそれらだ。

いろいろと周りの人が喋っている情報をまとめるところだ。

二日前まで活発に動いていた赤プレイヤーギルドが一夜で崩壊した。そのギルドは暗殺や無作為に人を襲う危険なギルドで人数も30ぐらいと多く平均レベル70ぐらいとかなり強くちやうど二日前に霧夢ギルドの上位の人が一人PKにあっていたらしい。

そして、第一位のギルドが偵察に何人かで見張らせていたらしいが昨日の夜に偵察にいた人達全員が何者かに気絶させられ気がついたらギルドホームが崩壊していたそうだ

・・・長々と考えてしまったが今の俺にはとくに関係のないことだ。上位グループ側の方はここからだとかかなり遠いのだ。そんな奴らはあまりここ王都にいない。

俺は話せる相手を探した・・・ハンクさんがいた

「ハンクさん。おはようございます」

「おう、あ～～～ツールか。なあ、この騒ぎはなんだ」

今ホームに入ってきたばかりのハンクさんを呼んだので状況がわかっていなかった

俺は整理した情報をハンクさんに伝えたら、驚かれた。

「ハンクさん、皆さんも驚かれていますけどそんなにすごい事件なんですか」

「お前っ、あゝそうかこっちに来たばっかだったな……. いいか、まずそのギルドは赤ギルドでも五本に入るほどやばいんだ。なによりレベルが高いのもあるがぁいつらは必ず八人パーティーで来るんだ一人に対してだ」

かなり、えげつない話だと思った

「そんな集団行動のエキスパート達が固まっているギルドホームを潰すことはかなり厳しいはずなのにその正体不明の奴はたった一夜で滅ぼしたんだぞ。誰だって驚くぜ。第一そんなことが可能そんな奴は大半有名人だ。そんな奴がギルドを潰したなら名前がでてくるはずだ」

この喋る直前に得た情報はそのギルドを潰した人はたった一人だということ

「ということは、潰されたことにも驚きですが。そんなすごい人がいることも騒ぎの一つなんですね」

口調が変わっているが今言ったのは俺だ。いくら俺でも相手が尊敬

できる強い人や年上には敬語ぐらい使っぜ。

「そついえば俺を呼んだが。すまねえ、なんか用があつたか」

「ええ、低レベルの時、何してましたか」

「ああ、俺の場合あの狼の森でレベル上げていたな・・・
・まあ、お前ならあの銀狼と結構いい勝負していたしソロでいった
らかなりうまいんじゃないのか」

やはりあそこは今の自分のレベルにちょうどいいのか。しかし・・・

考えていた俺をみたハंकさんが

「もう、銀狼金狼はでね〜ぞ〜。あいつらは金狼を狩った時点
でそこにはもうSEは起きね〜」

という情報をくれた。ちなみにSEはsudden encounterの略で突発性エンカウントのことだ

「ありがとうございました」と礼を言い、この一週間何をやる

かを決めた

あの森でソロプレイ！

story 14 レッドプレイヤー（後書き）

次回予告

シエ「ベクトさん、最近あなたばかり出ていませんか」

ベク「じゃあ、さらに追い打ちかけるぜ……お前は本編に当分でてこない」

シエ「な……に……」

ベク「ざまあみろだ。日ごろのおこないがわりいからに決まってっ
だろ」

シエ「私のどこがいけないのです。少し面倒だから会議を抜けだしたり、ひなたぼっこ日和だから会議を抜けだしたり、蝶々が飛んでいたから会議を……」

ベク「抜けだし過ぎだ。そして、最後のは嘘だろ」

シエ「おお、神よ私をお助けください」

ベク「お前なんか助けるかって」

シエ「なんですと、助けてくれないなら私が神になる神倒す」

ベク「おい、どこに行く。……いや、途中からわけがわからんがあれは今からある会議への……ちくしょう、まちやがれ……次回、ソロプレイ。あゝ、なんで俺が言わなきゃならん」

story 15

ソロプレイ（前書き）

どうも、ジャツロです。

布団の魔力から逃れられない今日この頃。

話が進んできたので一度読者様の質問に対して答えたいと思っています。

活動報告に質問用を作りますのでそちらのコメもしくは感想などで書き込みをお願いします。

期限はとくにありませんので疑問に思ったことはどしどし書き込んでくださいできるかぎりお答えします。

最後に、答えられなかった質問はこの先本話で語られる……と思いますのでご了承下さい。

……慣れないことはするべきじゃないのだろうか……
まあいいや。

story15 ソロプレイ

まず、ソロプレイのメリットとデメリットについて語ろう

メリットとしては倒したモンスターから得られる経験値、ドロップ品をすべて自分のものにできること

デメリットとして、モンスターに囲まれたり状態異常があつた際に一人ですべて対応しなければならぬ。要は死ぬ確率が高くなるわけだ。

俺の今のレベルは11あの森は入口付近は3〜5レベル帯、真ん中ぐらになると5〜10レベ、さらに奥へ行くと12〜15となる。

シルクといった際には真ん中ぐらいのとこだったと思う。奥まで行かなければ俺一人でも大丈夫そうなレベル帯だ。

自慢じゃないが俺の攻撃力はゲイルソードによってかなり高くなっている。レベル8までの狼なら《ソニックエッジ》の衝撃波だけで倒せる。

ここまで思考してギルドをでて準備をすることにした。

そうそうこの前、最後はハンクさんに止めを刺されたが銀狼からアイテムをドロップしていた。

《銀狼の尻尾》・・・これは高く売れるのだろうか。わからないのでとりあえず《マルチーズ》へ行くことにした。

「へい、らっしやい」と迎えてくれたのは久しぶりの登場のグラサンに輝くヘッドのジ・・・ローさん

「どうも二日ぶりです。ジローさん」

「二日しかたっていないよな・・・俺の名前はジンだ」

おっと俺としたことが失敗した。ジンさんでしたねこの人

「で、ジンさんこのアイテムなんですが・・・」と俺はメニューにある《銀の尻尾》を物質化させ見せながら

「どのくらい値がはりますか」

「ん、銀の尻尾か……2万つてとこか……おつ今それ在庫切らしてるから俺に売ってくれるか」

「えっ、2万。2に0四つで……まじ。これってそんな高いんですか」

「いや高いって……あ、すまねえ、ついこっちの金銭感覚で言ってしまったな。今のお前なら確かにいい値だ。だがこれから強くなつていくと100万という単位がぼんぽん動くぞ」

2万なら申し分ない売ろう……だが

「じゃあ、売りますが1万で」

「お、なんで」

「ジンさんこそ忘れたんですか1万の借り……これ返さないと弱みにされるでしょ」

「あの剣の代金か。おう、わかったぜついでにシェイドさんにも報告しとくぜ『貸し借りはなくなった』って」

《銀の尻尾》を売りお金をもらい店をでた。

後は回復アイテムの仕入れだ。

回復アイテムは前回と同じく1番安いライフ回復用の怪しい緑色の液体が入った瓶を10本買った。ちなみに味はリンゴ味だ。

必要なアイテムを揃えたので森へ行った

- - - 《狼の森》入口

着いた。

まず俺は入り口付近にいる子狼で闘いに慣れようと三匹ほど一対一で闘った。攻撃パターンは狼系はほぼかわらないのでいいシュミレーションになる。

慣れてきたので次は三匹固まっている子狼に一対三で挑んだ。奥の方へ行って万が一複数の白狼と闘わなくなったさいのシュミレートは必要だ。

三匹を倒して奥へ行った。

- - - 30分後

「はっ、はっ」

俺は息を切らしながら走っていた。なんだろうか、また白狼に囲まれた。今回は逃げ道があったがしつこくついてくる狼13匹

俺は再使用可能になった《ダッシュ》で差を開いた。余裕ができたので後ろを見た。だいぶ離れているが明らかにこちらに白い塊が近づいてきている。

ふと思った今敵は固まってまっすぐこちらへ向かってきていると・・・チャンスじゃないか

白狼を一発で消せるアーツ《ソニックエッジ》だが欠点があるとしたら一つ衝撃波が届くまでにラグがある。しかたないことだ中距離から放つと動きが速い狼には当たらない

だが、今の状況はかなりいい。どんな生き物でもまっすぐ加速したものが曲がったり減速したりすることは容易にできない

俺は目の前から向かってくる狼達に《ソニックエッジ》をお見舞いした。

13匹中6匹の消滅。さらにまだ距離があつたので再使用可能時間まで待ち二発目も喰らわせた

残り2匹。後は普通に近接戦闘、斬って躲しての繰り返し。

倒しておえておもった。これはいい作戦じゃないかと

次回予告

シェ「へい、大将なんにしやすいか」

ベク「・・・・・・・・・・」

シェ「おっと、反応が冷たいですね。にぎにぎ」

ベク「悪いシェイドーつつ消化させてもらっぜ」

シェ「ええ、かまいませんよ。はい、グレートマスのにぎり」

ベク「おう、わり・・・じゃなくて。なんで板前の格好なんだ。なんで寿司握ってんだ。そして最後になんだ始まりの喋り方は・・・・・・はあはあ・・・・・・」

シェ「まず1番最初の答えは板前さんになりたかったから、2つ目は《板前》スキルを習得したから、最後のはギャップ萌え」

ベク「だめだ、つつこむ要素がまだあるのにつつこみ力が足りねえ」

シェ「ははははは、あなたのつつこみ力では私のボケ力にはかなわないですよ。ははははははははは・・・・・・トゥービーコンティニュー」

ベク「続かねーぞ」

story 16

謎の祭壇（前書き）

どうも、ジャツロです。

アクセス数が増えてニヤニヤしてしまう今日この頃

次回更新が諸事情により執筆速度が遅くなるかもしれません。

・・・前回にも似たようなことを書いたような気がしますができるかぎり頑張ります。

俺は再度森の中を走った……いや走り回った。

なるべく多くの狼を集めるために白狼がいる場所へわざと行き
おびき寄せる

そう、さつきと同じ要領で《ソニックエッジ》で一方的に倒す
ため

俺はこういう闘い方のパターンを見つけるのが得意らしい。そして、
それを見つけることが好きである。最終的に効率ばかり考えてしま
うことが欠点だが……

そんなことを考えながらまた一つの群れを倒した

それからどうだろう。昼頃について6時間ぐらい経っただろうか
周りは森のせいか暗い。

最後に自分のレベルを確認したときに達成感があった。俺のレベルは16になっていた。

そして、俺は初日のレベル上げを終えギルドへ向かった

――ギルドホーム内

「よっ、シルク」

「トールか、ハンクさんから聞いたよ。どうだった」

「すげえ順調、一気に5レベル上がった」

「え、ほんと」と疑われたので俺のステータスを見せると同時に今日やっていたことを言った

「あゝそうか、君は攻撃力があるからそんなことができるのか。考えもつかなかったよそんな方法」

「そっというシルクはどうだったよ」

シルクの先約は他の人とパーティーを組んで行くということだった
が

「酷かったよ。何故が僕が行った時には……」

と成果や愚痴などを語り合って今日が終わった

――五日後

結局俺はあのやり方が一番効率がいいと思い五日間同じ方法でレベル上げをしていた。いや、真ん中の方のレベル帯だとだんだん経験値がものたりなくなってきたので、奥へ行った。

奥にいたのは相変わらずの白狼ではなく、白と銀の強さの間のグレイウルフ灰狼がいた。だがスピードが少し上がったのと防御力が高くなったので始めは苦戦したがなんども闘うにつれて攻略していった。

今の俺のレベルは19になった。そうそう、あと《両手大剣》の熟練度496（上限1000）と上がり、新しいアイツも7つ増えた。

そんな大会が催される2日前だ

――《狼の森》奥地

「ラスト1」

俺はレベル15の灰狼と戦闘をおこなっていた。こいつを倒せば《両手大剣》スキルの熟練度が500になりレベルも20となる。

俺は、始めに突進系アーツ《スラッシュ》を使い敏捷パラメータの上昇とともに突き攻撃をした。

灰狼は左の方にこれを躲したが俺はそれを読んでいた。

即座に左へ向き《ソニックエッジ》の強化版《ソニックエッジ・散》を放った。

赤色の衝撃波が灰狼へ向かった。途中で刃のような衝撃波が六つの刃に分裂した。灰狼に六つの刃が襲った

灰狼に五発命中させている中俺はさらなる追撃をおこなう

《両手大剣》スキルはとにかく大ダメージ技が多い。灰狼ぐらいだとアーツを二つほど当てれば消せるぐらいに……

アーツ《フレムレイド》・・・斬撃と爆発の剣撃・・・を使い
灰狼に当てた。

爆発音が森に響きながら狼は消滅していった。

「よし」と言って倒したことを再確認して自分のステータスを
確認した。

レベル20《両手大剣》スキル熟練度503・・・とうとう目
標が達成できつい「よっしゃ」とガッツポーズしてしまった。

だがこれだけで終わらなかった・・・帰り道で事件は起こった

俺は、目標達成できたことに喜びながら道に戻っていたが一向
に森をでない。

おかしいと思った俺はマップを開いた

「うおっ、なんだ」

マップの画面は真っ黒になっていた。バグか？と思いログアウ
トしようとしたが・・・

ログアウトが使えない・・・いや、正確には敵から攻撃を受け続けている常態と同じ扱いになっている。

ログアウトできるのは戦闘常態以外の時、敵から攻撃をくらえばその後30秒待たなければログアウトできない。

とりあえずわけがわからないがもしかしたら歩き続ければ出れるかもしれない、と思い歩みだけは止めなかった

歩いているうちに冷静になったが、今度は謎ばかり増えてきた。

うんうん唸っていたその時前の方に石造りの建造物が見えた。
そこへ向かって走った。

- - - 祭壇

石造りの祭壇のようなものだった。

奥の壁に狼の絵らしきものがりその前には蒼い大剣が突き刺さっていた。

蒼い大剣は気になったがまずは壁画を見た。大量の狼とそこに
ある蒼い大剣を持った人

見た感じ蒼い大剣を持った人が狼達を操っているように見える。

他に何か変わったものはないか祭壇を調べたが・・・とくに何もなかった。

・・・この大剣あからさまにあやしいのだが確実に持ったりしたら何かありそうだな・・・

「あゝもう考えるのも無しだ。どうせこれしかもうないから手に入れてしまえ」

俺はなかばやけくそになって剣を掴んで抜いた。

「・・・何も起きね・・・時間差かよっ・・・」

時間差で大剣から眩しく光りだした。

- - - 《狼の森》奥地

ん、という言葉とともに俺は起きた。さっき灰狼を倒した場所だった。

「リアルな夢だったな……ん」

リアルな夢だと思っていたが右手には蒼い大剣を持っていた。

「あ……夢じゃないのか……」

ちよつとぼんやりしていたが、冷静になり自分に異常はないかステータスを確認した。

ステータスは……異常なしと装備、装備……《蒼剣ウルブソウル》？……ああ、この大剣か……武器の説明は……

『蒼剣ウルブソウル：大剣 - 蒼狼の魂が宿った蒼剣。この剣を持つものは狼を操る力を持つ』

なんて大層な大剣だ装備上限は……《蒼狼》スキル保持……

そんなスキル俺は持つて・・・

そこで、俺はすぐにスキル表を開いた。

・・・ある。なんだこのスキル・・・

わからないことが増えてきた。大分こちらがわの知識をもった
と思ったがわからなかった。

とりあえず、シルク達に相談するべくギルドへ向かった。

次回予告

シェ「はい、始めました。シェイドの次回予告コーナー」

トー「久しぶりにまともな前フリだな」

シェ「謎の祭壇に迷い込むツール君」

トー「夢でも見てるのかなあ」

シェ「そして、そこで手に入れた謎の大剣とスキル」

トー「ありえないシェイドさんあんたは本当にシェイドさんなのか」

シェ「次回、魔武器。彼が持ってしまった力は・・・」

トー「ベクトさん、シェイドさんがかしいです。まともなことしか言っていないせん」

シェ「それでは、またの次回予告でさようなら」

s t o r y 1 7 魔武器（前書き）

どうも、ジャツロです。

PV10000アクセス突破！

多く読んでいただいてうれしく思います。

――ギルドホーム内

そして、俺は難無くギルドに戻れた。

まず、ホームにシルクやハンクがないか探した……見当たらない。

どうしようか、と悩んでいたら

「おやおや、どうかしましたかツール君」

「うおっ」

背後からいきなりしゃべりかけられた。そんなことをやるのはこのマスターのシェイドさん。俺は突然のことにびっくりした

「うおっ、とは酷いですね。せっかく困っていそうだから話しかけたのですが」

「すみません……………」

いや、ちょうどいいのではないだろうか。シェイドさんならわからないことがなさそうだし

「あゝ、シェイドさん少し聞きたいことがあるんですけど……………」

「ふむ……………」

俺はシェイドさんに一連の出来事を話した。

「……………で、これってなんでしょうか？」

手に入れた蒼剣を見せた

「多分、これ魔武器ですね。それと君が手に入れたスキルはユニークスキルだと思いますよ」

蒼剣は魔武器で《蒼狼》はユニークスキルだったのか……………

「……………魔武器ってあれですか。この世界に一つしかないって

「...感じの...」

「ええ、そうです...まずツール君、君が行った祭壇でその剣を手に入れることがそのスキルの発現条件でしょう」

まあ、そうだろうなと思った。

「...こちらに来なさい。今ユニークスキル持ちが皆さんに知れたら一騒ぎになるので...支部長部屋で話しましょう」

俺はついていった...いくら俺でもわかることはある...
・ユニークスキルや魔武器のようなレアなものは誰だって知りたがる...

...支部長部屋

「おや、ベクト。いたのですか」

「むしろお前がいるほうが驚きなんだが...ん？あゝっと...
・ツールか」

「どうも、ベクトさん」

「ちょうどよかったベクトにもいて欲しかったんですよ」

「なにがだ？・・・またやつかいごとじゃないだろうな？」

「・・・トール君がユニークスキル持ちになりました魔武器もちやんと持ってます」

「あれ、だして」とシェイドさんに言われたので蒼剣を物質化させた。

ベクトさんが近づいてきて蒼剣をじっくり見て

「確かにこの蒼色の大剣は今までに見たことがねえな」

ベクトさんは定位置らしい椅子に座った。俺やシェイドさんも椅子に座った

まず、始めにベクトさんが口を開いた。

「つくことはだ、当分トールを守る存在をつくったり、そのス

キルについて調べたりしなければならぬのか」

「そうですね、二日後に大会があるじゃないですかその日になったらシエルさん達も集まります。なのでその際に今後のツール君の処遇について決めたいと思います……いいですか？」

俺は頷いて肯定したが聞きたいことがでてきたので聞いてみた

「やっぱりこういうのって噂になったりするんですかね」

シェイドとベクトは顔を見合わせて苦い顔をしたベクトさんが

「いや、すげえぞ実際。俺の時なんかホーム選択した家の前に人がうじゃうじゃいたぜ……っつかあれはトラウマになる」

続いてシェイド

「私の場合は赤プレイヤーに幾度となく襲われましたね。いやですねー魔武器欲しさで狙ってくるのは」

「そっぴやツール。お前の剣名前は何て言うんだ？」

「《蒼剣ウルブソウル》です。ベクトさん達の魔武器ってなんですか？」

「俺か？俺のは《神剣レムルーン》と《速剣ヴァルギオン》だ。そんで……」

ベクトがシェイドの方に顔を向けた。

「私のは……」

ドン！という効果音がいそうなぐらい力強く扉が開いた

俺はドアの方を見た。

そこには一人の女性が立っていた。

「シェイド、来たよ」

次回予告

ト「・・・トールです・・・合言葉は陰の謎・・・」

ベク「よくきた・・・まあ座ってくれ」

シル「では、始めたいと思います・・・前回の次回予告が普通だった件について・・・ジンさんお願いします」

ジン「こちらで調べた結果・・・何かをしていることが判明しました・・・何かは依然わかりませんがそれに忙しくて次回予告に手がまわらなかったようです」

シル「ありがとうございます。ハンクさんも何かあったそうですね」

ハンク（以下ハン）「ああ、あれは俺がバナナの皮でこけた時だった・・・普段のシェイドさんなら罠を一つで終わらせるはずがないのにバナナの皮だけだった!」

ベク「なんだと!シェイドがバナナの皮一つしかできない理由はなんなんだ」

シル「皆さん、一度落ち着きましょう・・・最後にトールがシェイドさんの動向を探っていたはずですね」

ト「えーっと・・・ありえない事実が発覚しました・・・昨日18時39分三箇所シェイドさんを確認・・・どれもシェイドさん

本人と面識のある人の証言です」

ベク「待て、その時間は俺といたはず・・・」

ト「実は違う場所でシルク、ジンさんも会っていました・・・」

全員「・・・・・・・・」

ベク「・・・・・・・・わからないことが増えたが引き続き我らSSC（シ
エイド究明委員会）はシエイドの調査を行う！」

全員（ベク以外）「「イエッサー」「」」

ベク「じゃあ、以上で解散だ」

シエ「…………面白いですね」

story18 シェイドについて（前書き）

どうも、ジャックです。

毎回前書きにあらわれますがでないと私の存在が忘れられそうで・・・

・・・そうシルクやジンのように・・・

story 18

シェイドについて

「シェイド、来たよ」

扉を開けた所に立っていたのは紅髪ツインテール紅目炎のような紅ではなく血のような紅、身長は俺の首ぐらいの少女……。面識は俺にはない

「おやおやホリイさんじゃないですか。早かったですね」

「よっホリイク」ねえねえ、シェイド」俺はスルーかよ」

二人が話し込んだのでベクトさんにホリイさんについて聞いた

「ベクトさん、あの人ってうちの副ギルなんですよね」

「おう、そうだ。うちのギルドの副ギルで《魔神》スキルを持つていてSFC……。シェイドファンクラブの会長だ」

へーそうなんだ……。ってなんだSFCって

「ベクトさんSFCってなんですか・・・」

「なんとも言わせんなって・・・そっぴゃお前あんまシェイドの事しらねーのか。しかたねーシェイドはな・・・」

とりあえずベクトさんからのシェイドさん情報をまとめると

- 1、かなり、モテている。ファンクラブがある
- 2、強すぎる
- 3、レベル123
- 4、謎が多い

まあ1、2、3はよしとたくはないがしょう・・・4はベクトさんで謎ってたまにシェイドさんがわからん

「とまあ、そんな感じだな・・・あとなホリイは見ての通りシェイド以外興味ももたないから下手なことしてみる・・・死ぬぜ」

そうそう霧夢の中の女性の三分の一はSFCだそうだ。さらに余談だが黒ローブでフードを顔を隠すように被っているのは顔を見られたら《死霊使い》としても霧夢のギルドマスターとしても有名な人なので騒ぎになるからだとか・・・なんだろうこの人凄い人なのに全然尊敬できないな

ベクトさんとシェイドさんについて喋っていたら

「トール君、今から模擬戦をしませんか？」

「いや、シェイド。お前とやったらあんま模擬戦にはならねーだろ」

「いえいえ私がやるのではなくホリイさんがやるんですよ」

「ちよつと待って下さい。なぜ俺が模擬戦を・・・」

「ええ、そうですね。理由としては君のスキルと武器と今の実力の把握ですかね・・・確かに強さに差がありますね・・・ではタッグ戦にしましょう私とトール君、ベクトとホリイのタッグで・・・え、なんですか・・・いやこうしないと実力差が開きますし・・・」

ホリイさんをシェイドさんが説得し始めた時ベクトさんが話しかけてきた

「あゝ、そついやもう一つ言ってなかったことがあった。実はな・・・」

え〜っと、これは言ってもいいのか・・・いいか。なんと、ホリイさんは一度シェイドさんに告白したそうです・・・で、シェイドさんはふつたらしい・・・ここが曖昧なのはベクトさんは直接現場を見たわけじゃないが泣きながら戻ってきたホリイさんの言葉が『いつかぜったい振り向かせてやる』だそうです

「とまあ、昔はそれなりに修羅場つてたんだがそのあとすぐにできたのがSFCつてわけだ」

と言われても反応に困る俺は無言でいると

「おっと、そんな深く考えんな。そんな話があつたぐらいにしとけ」

確かに俺が悩んだからどうだつて話だな・・・と思っていたらどうやら説得が終わつたらしい

「ではでは闘技場へ行きましょうか」

それはいいんですがなんかホリイさんがこっちに殺気全開で睨まれているような・・・さっき聞いた話だつたらそうなるよな

・・・ギルドホーム内闘技場

あゝ補足しとくと俺のスキルや魔武器は知られたらいけないので闘技場に侵入不可になっているので副ギル以上の権限がないと入れなくなっている

「では、まずスキルアーツに何があるか確認しましょう・・・
もちろん武器は魔武器で」

俺は《蒼狼》にあるアーツを確認した・・・

「一つ質問いいですか」

「なんでしょう」

「ユニークスキルってアーツ初めから三つあるんですか？」

普通どんなスキルでも初期にあるアーツはレベル1のアーツだ・・・このスキルには三つある

「ええ、そうですよ。ちなみに私は四つありました」

とりあえず、考えるのを放棄した・・・ユニークスキルは規格外・・・常識が通用しそうになさそうだ

「ええと・・・とりあえず三つありましたが一つずつ使ってみます」

「じゃあ、俺に使ってみろ」

「いきます」と言っただけ俺はまず《狼波》を使った。

型は《両手大剣》の《ソニックエッジ》と変わらなかった・・・剣を振るう蒼い衝撃波が飛び出した・・・ここまではただのソニックエッジだったけど途中から衝撃波が狼？の形になった

「うおっと・・・って追尾機能があるのか」そんなことをいいながら躲して衝撃波を斬撃で消し飛ばした

次に接近技だったのでベクトさんにはガードしてもらったとに・・・

また、声を掛けてからアーツを使った《狼牙尖旋》・・・剣に蒼いライトエフェクトがついて流れるように四連撃を繰り返した

最後の一つは召喚アーツだった。召喚するのは至って簡単「サモン アーツ名」で召喚できる

「サモン、チャイルドウルフ」この掛け声により目の前に小さな魔法陣が出現し白い子供の狼が顕れた。

キャウツという声とともに子狼は擦り寄ってくる・・・すげえかわいい

ついでにいろいろ命令してみた「おて・・・おかわり・・・ふせ・・・シェイドさんに噛み付け・・・おお」完全にいうことを聞いてくれるこれはいいな

「ちょっと、トール君私何もしてませんよね」

「俺は何もしてませんよ。その子が勝手にしただけです」

とまあ、アーツについては確認が終わったのだが魔武器である蒼剣はただのちょっと強い剣でしかなかった

ベクトさん達いわく武器に経験値ためることで武器が強くなったり特殊効果がつくそうな、とりあえず今は保留だ

「ではいろいろと確認も終わりましたしそろそろ模擬戦をしま
しょうか」

二人組に分かれた

次回予告

ベク「それでは、第二回SSC会議を始める……何かメンバー減ってねーか」

トー「えっと……みんな用事があるからって来ませんでした」

ベク「そうか……俺達二人だけか？」

トー「はい」

シェ「バンツ！」

ベク&トー「わっ！」「」

シェ「やーお久しぶりです。次回予告にシェイドが帰ってきましたよ」

ベク「なぜここがわかった……まさかメンバーがいないのは」

シェ「ええ、私です。ちなみに第一回の会議には私もいましたよ」

ベク「なに!？」

t o b e c o n t i n u e

――ベクト視点

なんで俺目線かって？そりやここにいらつしやる幼児体形の我が儘お姫様が前話ででてきたのにまったく喋れていないからわざわざこちらがわに・・・

「なんで、あんたとタッグ組まなきゃいけないのよ。こうなったのもあの少年が・・・ぶつぶつ」

「いや、だからバランスをとるために・・・いやツール殺すじやなくだな・・・あゝゝゝわかったもうお前はツールをやれ俺はその間シェイドを足止めしとく」俺達はてきとーに作戦をたてた

――ツール視点

「シェイドさん、俺は何をすればいいんですか？正直いつて勝つのは無理でしょ」

「ええ、まああなたは全力で闘ってくればいいんですよ。これはあなたの实力を見るものなんですから」

そんな風に言われて少し気がはれた・・・とりあえず全力をだそう

シェイドさんに二人のスキル構成どんなアーツを使ってくるかなど攻略方法をいろいろ教えてもらった

「では始めますよ。フィールド形成は森、時間は1時間で」

闘技場に木や草が出現し始め森ができた。その後、フィールドはじまで転移された。

3・・・2・・・1・・・GO

この表記がでて模擬戦が始まった

が、始まった直後地鳴りとともに何かが近づいてくる音が聞こえた

「シェイドさん・・・これってけっこうまずい状況ですか？」

そんなことを言っていたら徐々に前方が赤い光で・・・さすがに危険だと思ったので今いる場所から離れた直後に、ゴウツと

いう音とともにさっきまで立っていた付近の木が灰になった

．．．．．えゝつと、多分今のはホリイさんの《魔弾》だと思いますがアーツレベル4の予備動作なしの炎弾でかなり威力があるとのシェイドさんからの情報だったのだが．．．アホかかなりどころじゃないだろ予備動作なしで木を灰にできるものをかなりで片付けるなって話だ

あつ、何かこっちに近づいてきてる．．．あれはツインテール、ホリイさんか．．．．．逃げよう

とりあえず俺はそこらへんの木に隠れた。

「トール君出ておいで、でてこないと後で．．．チツ、ここにはいないか．．．殺る」

わお、とびつきり殺る気満々じゃないですか。呼んだあと殺る気しかないじゃないですか．．．．．そういえばいつの間にかシェイドさんいねえ！やばい一人でこの人と闘えとか無茶すぎ

俺は草や木で隠れながら距離をとった。

よし、だんだん離れてきて『パキッ』．．．．．なんで枝木が・

・

「見〜つ〜け〜た〜」

なんかあの人、目光ってますよ口から煙は・・・さすがにでてませんが

しかたがないので剣を構えることにした・・・徐々に接近してきそうなのでツインテールに《ソニックエッジ・散》をつかって牽制をいれた

六枚の刃がツインテールに向かって飛んでいったが

「しゃらくせー」

六枚の刃を突如出現した巨大な炎球で消滅させた。

あれは、確か《デイスチャージ》だったはず炎球を前に出現させるだけのアーツ・・・接近戦でつかわれたら躲せね・・・

六枚の刃を囿に俺は全速力で逃げた

――シエイド視点

・・・ふむ、これは《魔弾》っぽそうですね。とりあえず躲しときましょう。

シエイドはツールと逆側に躲した。

あ・・・ツール君あつちですね。ならば、私もあちらに行かな・・・

ザッという音が聞こえた

ガキイイイン

大鎌と剣がかちあう音

「たく・・・なんで俺の攻撃を見切れるんだお前は」

「長年の付き合いじゃないですか。勘ですよ勘」

鎌で弾いて距離をおいた

やってきたのは、そうベクト。

「ベクト、私はツール君の実力を見ないといけないんですけど・
・・」

「うつせえ、俺はお前を足止め・・あわよくば倒しに来たかな。そっちの言い分は俺を倒してからにしろ」

ベクトは最後にかっこよく剣をシェイドに向けた

「しかたありませんね」と言って大鎌を構えた。それに合わせてベクトももう一本の剣を抜き二本の剣を構えた

s t o r y 2 0

続・模擬タッグ戦（前書き）

どうも、ジャツロです。

なんだか執筆がかなり速いペースでできた休日がありました・・・

・ので何話か一気に更新！

―――ツール視点

まあ、とりあえず・・・逃げてる最中だ

「待ちなさい。私におとなしくやられる」

こんな感じだ・・・ちなみに今全速力で走ってます

「いい加減につ、逃げるのやめろ」

ホリイは右手を開いて前に突き出した

あれは確か《魔弾》！と理解した時には光りが見えて・・・

ゴウッ

また周りにあった木や草は灰と化した。俺はというと間一髪で
躲けてまた木に隠れた

- - - ホリイ視点

二発目の《魔弾》を撃ったがまた外した。撃った後《魔弾》で前方が見えにくいので当たったかわからない・・・がこれは闘技場内なのでライフがゼロになり死んだらシステムアナウンスによりわかるのでとりあえずは生きていることはわかる

「隠れるな〜出てこい〜」

叫んで・・・ここでようやく落ち着いてきた。

あ〜そういえばこれってあの少年・・・トール君の実力量るための模擬戦だっけ・・・まずい、またシェイド関連で暴走してた！でもトール君も悪いんだよ〜私が久しぶりにシェイドと会ったのに私以外の人の話ばっか・・・

ガサッ

物音が聞こえたので音がなった方にすぐに構えた

物音がした草むらからでてきたのはチャイルドウルフ模擬戦を始める前にトールが召喚していた子狼・・・

ホリイはすぐに子狼は囿で隙をつくるためということを理解して周りを見渡そうとしたら

- - - トール視点

かかった！

シェイドさんからこの方法を教えてもらった・・・子狼で注意を引きその隙に奇襲するという作戦だ

俺は完全に子狼に注意がいつているホリイさんの背後からアーツをくりだした。

《両手大剣》のアーツ《レイ・エッジ》をつかった・・・
・俺の蒼剣は光に包まれて光の剣となり光属性の四連撃今俺が持っているアーツで1番強い技

完全に隙だらけだったホリイに四連撃を当てた手ごたえがあったが

「そんなせこい方法じゃ私は倒せないよ」

声の方向からホリイが背後に立っていることがわかった

目の前のホリイは霧散した．．．アーツ《空蟬》一瞬だが自分の分身をつくれる．．．

不意をついたつもりがそれを利用された．．．負けだった

「というわけで私の勝ちね。じゃあ一緒に闘技場からリタイアしましょ．．．多分今シェイドとベクトがプチ本気で闘ってると思うよ」

シェイドさんやベクトさんの闘いを見たいと思ったので提案をのんだが．．．ホリイさん性格変わってね？

．．．闘技場・観客席

モニターにシェイドさんとベクトさんが映っていた．．．．．戦況は圧倒的にシェイドさんが優勢．．．シェイドさんのライフの残量は八割に対してベクトさんは残る二割

「やれやれシェイド」

ホリイさんにはシェイドさんしか見えてないし……

――ベクト視点

ガキイイイン

また攻撃を弾かれた。

「はあはあ……《瞬動》使ってなくても俺はそれなりに速いはずだがなんでお前は見切ってたんだよ」

一応、模擬戦だから俺は敏捷パラメータを上げる《瞬動》は使わないことにしていたが……。攻撃系アーツは限定してない……。攻撃系アーツにも攻撃中だけ敏捷が上がるものがあるがことごとくあの扱いすらそんな大鎌一本で捌ききりやがる

しかも、シェイドは今のところ魔法系のアーツを一度も使っていない……

「どうしましたかー、もうギブアップですかー。そろそろ諦めてくれませんかねえ」

「うっせー、俺のライフはまだあるっつうの」

あいつは余裕過ぎだろ……一か八かで大技をだそう

まず、刺突系アーツ《スキュラー》で隙をつくる！

ベクトはシェイドに向かって敏捷パラメータ二倍になった突進と突きをした

「あまいですよ」

シェイドは突きをした二本の剣をすくうように大鎌で弾いた

来た！

これはベクトの読みの範囲内……

「《ライトニング・バッシュ》」

《初級光魔法》の閃光を放つ目くらましの魔法系アーツ。大鎌を振るっていてダイレクトに光りを見てしまったはず

シェイドはバックステップして距離をおいていた・・・よろめきながら

今だ！

俺は、この隙を見逃さず接近し繰り出すのは俺の最強の技の一つ《瞬影連閃斬》しゅんえいれんせんざんハンクと闘ったときは剣一本だったが今は二本手数が倍になり攻撃回数も倍に・・・96連コンボ！

「残念！出させません」

斬る瞬間にそんなことを言ってきたシェイド・・・だが、こっちの攻撃は止まらないはず・・・と思っただが

シェイドは大鎌をもたず素手で

「《戦烈虎咆砲》せんれつこほうほう」

《上級格闘術》スキルの拳から青い気弾を放つアーツ

待て待て待て！いつの間にシェイド格闘系スキル上げてたんだよ。今まで使ったの見たことねーぞ

剣が届く前にベクトが吹き飛びあまりの衝撃に気を失った

- - - トール視点

模擬戦が終わってフィールドの木々などが消えた

なんだろうねあの人達なんだろうね・・・だめだ冷静になれ

「まだまだですねえ、ベクト君は」

そうここにいる金髪が肩までかかっている綺麗なお姉さんのように冷静な・・・誰？

「あつ、シエル久しぶりー元気してた？」

「あなたほど元気じゃないですけど元気ですよ」

多分話からして副ギルのシエルさんだと思う・・・金髪長髪の
透き通る碧い眼、身長は俺よりちよつと高い

「ベクト君しょぼかったですねえ。多分シェイドが《上級格闘
術》のスキルを持っていたことを知らなかったんでしょうけど・・・

」

「そうだよ、いつ格闘系スキル上げてたのよ！私も今知ったよ」

「え？知らなかったんですか？・・・じゃあ私だけが知ってた
んですね」

なんか勝ち誇ったような笑みをホリイさんに向けています・・・
・これって、シェイドさんめぐつてのですね・・・シェイドさ
くん早くきて！絶対これ次わかるような状況だから！

もちろんこんなこと口にはだせず

「ちよつと、シエル。なんであんなだけ知ってるのか教えて欲
しいんだけど」

「いえいえたいしたことじゃないですよ。シェイドと『二人だ

け』でいろいろしてただけですから・・・おや？決闘ですか？いいでしょう久しぶりにあなたと闘うのも」

そりゃ、決闘にもなるでしょうよなんかシエルさん『二人だけをわざと大きな声で言って挑発してるし・・・うん、俺にはかんけない。さあ、どこかへ

「おやおやシエルさんも来てたんですね」

いまさらシェイドがやってきた

次回予告

ベク「なぜここがわかった・・・まさかメンバーがいないのは」

シェ「ええ、私です。ちなみに第一回の会議には私もいましたよ」

ベク「なに！？」

トー「なぜなら、僕らが協力していたからです」

ベク「トール、シルク、ハンクにジン・・・」

シェ「そう、あなたは始めから私の手の平の上で踊らされていたのですよ」

ベク「うわああああ・・・」

みんな（ベクト以外）「ハハハハハハハハ」

シェ「おわり」

――ギルドホーム支部長部屋

「なに！シエルも来てたのか」

まず、気を失っていたベクトが起きざまにいった言葉だ

「ええそうですよ・・・あとライカ君だけですがそろそろくるでしょ」

ズドン！という地響きがした

「ね」とかシェイドさんが言っている

「ベクトさん、ライカさんってどんな人ですか？」

「ライカはなんつーか野生児？・・・つとなくユニークスキルで《調和》スキルっていうものを持っていてだな・・・あゝだめだ頭が回ってねー後は本人に聞け簡単に答えてくれるだろーから」

「じゃあ、ついでにライカ君をここに連れてきて下さい。多分まだ外にいますから連れてきたものは闘技場に入ればいいと言つて下さい」

連れてきたもの？意味がわからん・・・まあ、話しは聞きたいから行くか・・・

――ギルドホーム前

・・・でけえ虎とでけえ鳥がいる・・・あつ、虎の上に人がネコミミフードを被ってる小柄な・・・どうやらあの人がライカさんらしい・・・とりあえず呼んでみた

「ライカさん」

「はいは～～い」

この人で正しかったらしい

「シェイドさんが支部長部屋に呼んでいますよ」

「おっ、ごくろーさんです。ねーねーついでにこの子らどっかに

連れてけとかなかった？」

「ええ、闘技場に入ればいいと言われてます」

「あんがと。じゃあリンリンに乗ってあつ、リンリンってこの子でこっちのガーネットイーグルはガーちゃんよろしくしてね」

虎がリンリン、鳥がガーちゃん・・・ネーミングにケチつけちゃいけないよね

とりあえずお言葉に甘えてリンリンの背中に乗せてもらった・・・
かなりフカフカだ

・・・ギルドホーム内ロビー

いろんな人から声をかけられた俺じゃなくライカさんに

「うおっエンシェントタイガー」「ここは動物園じゃねーぞー」

「ガーちゃんが俺のつまみを」

ライカさんも「わかってるよー」やら「あとで返すからー」と

か言っていた

- - - 闘技場観客席

ドーン！ドーン！ズタタタタ！ガキン！バーン！

そういえばそうだった・・・ホリイさんとシエルさんが決闘しているんだった

「うわゝまだあの二人けんかしてるんだ」と、ライカさん

ちなみに二人ともライフが半分になっている

「君名前は・・・トール君ね・・・ふむふむ・・・今からあれに乱入するからそこにいてねリンリンGO!」

ライカさんはリンリンと一緒に闘技場にはいっていった

- - - 闘技場内 - - シエル視点

本当に私達って互角ですよね・・・めんどくさくなってきました

「ねーそろそろ止めにしませんか？」

「シエル！いまさら謝ったってゆるさないわよ！」

・・・あれ？会話での解決策がなくなっちゃってる？いえいえ
いくら猪突猛進なホリイでも話しが通じな・・・いようにしたかも・
・

やっちゃった、と思っていた時に

ズシンズシン

ライカが乱入してきた

あ・・・ライカちゃんだこの子なら

「ライカちゃん、すべて悪いのはホリイなの一緒にホリイを止めましょう」

これで万事オッケー

――ライカ視点

「ライカちゃん、すべて悪いのはホリイなの一緒にホリイを止めましょう」

これは嘘だよ、シエルさんってよく人を利用するからな・・・

「シエルさん、理由はどうせシェイドさん絡みでしょ？で、多分どっちも悪いんでしょ？」

突然の乱入者に驚き止まっていたホリイがしゃべりだした

「だって、シエルが私の知らないところで・・・」

「どっちの言い訳も聞きません！私のリンリンとガーちゃんが
いれないじゃない。どうしてもっていうならけんか両成敗です。《
調和の咆哮》を使います」

「ちょっと待って、ごめんねライカちゃん勝手ばかりしてもう
やらないから」

「『今は』やらないですね？」

「・・・・・・・・チッ」

「あゝ今シエル舌打ちしたよライカ」

「ホリイさんも止めますか？」

「・・・・・・・・はい、ごめんなさい」

・・・・・・・・闘技場観客席・・・・・・・・トル視点

凄いなゝ、ライカさん実質的に女性の中で1番権力あるのでは？

そういえば、三人が話している間にガーちゃんと仲良くなった

・・・・・・・・乱入した時

あゝ俺の出番なさそうだな・・・そういえばフライドチキン買

ってあったような・・・おっ！あったあったさて・・・

ジーーーー

後ろのガーちゃんの視線が気になる・・・これがフライドチキンか目的は・・・

俺はフライドチキンを動かしてみた。ガーちゃんの目線がフライドチキンを追っている・・・5分ほどやった・・・十分に時間つぶしと楽しめたのでフライドチキンはガーちゃんにやった

・・・共食いじゃないのか？と思ったがそれ以上は気にしないことにした

とまあ、そんな感じだ。

「やあやあ、皆さん揃ってますね」

またこんなタイミングでシェイドさんはあらわれた

次回予告

シェ「最近華やかになってきましたねえ」

ベク「なあ、せっかくでてきたホリイとかシエルとかライカとか呼ばないのか？」

シェ「ええ、この前のことでちょっと・・・」

ベク「この前っていつの話だよ・・・ん？」

ホリイ（以下ホリ）「シェイドはここ？そして略しかたが気に入らないからホリイのままで」

ベク「シェイドなら・・・いつのまに・・・」

ホリイ「あんた捕まえときなさいよ気が利かないな」

ベク「つかまじでホリイのままかよ・・・ホリイ様ー次回予告をやってくれたらシェイドが後で人には言えないことをしてくれるとか・・・」

ホリイ「え？ほんと？・・・しかたないな・・・次回、たまの暇。これあんまし面白くないよ・・・シェイドどこだ」

ベク「あゝなんか失敗だらけだが・・・まっいいか。次回にまた会おう」

えっと、今は大会前日の朝ですね・・・え？昨日のあのあと？

まずシェイドさんがあらわれた・・・ついでにベクトさんも・・・
・シェイドさんに言われた

大会終わるまで町からでないこと・・・今の俺だともし何らかの方法で情報を得て魔武器狙いで赤プレイヤーが襲ってきたら死ぬからだとか

んで、そのあと大会に向けてのコンビンションの練習やらなんやらで忙しいからなんとかで解散になって今

今は宿にいる

・

・

・

・・・「暇だ」

今まで戦闘ばっかだったから突然ダンジョンへ行けないと言われてもやることがない

・・・『マルチーズ』に行こう

・・・『マルチーズ』店内

「へい、らっしやい」

久しぶりに聞く声の主はジニーさん？うん多分ジニーだ

「久しぶりですジニーさん」

「なあ、俺の名前ってそんなに覚えづらいか？ジンだ。ジン！」

そんなやりとりをして暇つぶしに来たことをさらっといった

とりあえずいろいろ喋って適当に出た

よくよく考えたらあまり町を見てないことに気がついた

「だったら町探索もいいか」

町を見てまわった

・・・日が暮れた

・・・迷った

「どこどこ!？」

えっと整理しよう。まず、大通りを見てまわった、次に面白そうだから路地裏に行って少しして今の現状・・・

なんかいい方法ねーかなーと思ったが

「マップ見りゃいいじゃん」

こんな簡単なことに気づかないとは・・・

「・・・あれ？」

なんかまたマップが見れない・・・でも今回は妨害系スキルのせいだとすぐわかった。ちゃんと『マップを表記できません』ってでているから

誰だろうかこんなところで《マップジャマー》を使ってる奴は・・・とりあえず視認できる範囲には人はいない・・・・・・・・・・

まだ他にここからでる方法はないかな・・・あ

「サモン、チャイルドウルフ」

子狼がいるじゃないですか。

魔法陣から子供の狼がでてきた。

「よし、じゃあシェイドを探してくれ。ほら模擬戦で黒い人」

子狼はキャウツと鳴きながら尻尾を振って走りだした

お？わかったか？とりあえずついていこう

- - - 5分後

まあまだ着かないだろう

- - - 10分後

．．．そろそろかな．．．

- - - 30分後

．．．まだか？

- - - 1時間後

「だ~~~~」

こいつを信じた俺が馬鹿だった。ぜってゝわかってねえ。

ここでもう一度マップを見てみた……。直ってやがるし
かもそこ左に曲がったら霧夢のギルドホームだ……。まさかちゃん
とこいつは……

ちゃんと連れてきたことが分かった俺は子狼に上等な肉を与え
て宿へ行き一日が終わった

この日の謎といえばあの《マップジャマー》はなんだっただ
ろうか？謎は謎のままに終わった

次回予告

ライカ（以下ライ）「はい、どうも次回予告が始まりました」

シエル（以下シエ）「ライカちゃん固いわよ・・・ほら肩の力を抜いて・・・はあはあ」

ライ「変なトコ触り出した！変態だよそれじゃ。落ち着いてシエルさん」

シエ「お姉さんを甘くみてもらってはいけないわよ・・・さあ、私のことをお姉ちゃんと呼んで！」

ライ「やっぱただの危ない人だよ・・・あつ、シエイドさん助けて！」

シエ「おやおや、ライカ君どうしたのですか・・・シエルが変態？・・・私の身も危険そうですね・・・ライカ君私は時間を稼ぎます私を置いて逃げなさい」

ライ「シエイドさん。それ死亡フラグだよ」

シエ「大丈夫、すぐに追いつきますよ」

ライ「完成させちゃったよ！・・・シエイドさんの死は無駄にはしません・・・さようなら」

シエ「・・・次回より大会編が始まります・・・これが最後の言葉になるのでしょうか・・・嫌です。まって~~~~ライカく~~~~ん」

シエ「シエイド、ライカちゃん待ちなさい」

ベク「なあ、トール・・・最近あんま目立たねーな」

トール「俺なんかまだましですよジンさんに比べたら」

ベク&トール「・・・」

s t o r y 2 3 大会初日（前書き）

どうも、ジャツロです。

大会編が始まります！そして、またツールが活躍しません！

・・・この作品はどこに向かっているのでしょうか？私にもわかりません

story 23 大会初日

今日はギルド対抗大会の初日だ。今、シルクとギルドホームで待ち合わせしていたので俺はギルドホームへ向かった

――ギルドホーム内

「よっ、シルク」

「やっと来たのか。じゃあ闘技場《神》へ行こう」

ベクトさん達が闘う場所だ

この大会は上位八位までのギルドで行われる。で、各ギルドにギルドマスター一人とメンバー四人のパーティー組の二組が出場権を持っていてトーナメント方式で行われる。どこどこが当たるかは今から行く闘技場で抽選で決まる。

ちなみに数が多いので会場は闘技場《神》と《覇》が使われるらしいどっちの闘技場も一万人は入れるらしい

――闘技場《神》観客席

俺達は予約チケットを見せ会場の席についた。そろそろ抽選会が始まるはず……

バン！ババン！

花火が打ち上げられた。始まりの合図

ドン！という音とともに闘いの場であるフィールドの中央が爆発した

そこには一人の男が立っていた。

「レディース&ジェントルマン……紳士って少ないですよね・
・レディース&メーン。総合司会兼選手の霧夢ギルドマスターの
シェイドがお送りさせていただきます」

シェイドさんだった。そして……

「……キャー……」やら「シェイド様……」やら「つきあ
って……」やら「結婚して……」などなどや

「俺の彼女返せー」やら「お前のせいでー」やら「なんであんたはいつもいつもー」などなど

前者が主に女性、後者が主に男性

ちなみに今のシェイドさんはいつもの黒ローブではなく黒スーツ姿。顔がばっちりわかる

「歓声ありがとうございます。私からまずは簡単な説明をします。抽選会がこの後ありますが人数の関係上闘技場を二つ使ってトーナメントA・Bという風にします」

分けることによりもうひとつの会場の試合が見れない！という心配はご無用。運営側に協力を要請して頭上をご覧下さいあちら側の映像が見えるようになっていきます。ちなみにあちらの司会は《ミラー・メイト》のギルドマスターのリンさんがやっています

抽選会場はこちら側なので今より代表者が転移してきます」

とシェイドさんが言った後すぐに大きな魔法陣が出現し何人も転移してきた

会場にいろんな歓声が飛び交った

「では、これより抽選会を始めたいと思います。ではまず……」

抽選が始まり……結果がきまりトーナメント表が出来上がった

シェイドさんがトーナメントBで闘技場《覇》へベクトさん達はトーナメントAでこっちで試合を行うことになった

「さっそく私はあちらへ行かないといけないですがリンさんもちちらがわに来るので、では決勝に進めたらまた会いましょう」

シェイドさんや《覇》の方で闘う人達は転移していった司会が変わった

「はいはい。シェイドさんになりました、《ミラー・メイ》のギルドマスター、リンです。シェイドさんに握手とサイン貰いました！いいだろ……可愛いじゃなくて、もっと悔しがって」

《ミラー・メイ》のギルドマスター、リン。青髪青眼のゴスロリな女の子。みんなのハートをわしづかむ容姿。男性陣はもちろ

ん女性陣もシェイドさんとつらやましいことをしているがそれよりも目の前の可愛さにやられている

「う〜〜もついいよこんな司会止めてやる」

あっマイクを投げた

飛んだマイクを誰かがキャッチしたそして・・・

「すいません。私は《ミラー・メイト》の副ギルをしています
ロートと言います。司会を変わらせていただきます」

円滑な流れ・・・これは初めから予想されてたな

「まず、トーナメント表は頭上スクリーン北側から見て左上に載せておきます勝った組は赤色の線で線が進んでいきます。なお、会場内に限ってメニュー画面のアイコンに会場スクリーンの項目が増えています。それを使うとメニュー画面サイズで頭上スクリーンを見れます」

俺はメニューを開き確認した・・・ある

「では、第一回戦《神》の《ミステイ・ドリーム》PT対《俺の道》ギルドマスターと《覇》の《聖騎士団》PT対《深緑の森》ギルドマスターです。試合開始は今から20分後ですので時間をお間違えのないようお願いします」

大会に関する説明が終わって

「なあ、シルク先生《俺の道》のギルドマスターってどんな人？」

「来ると思ったよその質問っていうか先生って……
・《俺の道》ギルドマスター、名前はショウ。ユニークスキル《慧眼》の使い手……この《慧眼》スキル、相手のセットしたスキルを見ることができるよう……さらにエクストラスキルの《歌》と《高位槍術》がかなりすごいらしいよ」

セットしたスキルを見られるのはかなりつらい。とくに対人戦だとスキルがばれることは攻撃が読まれるということだ

大丈夫かな？と思いながら試合開始時間になった

次回予告

ジン＆ハン「ハーハッハッハ」

シル「え〜と、このコーナーは最近出番が減った人と一緒にいろいろ辛いことを語る会だったのですが」

ジン＆ハン「ハーハッハッハ」

シル「酒を飲んで暴走しています」

ジン「しるくよ〜最近よ〜出番もね〜しよ〜……………」

シル「……ジンさんは寝ました……ついでにハンクさんも寝ちゃいました……せつかく出番をもらえたのに」

シエ「もったいないですね」

シル「……いきなりあらわれないくださいシエイドさん」

シエ「いいじゃないですか。ささっ次回予告しちゃって下さい」

シル「……次回、大会一回戦……このサブタイトルひどくないですか？」

シエ「ではまたの次回予告で」

シル「結局シェイドさんのコーナーに……」

story 24 第一回戦（前書き）

どうも、ジャッロです。

過去の過ちを消去しておこうと思います・・・

さてさて、大会編ではいろいろキャラが出てきて、ツールは？ということになりますが大会編が終わったら活躍・・・すると思います。

Story 24 第一回戦

――ベクト視点

俺達は闘技場内に入った。歓声が上がった

反対側でショウが入って来たこちらには

「アニキー」やら「ボスー」やら「お頭ー」などの声が聞こえた

ショウの特徴は黒髪短髪、黒眼着てるものはシャツとジーンズ
そして右目の方に眼帯

「おう、ボウズ〜久しぶり〜」

「あんた、慧眼は使わねーのか？」

「あほか、お前らはパーティー全員がユニーク持ちとかふざけたチームじゃねーか。全力を出させてもらっぜ」

といってシヨウは眼帯を外した。右目には謎の紋章があった

そして右目が開眼したとき試合が始まった。

スキルがばれたからといってもアーツを見切れるわけじゃない

「コンビネーションF3だ」

といって、俺は《瞬動》を使い二倍速でシヨウに近づく

「はっ！！！！！！」

シヨウが大声でいった。《歌》スキルのアーツ《ビッグボイス》一定音量を超えたら吹っ飛ばす衝撃波がシヨウの周りから発生する。

もちろん俺は吹き飛ばされるが

「たああああ！」

俺の後ろから来ていたホリイが《魔弾》を放ったがこれは躲された・
・がこれもまだ許容範囲

頭上からのガーちゃんによる攻撃、突進系モンスターアーツ《
ファイアーバード》また躲される

まだ、連携は続いているシエルの《幻散雨》ミラーシレイン矢を上に放ち万の
矢を降らすアーツ・・・・当たらない・・・・一発も当たらなかった

ここまで四連携までしたが攻撃が当たらない

だいたいギルドマスターはこんなぐあいの連中ばかりだ・・・・
この人もそんなうちの一人

「おいおい、それでおわりか？へばいぜーおい。来ないならこ
っちからいくぜー」

シヨウが突撃した狙いは・・・・

「やっぱ、俺かよ」

ベクトだ

「わりいな。あんま女子供をなぶるのは気が引けるからな」

二人は一対一で闘い始めた

シヨウの《三連槍》三連続の突きを放ってきた。

ベクトはこれを二本の剣で弾いて躲した

だが攻撃はまだやんでいないそのまま《旋風》を使い二本の剣を右側に弾かれた

シヨウはなぜかバックステップをして距離をおいた武器を弾かれた今の俺は隙だらけなのに……

ドン！ドドドドン！ヒュンヒュン！

意味がわかった……ホリィやシエルの攻撃がこっちに飛んできたからだ

何万の矢と炎球が飛んできた……コンビネーションA3……

・多量の攻撃の雨の中目標を駆逐する戦闘方法・・・俺は敏捷パラメータを上げることができるので簡単に躲すことができ、雨の中でも闘える！

距離をおいたシヨウに《スキュラー》で距離をちぢめ突き攻撃を放つ

躲される・・・現在進行形で攻撃の雨も躲している・・・決して俺のように敏捷が高いわけでもないのに躲している・・・いや、見切っている節さえあるなぜなら頭上から降ってくるものを見上げずに躲している

・・・すべてはあの眼に鍵がありそうだが・・・《ライトニング・バツシュ》いやいや強さの次元がシェイドレベルなのだからそんなもん通用するはずがない・・・とりあえず攻撃の手を止めないことにした

・・・隙をつくる！

手始めに《三瞬斬》・・・槍で防がれる・・・次に《分影剣》シヨウの背後二方向と目の前の俺の斬撃・・・《旋風》で背後二体と目の前の俺が吹き飛ばされる・・・《ライトニング・ソード》光の剣を三本対象に放つ魔法・・・槍で三本とも消滅された

まったく攻撃が当たらない行動のすべての意図が見えているとしか考えられない

今だシヨウのライフは九割対して俺は五割後衛にまわっている
三人は無傷だが俺が死んだら簡単に崩れるだろう

．．．．しかたがない．．．．こんなところで出したくは
なかったが切り札をだそう．．．大技三連続！

こいつを使うとＡＰの七割が減る．．．もし倒せなかったら俺
は戦力外だが、かまわん！

親指と中指を立てて手を上げたこれが俺の切り札を切る合図

矢と炎弾の雨がやんだ

「お？なんだ？サレンダーか？」

神剣を向けて「今から俺の究極でシヨウ．．．あんたを倒す」

．．．．シヨウ視点

「今から俺の究極でシヨウ・・・あんたを倒す」

は？おいおい・・・俺だってな〜ギリギリ何だぜ？なんだよ究極って・・・ぜって・・・

意味がわからない読者に俺のスキル《慧眼》について少し教えてやろう

俺の《慧眼》スキルには相手の情報を読み取るアーツが多くある。まず《技瞳》^{ぎとつ}まあ相手のセツトしたスキルを見ることができるのはこのアーツのおかげだ。次にこいつの派生で《連索》^{れんさく}、《技瞳》で見えたスキルのアーツを見れるんだが・・・こいつがな〜どういった規準で見える見えないが決まるかわからね〜んだわ・・・まあ見えるアーツと見えないアーツがあるんだわ。ちなみにその四人・・・ベクトには《神速剣》に四つアーツがわからんのあるし、ホリイには《魔神》に二つ、シエルも《虚構》に二つ、ライカには《調和》に三つ・・・こいつらには隠し玉がまだまだある・・・今まで躲せていたのは《軌瞳》^{きとつ}を使ってあいつらの攻撃の軌道を把握できたからだ・・・これダジャレだよ・・・とまあ俺だって把握できないこともあるわけで

ぜってー俺が把握していないアーツを出すに決まってやがる

俺にもとっておきの切り札が三枚あるが・・・しゃーない一枚ぐらいなら見せるか・・・

――ベクト視点

「おう、そうか。だったら俺もとっておきを見せてやるぜ」

槍を構えて言われた

俺も剣を構えた

……いくぜ！

ベクトは消えた……。のではなく早過ぎて見えなくなった大技三連続においての第一段階《神速》……。《瞬動》の強化版敏捷パラメータ三倍……。何よりもベクトの闘いは速度を基調している……。誰にも追えない速さで勝負する

だがベクトにはショウが俺を見えているように思えた

まずはこの《神速》状態での斬撃の雨

ガキン！カン！カン！

ことごとく槍でガードされるとやられた速いだけでは倒せそうになかった

ショウの前方に立った……第二段階……《瞬き》ただの居合切り……敏捷パラメータが二倍になる……そして単発で1番物理攻撃力が高い技

剣を鞘に戻し居合の構え……………抜く！

真正面から居合の一撃……狙いは槍

ショウはやはり見えているらしく槍でガードしようとしていた

ガキイイイン！

ガードを越えるダメージを与える……ショウのライフが一割減る……嫌な顔をしていた

が、まだ第二段階は終わっていないなぜなら剣は二本あるのだから……抜いてない二本目の至近距離《瞬き》当てにいかず槍狙いショウも槍でガードするしかなさそうで槍でガードした……一

割をまた削る

そして、攻撃は続く最終段階《瞬影連閃斬》最後の締めはこれだ《瞬き》からそのまま二刀による96連撃

．．．がよかったのは30連撃までだった．．．

ドン！

吹き飛ばされた．．．何ではよくわからない．．．俺のライフは尽きていた．．．気が遠のいていった

．．．シエル視点

あゝあ、調子に乗ってあんなに接近するから．．．でも今は何が起きたかはつきりわからなかったわね．．．

．．．ホリイ視点

ざまあみろ一人でカツコつけるからいつもいいところで負けるんだ．．．．．といっても今の五割も削ったのはなんだろう？

――ライカ視点

・・・結果見えてたよね？なんか皆冷静だし・・・やっぱりシエイドさん以外の男には微塵も興味ないのかなあ？

ってこんなこと考えてる場合じゃなかった！ベクトさんがやられたから司令塔は私になるじゃん

「ホリイさん今のうちに《魔神弾》溜めて、リンリン、ガーちゃんいつて。シエルさんリンリンの援護とホリイさんの防衛」

とりあえず指示をだして私は笛を取り出した。

戦闘はリンリン達に任せている私は《笛》スキルによる補助系アーツを上げている

〳〵

主に皆の補助リンリン、ガーちゃんの攻撃力や敏捷を上げる

――シヨウ視点

・・・はあゝ、やっと一人倒せたよ・・・ベクトルお前死んでもなんかすっぱーな飽きれ顔しかねーんだが「ホリイさん今のうちに《魔神弾》溜めて、リンリン、ガーちゃんいつて。シエルさんリンリンの援護とホリイさんの防衛」なんか対応はえゝし、《魔神弾》ってアーツ見えないアーツの一つだし・・・《魔眼》ばれてなさそうなのにこれ以上つかったらネタバレしそудしなゝ・・・でも第四位のギルマスが第五位に負けるのはしたくねえな・・・しゃーないネタバレ覚悟で行くか・・・まずは・・・

――シエル視点

さすがライカちゃん一人一人にちゃんと指示だしてくれるあたりがどうかの誰かさんと違うわ

シエルは詠唱していた

「・・・貫くは炎の槍《フレアーランス・改》」

三本の火の槍がシヨウ目掛けて飛ぶ・・・躲される

これは罠で真の狙いは死角からのガーちゃんの《ファイアーバード》

ショウの背後上空からの突進攻撃・・・しかし、横にステップして躲される

・・・どうもわからない誰だつて《慧眼》というのだから眼に関係しているのだろうけど死角ですら見通しているように思える

「ガーちゃん！」ライカの叫び声

ガーちゃんに何があつたのだろうか？ガーちゃんを見ると・・・ライフが五割近く削られている・・・攻撃は受けていないはずなのに・・・

「ホリイ！後どれくらい《魔神弾》撃てるまでかかる！」

「あと3分だから何とかして！」

3分・・・短いようで長い時間・・・

この声を聞いたのかショウはホリイの方に走りはじめた

「リンリン、アーツ《ライデント・フォース》」

リンリンの体から電気が帯びてバチバチいつている……その状態でシヨウに突進した

が、リンリンもベクトと同じように吹き飛ばされた……ライフも五割ぐらい削れている

なぜ？と考えている時間がなかったシヨウはどんどんホリイに近づいていく

「シエルさん！」

すぐ後ろにいたライカちゃんに叫ばれた……ライカちゃんの方を見ると『あのアーツをだすよ』というのが見てわかった。

私は首を横に振った

「でもホリイさ「私が『あれ』を使うから」」

私のカードを切ることにした

―― ショウ視点

・・・つたく、まだ未知数の能力隠し持つてるからな。今から起きる《魔神弾》とやらはなんとしても食い止めんとな。・・・お？弓使いの嬢ちゃんが接近戦か？・・・どうやらまだ俺の《魔眼》に気づいてね。よしだな。・・・蹴散らしてくぜ！

―― シエル視点

ショウの笑う顔が見えた。・・・うざい。・・・だが今からあの顔が変わるところが見えると思うとぞくぞくしてきた

弓はもういない。・・・《虚構》スキル。・・・アーツ《フェノメノン》。・・・私を中心に魔法陣が広がっていく。・・・

魔法陣は半径20メートルまで広がった

・・・この範囲内では対象の重力支配ができる。・・・今は常にかんりのGを与え続けているそして、私はかなり軽くなっている。すぐにショウを魔法陣に入れた。・・・これでショウはいつくばるはずだった

シヨウは魔法陣内で普通に立っていた

シヨウが喋りながらこっちに近づいてきた

「不思議そうだな？お前のそれは絶対領域系の重力操作系だろ？知ってるか？絶対領域に対する対抗手段それはな・・・」

シヨウは槍を構えた。体が動かない

「対象の絶対領域よりも上位の領域で塗り潰せばいいんだぜっ」

槍の一撃でライフは尽きた

シヨウの能力を理解したがもう手遅れだった。負けて転移されて伝える術がなくなった

がんばれ、ライカちゃん。とだけ願った

- - - ホリイ視点

やばいじゃん。シエルの重力支配突破しちゃったよ。あとちよ

つとなのに・・・って、あれ？準備オツケーじゃない？3分たってるじゃん

「オツケー！ライカちゃん上空に避難してね」

――――シヨウ視点

「オツケー！ライカちゃん上空に避難してね」

・・・あつ、ミスった3分しかねーんだった・・・これ以上カード切ったらぜってーシェイドとかイークに勝てねーだろうな・・・どんなアーツなんだろうな（あきらめてます）

――――ライカ視点――上空

「シエルとついでにベクトのかたき。いっくよ」ホリイさんの声

《魔神弾》はね、なんていうかもう、イジメ？な技です。溜めが必要何ですけどね。

ホリイの上げた手の上に10個の巨大な炎球が突然でてきた

でね、ホリイさんはこの巨大な炎球を好きなように操作できてね10個の球で相手を囲み・・・

ホリイの手の上にあった球はシヨウを囲み逃げ道がなくなった

ギリギリと近づけてライフを徐々に削って・・・

「熱っ、おいこらっわざとやってんだろ」シヨウの声

ライフが少しずつ減る

で、最後にライフをギリギリのところまで減らしたらジュツと

「うおおおおお！ー！ー」とシヨウの声

「「「アニキー！ー」「」と観客席で《俺の道》のギルメン達は叫んだ

こうして一回戦はなんとか突破した

- - - 観客席 - トール視点

「なあ、俺達つて出番ここでちよくちよく会話するだけか？」

「そうだろうね・・・僕はもう慣れたよ・・・」

男二人も何かに負けていた

第一回戦勝者

《神》 - 《ミステイ ドリーム》PT

《覇》 - 《深緑の森》ギルドマスター

次回予告

トー「トールの新キャラ紹介コーナー……本編であまり役がないからこっちにまわされました……なぜだ！」

シヨウ（以下シヨ）「おう、気にすんなぼ〜ず〜」

トー「はい、この人は第四ギルド《俺の道》ギルドマスターのシヨウさんです」

シヨ「よろしく〜」

トー「では、シヨウさん。あなたのギルドでは主にどんな活動をしているんですか？」

シヨ「俺のギルドは情報を取り扱っている。……探偵や報道なんかをやっている」

トー「へえ、そうなんですか。では次に身長、体重、血液型を教えてくださいますか？」

シヨ「身長168センチ体重54キロ血液型はB」

トー「……ちょっと待ってください……それって俺の個人情報……まさか」

シヨ「そのまさかだ。とあるツテよりお前の情報をもってるぜ！そ

して、俺の情報は誰にもやらん！」

ト「え．．．と、だいたい１８０センチぐらいで体重は．．．」

シヨ「俺の情報はやらんと言っているだろうが．．．《三連槍》」

ト「く．．．そ．．．なんで俺がこんなめ．．．」

s t o r y 2 5 じいさんずっと運だよりなせんちよゝ（前書き）

どうも、ジャツロです。

予定よりフライング気味に投稿！

最近の悩みはサブタイトルをどうしようか？です。

――観客席――トール視点

「では、続きまして第二回戦《神》の《愉快賊団》ギルドマスター対《WG^{ダブルウィングス}》sPTと《覇》の《ミステイ ドリーム》ギルドマスター対ギルドマ^{マリオット}」「うおおおおお！」「……を20分後に開始します」

「ヤベーよあの二人が対決だぜ！」「氣にくわねーが俺は影にかけるぜ」「何言ってるんだよあのマスターオブパペットが負けるはずねーだろ」「つーか《神》のほうじゃないのが悔しいぜ」などと観客席の声

「なあ、先生」

「先生言うな！どうせ《マリオット》のギルドマスターのことだろ？」

俺は頷いた

「第三位ギルド《マリオット》のギルドマスター、ヒルケはま^ず優秀な《人形使い》《人形技師》として有名なんだ。この人が創

る人形の性能が凄いらしい。さらに本人もユニークスキル《城壁》
ていうかなり防御力に長けたスキルを保持してるから人形使い本体
はなかなか死なないからその間に人形にボコボコにするらしいよ」

「さすが、情報量だけは一級・・・じゃあついでに今から《神
》の方でやる試合は？」

「こつち見てるつもりか？・・・まあ君の勝手だからいいけ
ど・・・」

俺はそんな映像を見るよりも生の試合を見る方が好きなんでな

「まず《愉快賊団》第八位ギルドのギルドマスター、キーリー。
《二丁拳銃》の使い手でユニークスキルに《ラック》っていうのを
持つてるんだ・・・この《ラック》言ってしまうばただの運まかせ
な能力らしいよ・・・で、次に第六位ギルド《WG's》・・・
これねダブルジーってGGっていう意味でさらにこれってグレート
ジーさんズの略なんだとか・・・まず平均年齢60以上の爺さん婆
さんの集まりで第六位に入るぐらいの実力を持った人達なんだ・・・
・まあ、試合見ればわかるよ」

長つたらしい解説（頼んだの俺じゃん）を聞いていたら試合開
始時間だった

入って来たのはまず、赤い羽帽子、赤いコートに眼帯（眼帯流行ってんのか？）ないかにも海賊の船長という服装の「せんちよ」みんなこっちの試合見てませんよ」・・・回りの人は自分のメニューの画面を見ている「うっせ俺は俺の決闘をするだけだあああ！」船長叫んだ

んでもって爺さんが多いらしい方は・・・爺さん三人と婆さん一人どの人もすこぶる元気そうだ・・・まず一人目ムラマサさん名前の通り《刀》の使い手、『剣帝』とかいう二つ名がついているらしい。二人目ゲンさん《機械技師^{メカニック}》《機械使い（マシーナリー）》を使うらしいなんか右腕にこっつい機械を装備してる。三人目オトメさん名前のとおりおばあさん《法衣》《古代光魔法》を使う回復補助魔法のエキスパートらしい。最後にテツオさん格闘系スキルをほぼマスターしているらしいこの中で唯一ユニークスキルを持つ・・・《悟り》だとか・・・シルクからの情報より

・・・キーリー視点

おう、俺様はキーリー泣く子も黙る《愉快賊団》の・・・何？自己紹介はいらないだと？待てよ。これから俺視点でいくために読者の皆さんと打ち解けた方がいいだろ！わりい、少しこっちのトラブルが・・・とつと話を進ませろだと・・・しかたね俺の活躍見てくれよな！

「せんちよとりあえず粘れ」

あれはうちのクルーの……失礼

「言うなら、俺の応援しろおお！」

「何言ってるんですか。どうせ勝てませんで」

あいつは赤の他人だ気にしないでくれ……おおと決闘が始まるようだ

「爺さん婆さんでも俺は手加減しねえぜっ！」

「かまわんよ、本気でかかってきなさい」

おっと俺としたことが心の中だけにしとくはずだったがつい口にだしちまつたぜ。だがこの刀を持ったじーさんすっげー威厳あるなあ、後で威厳をどうやったら持てるか聞こう

試合が始まった

まず、動いたのはムラサさんとテツオさん左右に分かれてキリーリーの左右からの挟みうちをした

うおっ！じーさんなのに速え！だが慌てるなかれ俺様の二丁拳銃が唸るぜ

《ツイン・エアバレット》両サイドに吹き飛ばし効果がある空気を撃った・・・テツオはガードして吹き飛びムラマサは躲して接近してきた

あの刀持ったじーさんやべえな俺の空気砲を躲すとは

バキyunバキyunバキyunカチツカチツ

ちっ弾切れか「リロード、ノーマルバレット」弾の補給は主にこつ言つとできるんだぜ

さっきから撃ちまくって近寄らせないようにしてっけど当たんねーなー

撃つ、躲される、撃つ、躲される・・・「若僧、こつちをわすれとるの」・・・？

今言つた人の方を向いた・・・ゲンの右腕の機械がガトリン

アホとはなんだ！ぼけとはなんだ！……まあいい確かにうちのクルーの言うとおりだ。まだ終わってなかったなこの決闘が終わったなら勝利の美酒と洒落込もう

「リロード、レインバレット」

レインバレット - 散弾

これならさすがのじーさん達にも当たるだろ

バン！カキンカキンカキン
バン！カキンカキンカキン

……うおおおおお、馬鹿な！刀持ってるじーさんは刀で弾くし手甲嵌めてるじーさんは手甲で弾くし、なんだこのじーさん達！

ムラマサさんとテツオさんは徐々に距離を縮めていった

まずい、こうなったら「《ヒット・コイン》」表来い、表来い、表来い、来たああああ！「リロード、エクスプロードバレット」

「じーさんがた・・・Show timeだ!」

エクスプロードバレット・爆裂弾

俺はとりあえず刀を持ったじーさんと手甲を嵌めたじーさんを倒すことにした

ムラマサとテツオに入っている弾六発すべてを撃った

「血迷ったか!こんな遅い弾じゃ・・・ぬお!」

ムラマサは完全に躲したと思ったが弾がありえない軌道を描いた

「ムラマサさん!こんなもの叩き落とせば・・・!」

つぎにテツオンに向かった弾はテツオがジャブで打ち落とそうとしたが、パンチを躲すように軌道を描き体にまともに弾丸が当たった

俺の《ヒット・コイン》は説明するまでもないな!表だったから必ず当たるようになったぜ!

ムラマサ、テツオと共に残りライフが二割を切っていた

「《エンジェリック・ライト》」

ムラマサ、テツオに光が射した……。一瞬でライフが全開になった

しくつたああああ！あのばあさん回復職じゃねーか！なんで気づかなかったあああ！くそつ、まずはあさん倒さねえと……

が簡単にはできなかった。つねにムラマサ、テツオはキーリーに対して攻撃を入れオトメさんは回復に専念し、ゲンがそれを護っている……。四対一の闘い方としてかなりえげつない戦術である……。たまの隙ができたらゲンがバズーカやガトリング砲で狙ってくる……。このピンチを《アブオイデンス・コイン》でなんとか回避するが運は何度も向くわけがなく

くそつ！またバズーカか「《アブオイデンス・コイン》」……。
……。裏だと！

直撃した

キーリーはぶつ飛び空中で体勢を整え着地した。ライフが二割減った

イタツ！とうとう運命の女神は俺様を見捨てたのか！だが負けるわけにはいかない俺には信じて待つてくれている「せんちよ」も無理じゃないっすか？」クルー達が「あ、こっちの試合白熱してますよこっち見ましようよ」……

「うおおおおお！！！！」

なんかもう泣きてーぜ！くそっ！こっとなったら見返してやる！

「《スロット》！来い！」

突如としてスロットマシンが出現し回りはじめた

一つ目髑髏二つ目髑髏三つ目髑髏一列髑髏ができた

来たぜ！

「チェイン、《シェアリング・フィールド》」

爺さん婆さんの足元に魔法陣が出現した

「複合アーツ《デス・ゴスペル》」

突如として四人の老人の足元の魔法陣から黒い障気が噴き出し

「なに！？」「なんじゃこれは」「キヤアアア」「……………」

老人達のライフが一瞬でゼロとなった

決まっただぜ！なんか反則くせえ技に見えるだろうがな確率論だけていくとかなり成功確率が低いんだぜ？まず、《スロット》対象一体にでたスロットの役の効果を与えるものだがまず役が揃うこと自体が少ないさっきのは罫體が三つで《デス》という即死アーツを出したんだが四人いっぺんに倒したよな？あれはな《シェアリング・フィールド》によって単一アーツの効果を複数にすることができんだぜ！だがこの《シェアリング・フィールド》も発生確率があるんだが見事どっちも成功して勝っちまったぜ！

「ヒヤッホウ~~~~！」

「まだまだよ、若僧」

！？

テツオが立っていた

なん・・・だと？

「あれは即死系のアーツかね？正直言つて驚かされたよ・・・
だがな、私の《悟り》スキルはねAPをすべて消費するかわりにラ
イフ全開で復活するのだよ」

卑怯だろ！俺が言えた口じゃねえが復活なんてあったのかよ俺
はもうギリギリなんだが！

「・・・・・・・・では、ゆくぞ！」

速っ！このじーさんさっきまで全力じゃなかったのかよ！ちき
しょーこっちはさっきのコンボでAPラックに使える分ねーぜ！こうなっ
たらとことんじーさんにつきあってやんぜ！

「リロード、ラピッドバレット」

ラピッドバレット - 速弾

格闘系スキルのほとんどはAPを使わないものが多い……
テツオにとってAPがないことはたいして問題ではないのだ

テツオもキーリーもほぼ接近戦

テツオは拳や蹴りでの攻撃、対してキーリーは二丁の拳銃で拳
や蹴りを受け流したり隙をみて撃つたりしている。

「ほう、なかなかやるじゃないか若僧。ただの臆病な遠距離タ
イプと思っていたのだが考えをあらためんとな」

「jeeさんこそやるじゃねーか……もつとも勝つのは俺様
だがな！リロード、《ライフバレット》」

俺はまた賭けにでるぜ！《ライフバレット》ライフを削って巨
大なエネルギー弾をぶっ放すアーツだ一気にかたづけろぜ！

「いくぜjeeさん」

キーリーはテツオに向けて撃った……キーリーはエネルギー弾と言ったが実際は極太レーザーだ

一丁だったら当たらなかったかもしれないがキーリーには二丁拳銃があった

二丁目の拳銃からのレーザー

「ぬおっ！」

命中

「まだまだまだあ」

連射する弾丸によるコンボを繋げるように撃つ当てる撃つ当てる撃つ当てる

だがテツオもただやられるわけがなかった

「ふんぬっ！」

レーザーを《空手チョップ》で割り始めた……レーザーが切断される……もちろん切断しているからと言ってダメージがないわけではない

なんてじーさんだ！俺のライフは……一割三発分……じーさんも一割……どっかがまともな一撃を入れたほうが勝ちだな

ライフバレット

キーリーは前進した狙いは至近距離での《ライフバレット》の命中

また始まる接近戦

テツオの左ストレート右の銃で受け流す、右ハイキック少し体を後ろに反らして躲す、隙ができた

今だ！

テツオに向けて撃った……が、それはテツオの狙いだ。あっさりと躲される

すぐに空いている右手の銃をテツオに向けて撃ったが銃を弾かれ変な方向に撃ち右手の拳銃は跳んでいった

零至近距離、《ライフバレット》を当て試合が終わった

――観客席――トール視点

あのせんちよく馬鹿なのかと思ったがかけくじゃねーか……
・・・そういえば、シェイドさんの試合どうなったのかな？上のスクリーンだったら終わってるようだが……

「なあ、シルク。シェイドさんどうだった？」

「……凄かった……」

「？もう少し詳しく」

「ありえないよ……ヒルケさんの人形《血濡れた人形》ブラッドドールがもの5分で破壊してヒルケさんの《城壁》の防御アーツのことごとくを無力化していつて10分で試合が終わってしまった」

とりあえず俺には人形の凄さがどれくらいか《城壁》がどんな優れているかはわからなかったが試合時間の早さだけはわかったさつきからやっている試合はどれも30分以上の闘いだった。で、試合のレベルもかなり高いそんな中で10分は早過ぎる……一体

何をしたのだろうか後でシルクに聞こう

- - - 《覇》 試合終了間際 - - - ヒルケ視点

「はあっ・・・はあっ・・・」

この人はいない・・・私の最高傑作《血濡れた人形》をものの5分で攻略し破壊するなど・・・しかも私の結界は聞いてないのか？

《覇》の闘技場は今闘いの場に魔法陣が全域に展開されている・・・この魔法陣はヒルケの《城壁》スキルの《不可侵》というアーツによって展開されており魔法陣内ではヒルケ自身の防御力が上がり敵はすべて攻撃力、敏捷のダウンがあるはずなのだが

「この程度なのですか？残念です・・・そろそろ終にしましうか」

奴・・・シェイドは今だライフが一割しか削れていないしかも・・・

まったく攻撃力、敏捷が衰えない！

大鎌が近づく・・・斬り裂かれた・・・躲すことすらでき
なかった敏捷が衰えるどころかまだ加速した

「あなたはいつたい？」

「第五位ギルド《ミステイ ドリーム》ギルドマスターのシェ
イドです。以後御見知りおきを」

第二回戦勝者

《神》 - 《愉快賊団》ギルドマスター

《覇》 - 《ミステイ ドリーム》ギルドマスター

次回予告

キーリー（以下キー）「おおっと、やってきましたあーキーリーの俺様紹介ショー」

トー「ちがうわ！新キャラ紹介コーナーだ・・・気を取り直して、今回は《愉海賊団》ギルドマスターのキーリーさんと《WG's》のオトメさんです」

オトメ（以下オト）「あらあら元気ねえ」

キー「あっ！回復職の影がうすいばあさん」

トー「・・・うるさいのはほうっておきましょう。失礼ですがオトメさんは何歳ですか？」

オト「今年で・・・・・・70歳かねえ？」

キー「俺様を無視するな」

トー「・・・失礼。もしもし、ええ、ええ、お願いします」

キー「何の電話だ？」

トー「気にしないでください・・・はい、続きましてキーリーさんにも質問です」

キー「よし来たー！さあ、なんでも質問するがいい」

クルーA（以下クA）「せんちょ」

キー「何故だ？クルーの声が聞こえる！」

クA「ギルドの方が大変なことになってます。すぐに帰って来て下さい」

キー「何！質問はまた後だ！それじゃな」

トー「・・・・・・・・・・フフツ」

クルーB（以下クB）「トールさん、そちもわるなお」

トー「こんな簡単に追い出せるとは思わなかったな・・・・・・・・まあ、こっちはうるさくて迷惑そっちは変なこと言い出さないように口止め・・・・・・・・利害が一致したわけだ」

クB「それではまた機会があれば」

トー「・・・・・・・・時間余ったな・・・・・・・・クルーA、頼りない、騙されやすい、実はさっきのも騙されてやらされていた。クルーB、悪人、いい性格、なかなかの策士、本編ではあらわれないだろう・・・・・・・・こんなものか。ではまたの次回予告で」

シェ「あえて語ろう、オトメさんは素晴らしい回復職だと！なにによりその存在の薄さ！回復するまでまったく注意が（以下略

s t o r y 2 6

準々決勝前（前書き）

どうも、ジャッロです。

今回はひどいです・・・文章が
サラッと読んでください！

――――トール視点

ヒューーードオオオオオン

今、隕石が落ちてきて第四回戦の幕がおりた

「準々決勝は明日あるからぜったい見に来てね。レンからのお願いだよ」

最後にウィンク。

今司会をしているのは《ミラー・メイト》のギルドマスターのレンである

はぁ、スゲー闘いだった。よし、明日もあるし帰って寝よう・・・え？三回戦と四回戦はって？・・・しかたがない終始をまとめて教えてやるよ

《神》

《ミラー・メイト》ギルドマスター

対

《愉海賊団》PT

勝ったのは前者の方だ……。何と云うか《愉海賊団》って感じだな。レンさんが「せんちょ」とか言っていた人達をギタギタにした。もう少し情報を付け加えよう……。《愉海賊団》の方は戦う前に「えっ、俺達出ないといけなかったんすか？せんちょ聞いてませギャーーーー」……。こんな感じだ

《覇》

《聖騎士団》ギルドマスター

対

《深緑の森》PT

一回戦の逆。まず《聖騎士団》ギルドマスターは白を基調にした軽鎧、腕楯、片手長剣……。とにかく真っ白……。純白な装備をしている人。対して、《深緑の森》の四人は全員が弓装備だった……。……とりあえず結果だけ、勝ったのは《聖騎士団》の方……。俺は《神》の方の試合を爆笑しながら見ていたから結果しか知らない

第四回戦

《神》

《WG's》ギルドマスター

対

《ミラー・メイト》PT

ではまず《WG's》ギルドマスターについて。黒いローブに黒いトンガリ帽子になんか凄い杖のいかにも偉大な魔術師です、というじいさん。《ミラー・メイト》の方は機嫌を損ねたレンに対して素早く対応したロートと他三人がいた。……この試合は前のより酷かった……。じいさんは《究極魔法》のユニークスキルをもって隕石を降らすアーツ《メテオ》を連発してきた……。普通なら連発なんかしたらAPがすぐに切れてなにもできなくなるはずだがこのじいさんは違った……。装備品をすべてAP自動回復品にして効果によって一分間にAPの一角が回復するようになっていた。最後まで粘ったのはロートさんだったが初めにあったあの隕石が最後で倒された。

《覇》

《俺の道》PT

対

《マリオット》PT

この大会初のPT対決。《俺の道》は博識そうなメガネキャラが男

女一人ずつと柄の悪い感じの男が二人。こっちの柄の悪い人の武器がおもしろい、一人はどすでもう一人はメリケンサック。《マリオット》は人形使いギルドなので、四人全員が人形を使っていた。・人形使いは基本人形に前線を任せて本体が後方で魔法を使うというスタイルが一般である。・ということもあり手数的には《マリオット》は八人になる。まず、結果だけ言うとな勝ったのは《俺の道》PT・．．．なんかあらかじめ今回でPTには対策が練られているらしい。．．．シルクから聞いた話だが《俺の道》の博識そうな人の男の方、副ギルドでシヨウの弟で兄よりも切れ者らしい。人形が四体すべて破壊したそうだと。．．．．．これで、《マリオット》は今大会に敗退した。

とまあ、こんな感じだ。うーん（伸びをしています）．．．．．ずっと座って見ているから疲れたな

「なあシルク、明日のつて？」

「変な質問するなよな。明日は闘技場《聖》であるからな．．．．まあ、また明日ギルドで待ち合わせよう」

「サンキュー、また明日だな」

俺とシルクは別れた．．．何か聞くことがあったような気がしたが長時間椅子に座っていたことの疲労で早く寝たいという気持ちに負けて気にならなかった。

そして、宿に着き俺は寝た。

次回予告

シェ「やあやあ、久しぶりの私のコーナー」

ト「出てくるな！なんでシェイドさんが着たんだ？たしか《ミラ
ー・メイト》からレンさんとロートさんが来るはず・・・」

シェ「細かいことを気に・・・ワタシハナニモヤツテマセンヨ？
疑ってますね」

ト「当たり前だろ！あんたがいままで次回予告でやった行動から
疑うはまずあんだだろ！ていうか、今回は何した、来れない状況作
るのに何した！」

シェ「残念、実は私は今回何もしていません。レンさんが駄々をこ
ねて来なくなりました」

ト「・・・はい、始めました次回予告コーナー」

シェ「あれ？ツールく〜ん？」

ト「いや〜トラブルがあり始まりが遅くなり申し訳ありません」

シェ「私に謝るぐらいでもいいのでは？」

ト「次回、正々堂々？。俺が活躍するのはいつになるんでしょう
か。ではまたの次回予告で」

シェ「……まずいですね。彼の《スルー》スキルが格段に上がってきている！」（《スルー》- 次回予告限定スキル、シェイドの言葉を見殺し続ける（「ツッコミをいれない」だけのスキル）

s t o r y 27

正々堂々？（前書き）

どうも、ジャツロです。

やっぱりサブタイトルつけるのが下手です・・・文が短いのも原因の一つではありますが・・・とにかく変ですね。

story 27 正々堂々？

――ギルドホーム

「もつそろそろ行こうぜ」

そう言つて俺は椅子から立ち上がった。シルクも俺が立ち上がったのを見て立った。

「ああ、じゃあ行こうか」

――闘技場《聖》

闘技場《聖》・・・《覇》や《神》の二倍の大きさ・・・ここで準々決勝の四試合を行う。

順に第一回戦

《深緑の森》ギルドマスター

対

《ミスティドリーム》ギルドマスター

第二回戦

《聖騎士団》ギルドマスター

対

《俺の道》PT

第三回戦

《ミステイドリーム》PT

対

《愉海賊団》ギルドマスター

第四回戦

《ミラー・メイト》ギルドマスター

対

《WG's》ギルドマスター

こんな感じだ

でもって、今からシェイドさんの試合が始まる

――闘技場《聖》戦場

二人の人があらわれた。一人は真っ黒な鎌を持った人、もう一

人は金髪の長い髪に緑色の軽鎧に身を包んだ人。

真つ黒な鎌を持った人は《ミスティドリーム》ギルドマスターのシェイド。もう一人は《深緑の森》ギルドマスターのカリン・・・彼女は軍刀と小楯を装備している。

「久しぶりに会ったわね、シェイド」

「ええ、お久しぶりです。今日は正々堂々と闘いましょう」

「あなたが正々堂々って・・・・・・・・」

カリンはシェイドに否定的な目を向けた

「おやゝ、私がそんなことを言ったら変で「変」すね、はい。」

シェイドは変ですかと言おうとしたが途中で答えられ肯定的な言葉になった。

「あつ、そろそろ始まるわね」

カウントがはいった

始まった

直後にシェイドが加速してカリンに向かって行った。

瞬間的にカリンの目の前、シェイドが大鎌を振るう。カリンはそれを腕に装備している楯で防ぐが・・・破壊された。

すかさずカリンはサーベルの水平斬りでシェイドに斬り掛かったがシェイドはバックステップで躲しさらに下がり距離をおいた。

「こらーシェイドーいきなり武器破壊はないでしょ！いくら魔武器じゃないからってこれだって結構いいものなんだから！」

「試合中にそんなこと言ってちゃだめですよ。試合に集中してないからそうなるんですよ」

またシェイドはカリンに向かって加速した

「同じ攻撃は通じないわ・・・よ！」

よ！のところでアーツ《ストレンジ》 - 前方に16回の突き - を放った

真っ直ぐ向かってきたシェイドに命中……だがシェイドは霧散した

《空蟬》！

カリンはこれを読んでいた。すかさず背後に向かってサーベルを水平斬り

カキン

背後にいた振り下ろされたシェイドの鎌をサーベルで弾いた……が鎌だけ残してシェイドは霧散した……これも《空蟬》

シェイドは……また背後にいた

《三拳^{みけん}》 - 右腕による三回攻撃 - で背後から殴った。

カリンはその殴られた感触でシェイドがどこにいるのかわかつ

たが……時すでに遅し……シェイドのコンボが始まった

《三拳》の次に《月蹴^{げっしゅう}》 - 孤を描くように蹴り上げ - カリンを空中へ跳ばす、とばした後も追撃、シェイドは空中に跳躍し《亀裂^{きれつ}蹴^{ゆう}》横一文字に蹴り、そこから発生する鎌鼬で襲う……当たる・……楯が無くなった今カリンは防御系スキルが少ない……シェイドとカリンは地面に着地、直後にシェイドはさらに追撃、《戦烈虎咆砲》青い気弾を放った。

カリンにも攻撃する隙があった

「調子に乗るな！」

サーベルが風を纏い、シェイドの方に向ける

「《ウインドバースト》、デイスチャージ！」

軍刀から竜巻を飛ばした

竜巻と気弾がぶつかる……拮抗はせず爆発

爆風、砂煙が舞う

ここでカリンは思ったこの状況はシェイドが奇襲してくるだろうと……こう考えていると

「《詠唱破棄》 《ダークニードル》」

「《詠唱破棄》 《ソニックケージ》」

突如として聞こえた声に反応し飛んできた黒い針を自分の周りに出現させた竜巻により吹き飛ばした。

《ソニックケージ》により砂煙が吹き飛んだ……がカリンにはシェイドが見当たらなかった

前にいない……となるとすぐに後ろを向く……がいない……残りは上！

上を向く、上からの攻撃に軍刀を構えるが……いない

シェイドは……影の中にいた、誰の？、カリンの

カリンの足首を手で掴み

「《フイートフリーズ》」掴まれた所から凍りつき太ももからしたがまったく動けなくなった

カリンは声が聞こえたところで反応したが咄嗟に行動はできなかった

「……はあ、なんであんたはいつもこうわけのわからない闘い出来るわけ？あれ《空蟬》のように見えたけど《空蟬》じゃないし。しかも、《上位格闘術》なんていつの間に習得してたのよ」

「はははっ、誉めたって何もでませんよ……。おっと失礼、誉めてませんねすいません……。ところで降参してくれますか？いや、私も旧友をボコボコにするのは気が引け……。え？私にも良心ぐらいありますよ？」

シェイドに抜かりはなかった……。足が固定されているのもそうだが鎌をもつ手はいつでも攻撃出来るようにしていてさらに足の氷には魔法禁止系の効果もあるようでまったく勝てる気がカリンはなかった

「……あ、もう、負けを認めるわよ……。正々堂々？砂煙から攻撃するわ、常に背後から攻撃しようとするわ。どこに正

々堂々があつた！？・・・・あつ、シェイド先にこれを解いてから、待ちなさい動けないじゃない。こらゝゝゝ無視するなゝゝ！」

足の氷がある程度溶けるまで放置されたカリンだった

――闘技場《聖》観客席――トール視点

・・・・シェイドさんに勝てる人いるのか？今回の試合を見て思うのは・・・・いや、シェイドのあらゆる試合を見てどこか底が見えない強さを感じる。今回の闘いもそう得意表のつきかたが読めない

「シェイドさん勝つたな」

「・・・・トール、シェイドさんってなんだろうね？」

「それは考えちゃだめだ」

とりあえず第一回戦が終わった

第一回戦

《ミスティドリーム》ギルドマスター勝利

次回予告

トー「はい、今日はゲストに《深緑の森》ギルドマスターのカリンさんに来てもらいました」

カリン（以下カリ）「はじめまして」

トー「シェイドさんとは旧友だと聞きますが」

カリ「ええ、シェイドとは初期の頃から一緒にPTを組んでいたわ」

トー「そうなんですか……ちなみにシェイドさんって昔からあんな奇人だったんですか？」

カリ「そうね、まったく性格は変わってないわね」

シェ「あなたもじゃないですか」

トー「また突然あらわれたよ」

カリ「あら、シェイド初めからいたらしいのに」

シェ「え、いいのですか？あなたの秘密大暴露しま……
とりあえずその軍刀は下ろしてもらえますか？」

カリ「やっぱ、うん。いなくていいわ」

シェ「ひどいですね。別にあなたの片想いの相手が誰とかその人にまだ告白すらできてないとか……はっはっは、逃げろ」

カリ「ふふふ、やっぱシェイドだわ。いつかケリをつけようと思って、あ、逃げるな」

トー「……あれ？途中から俺の存在がなかったような。ていうか皆フリーダムすぎなんだよ……はあ、それではまたの次回予告で……俺って本当に主人公なのか？」

s t o r y 2 8

第二回戦〜第三回戦直前（前書き）

どうも、ジャツロです。

なんだかな〜戦闘が好きだからって大会編に入っただけけど今は非常に後悔・・・ふむ、どうしようか

第一回戦は相変わらずシェイドさんが勝っちまったな……

さあ、第二回戦だ。どことどこだ？

第二回戦

《聖騎士団》ギルドマスター

対

《俺の道》PT

わからん……こんなときは

「なあ、シルク」

「まず、《俺の道》PTはショウさんの弟であるセイジさんがこのPTの指揮をとっていてユニークスキルがあるわけではないがその凄い戦術で強力なモンスターやプレイヤーを打ち倒してきたことで有名だ」

俺がシルクのクを言い切る前に解説が始まった、わかってらっ

しゃる

「……だからこのPTは誰だって嫌がるんだ」

おっと聞いてなかった……聞き直せねー

「じゃあ次に、《聖騎士団》ギルドマスターについて。まず、ネームはレウル、ユニークスキル《聖剣》を持っている。この《聖剣》が異常に強い……らしい。聞いた限りでは言葉にできないほど美しいとか」

これは、わからん。……まあ、今からやるのを見ればいいか

戦場内に一人と四人が入ってきた

四人の中に一人メガネをかけた赤い髪の人がいた。どうやらあれがセイジか。

で、もう片方・《聖騎士団》のほうは前回と同じように真っ白な装備な人、この人がレウル。

試合はもう始まる・・・・・・・・・・始まった

先手はドスを持った人が先陣を切った

レウルはドス（めんどくさいからドスで）を魔法で牽制を入れた、《ライトニング・ソード》を放った。三本の光の剣が飛ぶ

ドスは構えたがドスには一本も当たらなかった、その先にいる三人に剣は向かっていた

後ろにいった剣はメリケンサックをつけた人が見を呈して防いだ、残り二人は魔法を詠唱している・・・・・・どうやらかなり高位の魔法を唱えるようだ

ドスが斬りにかかった・・・・・・・・・・が、勝負が一瞬で片がついた。

レウルの連撃、すべての攻撃に光りが纏っている・・・多分攻撃に光属性が付与されていると思う・・・成す術も無くドスのライフが尽きた

「テツエモン！よく時間を稼いでくれたお前の敵は討ってやる・・・白騎士、くらえ！複合アーツ」《アークレス》」

セイジさんともう一人の人の高位魔法の複合アーツ、聞いたことがないアーツ

青い稲妻と青い水が二人の魔術師の前に球体で出現し風船のように膨らみ射出、レウルに向かって放たれた

青い球体、大きさが半径5mの球体バチバチいつているのではなく絶え間無く轟音が鳴りつづけている

対するレウルは

「《セイクリッド・ライト》《ディヴァインソード》……
・・貫け」

突如として空から光りが柱のように差し込み青い球体が減速し、その後青い球体に負けないぐらい大きい光の剣がレウルの真上に出現し、「貫け」の合図とともに青い球体に矢でも放ったような勢いで剣が飛び、まず青い球体を何の苦も無く貫き消滅させそのまま《俺の道》の三人に向かって地面に刺さる

地面が割れ、一人だけ立っていた、セイジだ。他はどうやらライフが尽きたようだ

セイジが万歳をした、これは試合でいう降参を意味する、セイジから負けを認めた

・・・まあ、しかたないよな。ただでさえ強力な複合アイツしかも上位のアイツによる組み合わせが詠唱もないアイツによってやられたら戦う気も失せるな

第二回戦

《聖騎士団》ギルドマスター勝利

次は第三回戦、ベクトさん達の試合

- - - 控室 - - ライカ視点

「はあ」

何故私のため息をついているのかというと、今だ言い争いしている二人がいるから

「ちよつと、シエル抜け駆けは許せないわ」

「何言ってるの？ 抜け駆けって、私はただ」

「お前ら、今から試合だろうが喧嘩なら試合が終わっくふっ」

オマケにベクトさんも役に立たないし、ていうかこうなったシエルさんとホリイには脅し以外止める方法ないと思うんだ。あつ、あとシェイドさんが仲介するか

とりあえず私はシェイドさんにメールを送った………さて、シェイドさんはいつになったら来「ライカ君どうかしましたか？」……はやつ！

ライカがメールを送った五秒ぐらいに現れて一瞬反応できなかった

落ち着け私……ふう

「シェイドさん、あの人達止めてもらえませんか？ 多分原因シェイドさんなので」

「ふむ、止めなくていいのでは？ ほら、喧嘩するほどなんとや

らと言いますし、ね？」

「ね？じゃなく……」

「おや？あそこで寝ているのはベクトですか？」

「二人に顔面にストレートが入りました。だから止めてくださいって」

「おもしろそうだからいいじゃないですか」

平行線、話が進まない、話が躲される……シェイドさんと話すのも疲れる、なんかもう嫌だね……

「あつ、シェイド」

「あら、シェイドとライカちゃんのツーショットこれは！」

あつ、いまさら気づいた。なんかシエルさんが怖い……目が！あれは変態の目だよ！

「どうです？次の試合・・・・・・・・勝てます？」

「楽勝！シエルが必要ないぐらいにね！」

「余裕ね、どうせあの馬鹿な人でしょ？ホリイがいなくてもいいわ」

何だろうね、何でこの二人は・・・・・・・・シェイドさんの言う通り喧嘩するほどなんとやらかな

コンコン

「十分後に第三回戦を行いますので準備をお願いします」

大会運営の係員の人が呼びに来た

「はい、では皆さんの活躍を期待していますよ」

「ねえ、シェイドこれが終わったらライカちゃんと三人で買い物に行かない？」

え？私も？

「だ〜から〜、なんで私を抜く！」

「うるさいわねえ、ライカちゃんとシェイド以外に興味がないわ。しっしっ」

この二人ぜったい仲が良いと思うんだけどな……。あつ、シェイドさんがこっちきた

「ライカ君、指揮は任せましたよ」

小声で言ってきたが、言われるまでもない。この前の試合でベクトさんが使えないことはわかったので私が指揮するのは決まっている。

「はい」

返事だけはしといた。

さ〜て、行きますか

次回予告

トー「今日はゲストにライカさんを招いてます」

ライカ（以下ライ）「あ、うん。はじめまして」

トー「これよりライカさんに質問をしていきます。では始めにシェイドさんって何ですか？」

ライ「うん、その気持ちわかるよ。でも私も詳しくわからないよ・・・悪い人ではないんだよね」

トー「まあ、なんだかんだで人望厚いんですね。では次の質問、ライカさんはぶっちゃけ好きな人はいますか？・・・ちなみにこれは霧夢の男性ギルメン達の声です」

ライ「え？なんでそんなこと引き受けるの？まあいいけど。いよいよそういう人は（本当はいるんだけどね）」

トー「はい、わかりました。そういう人がいるんですね」

ライ「人の心読んじやだめでしょ！」

トー「え、マジなんですか？そっちの方が面白くなって、あっシェイドさん」

ライ「今の話シェイドさんに聞かれた！？確実に噂が広がる！まってシェイドさん」

トー「・・・多分いつもの如く次回予告を邪魔しにきたんだろうな。で、スクープを偶然手に入れたと・・・・・・ライカさんご愁傷様です。それではゲストもいなくなりましたのでまたの次回予告で」

どうも、ジャツロです。

・・・この前振りいらないですね

さて、気づいた人はいると思いますがあらすじ（？）を変更しました。あらすじが適当すぎる！ということに前々から変えようとは考えてはいましたが行動には移らない日々が続きつい最近変えれました。

そして、今話は自分でかなり出来が悪いと思います。ああ、本当にこの先どうしよう。

story 29 あっさり

一つだけ言おう今回はキーリーには運がなかった、と。勝負は一瞬だった

- - - 5分前 - - ベクト視点

ホリイとシエルに殴られた顔がいてえ、まったく俺にとってはシェイドは疫病神だつての！

ベクト達三人は戦場にいた。もうすぐ試合が始まるからだ。

3・・・2・・・1・・・Fight

始まった

そして

「今回は俺様は始めから本気でいくぜ！《スロット》」

キーリーがそう叫んだが

猫、髑髏、コイン、一列の柄がバラバラだった

「ノオオオオオウ」

馬鹿か、と思い俺は《神速》を使い敏捷パラメータを上げ速攻で決めにいった

《瞬影連閃斬》！・・・《神速》も《瞬影連閃斬》も前回出してしまったのでもう出し惜しみしない

だがキーリーも黙って攻撃を受けるわけもなく「《アブオイデンス・コイン》」コインを投げた。

表なら絶対回避、裏なら回避不可

コインが今落ち・・・・・・・・裏

「ノオオオオオウ」

96連撃をともに受けた・・・・だけでなく、シエルの無造作の矢の雨も全弾命中、とりあえず撃ちまくったホリイの炎弾も全

弾命中

- - - トール視点

うん、ひどい試合だな。何か観客席からいっぱいブーイングが聞こえるし……。あれだな前回の試合でキーリーは運を使い果たしたんだよ……。じゃないと報われない

さて、次の試合か。魔法連発するじーさんか鏡使いのレンさんか

- - - 戦場 - - レン視点

ねー、あのおじいちゃん反則だよ。だって一分毎にAPが回復するんだよ？普通のプレイヤーなら何も問題ないんだよ？でもあのおじいちゃんだからね……。まあ、それなりにがんばろう皆の敵討たないといけないし

試合開始の合図、始まった

「ほっほっほっ、可愛い女子を傷つけるのはちと嫌じゃのう・
・降参してくれんか？」

このおじい、いやじじい始めから上目線ム力つく。

「おじいちゃんこそ降参しないの？老体を虐める趣味はないの
で」

「残念じゃ・・・楽はできんもんじゃのう」

「おじいちゃんは今もう引退すればいいんじゃない？」

この会話が最後だった

闘いが始まった

「《詠唱破棄》《メテオ》」

炎石の塊が落ちてくる。レンはとりあえず躲した。

「まだまだ《詠唱破棄》《コキユートス》《詠唱破棄》《ヒー
ト・ブレイズ》《詠唱破棄》《サンダー・ドラゴン》」

無茶苦茶だった。火、水、雷の上級アーツを連発してきた。普

通なら《詠唱破棄》を使って上級アーツを使ったら一発が限度だ。
それをあと二発放った

《コキユートス》 - 指定した範囲に氷の柱を精製 - もちろん範囲内なら一緒に氷漬け、これは間一髪でレンは躲した。

《ヒート・ブレイズ》 - 広範囲での炎上 - 実際は炎上というほど優しくない炎の波がレンを襲う。レンは《上級水魔法》スキルの《バブル・ボム》 - 水砲弾何かとの衝突後爆発 - により炎を相殺しこれも回避。

《サンダー・ドラゴン》 - ドラゴンを象った稲妻による攻撃 -
ドラゴンがレンに迫る。

「《ミラー・シールド》」

レンの前に大きなハート型の鏡の出現。《ミラー・シールド》
- 魔法攻撃を反射する鏡の楯 - でドラゴンを反射することはできなかった。反射効果はダメージ許容内のもので以外反射できない、つまり《サンダー・ドラゴン》のダメージ量が《ミラー・シールド》の反射許容量を越えている。

鏡の楯はドラゴンに割られレンに直撃。レンはライフの六割を削られた。そして、じーさんの攻撃は止まない。

上位魔法連発してくるじーさんに防戦一方のレン、じわりじわりとライフを削り

「《詠唱破棄》《エレメント・フォース》」

四属性の上位魔法同時発動に回避する術がなくレンは敗退した。

第四回戦

《WG's》ギルドマスター勝利

次回予告

シェ「やってまいりましたこのコーナー。突撃、隣のシェイドさん」

ト「いや、どんなコーナーだよ。つか本人が言っているのに隣も何もねー！」

シェ「このコーナーは隣の部屋にいる人をシェイドさんが突撃し、金を巻き上げるというものです」

ト「なんだそのコーナー。隣の晩御飯的なものじゃないのかよ！つか、シェイドさんは必要なのか？」

シェ「それでは最初の犠牲者は誰でしょうか？隣の部屋に突撃」

ト「……………見ねえ、聞かねえ、何も関わりたくねえ……………」

シェ「おや、ベクトですか。さつそくですが金を差し出してください……………理由と申しますとこういうコーナーをやっておりまして……………残念です。実力行使は嫌いなんです……………ほう、決闘には乗り気ですか。ではベクトが負けた時あなたの全財産をギルメンに均等配分しましょうか……………そうですね。私が負けることはないですが、負けたら会議にちゃんと参加しましょうか」

ト「……………次の次回予告、ベクトさんの愚痴かな？」

s t o r y 3 0 H i g h S c h o o l (前書き)

どうも、ジャッロです。

さて、意外と書ける。

目標では17日だったんですがね

なんだろうかが舞い降りた？ふむ、ミステリー

Story 30 High School

「あゝ、くそっ早く家帰りて」

俺は今学校にいたりする……昨日の試合終了後ログアウトして学校に来ているわけだが、多分この時間帯はゲーム内ではシェイドさんやベクトさん達の準決勝がやってるはず

「おい、篠田、これ解いてみる」

今は授業中、数学の問題を解かされた。

カリカリカリ

黒板に計算過程と答えを書き……うん、完璧だ

先生の方を見た

「ちっ」

「ちよっ、今舌打ちしましたよね。」

「いや、気のせいだ。篠田席に座っていいぞ」

まあ、多分問題が当てられたのはゲームのことはかり考えていてぼーっとしていたからだろうが答えたからって舌打ちはないんじゃないか？

「トオルぼけつとしすぎ、さっきから先生が」

「じゃあ、次は隣の黒崎。これ解いてみる」

「・・・はい」

今俺に話し掛けてきたのは黒崎晶男くろさきあきおみたいな名前だが女だ。幼なじみという関係が1番合うだろう。

俺に話し掛けてきたアキラが目ざとく先生に見つかったわけ

「はあ」

もう、帰って。授業はこれで最後だが加速されたあの世界だ

と一時間が二時間学校通うだけでほぼ一日半経っているわけで

「さっきからため息ばかりでうざいよ？」

俺と同じく問題をきちんと解いて戻ってきたアキラに言われた。

つか、ため息もでるわ！今の俺に学校は牢獄すぎる！……
・あゝそっぴや今日掃除当番が、よしサボろう。

キンコンカンコッ

よし、時報が鳴った。これでホームルームさえ終われば

- - - - -

「以上だ。じゃまた明日な」

ティーチャーの言葉も終わり。いざ、エスケープ。

がしっ

俺の肩が掴まれた。誰だ！俺の邪魔をする奴は！

「トオル何処に行くの？今日掃除当番だよな？まさかサボろうなんて思っ
てないよね？」

まあ、この教室で俺の行動読めるのはアキラぐらいだしばれるかな
うとは思ったがまさか教室出る前に捕まるとは思わなかった。

「いや、弟がケガして今から見舞いに行かないと」

「弟君は今日平然と学校来てたよね？やっぱりサボる気だった
んだ……いっちー、みすず、これ捕獲するよ」

教室にある二つの出口をいっちーこと市原翔太とみすずこと木
田美鈴に塞がれた。だみすず

ははは、甘いな！もう一つ出口はあるだろ！

俺は肩にあるアキラの手から逃れ窓に足を掛け……………
飛び降りる

ちなみに、俺の教室は2階……だがまあ、この程度の高さなら飛び降りれないこともない

着地

「ははは、アキラ甘かったな。それじゃ帰らせてもらっぜ」

ふっ、俺の勝ち（？）だ。まあ、俺にかかれば……

「ところがどっこい。ナカシマ参上！」

「ナカシマ……まさかお前も俺を捕獲離せー」

ナカシマ、なかしまだいち中島大地。2mという巨人。俺はナカシマに捕獲された

- - - 教室

「くそっ、まさか俺が飛び降りることまで想定済みとは」

「ほら、とっとと掃除すれば早く帰れるから」

いやいや、この掃除している時間すら惜しいんですよ？なんか常にナカシマが手の届く範囲にいるから逃げられねー

まあいい、捕まったなら仕方がないアキラの言う通りさっさと終わらせて帰るか

サッサッサッサッサ

よし、終わった。じゃあ

「じゃ、俺は帰るぜ。じゃあな」

脱兎の如く走り去っていたが

がしっ

まただれかに捕まえられた。

誰だ！俺の帰路を邪魔する奴は

後ろを振り向いた

「…………部長なんですか？」

「いやゝいいところで会った。よし今から部室にきたまえ」

はっ？いやいや待てよそれは暴挙すぎるんじゃない、またさらわれ
るゝ

…………ゲ会、部室

うーん、どこから状況を整理しようか…………まずここはゲ
ム同好会、ゲ会の部室で俺をさらったこの男、ゲ会の部長、空木裕
樹^{ろき}三年生。

「で、何の用ですか？俺とつと帰って『狩りに行こう』やり
たいんですけど」

「すこし、待ってくれ……………」

この部室、漫画、攻略本、ゲーム機、はたまたゲーム関連の情

報誌などでごちゃごちゃになっている。今そこから部長は何かを探している

「……………おお、あったあった。これだよこれ君に渡したかったのは」

黒いパッケージのゲームディスクが入ってる箱……………カオスオンライン？

「何ですか？これ何のゲームですか？」

「ほら君にあげたじゃん『CHAOS ONLINE』」

「いやいや、あげたよ。『狩りに行こう』の箱に入ってた黒いディスクあれ、これのでちょっと私のミスで『狩りに行こう』の箱に入れて渡してしまった」

……………はあ？

「ちょっと待ってください……………今俺がやってるゲームは『CHAOS ONLINE』？」

「イエス」

「んで、部長のミスで俺にくれた時に箱とディスクが違つので渡した？」

「イエス」

あ~~~~、うん。部長ならやりかねない、ていうかもうやってしまったのか……。説明しよう、俺はあのゲーム狩りにじゃなかった『CHAOS ONLINE』を部長から貰った。で、俺が貰った時箱は『狩りに行こう』でディスクは『CHAOS ONLINE』だったわけだ。でもって俺はこのゲームを予備調査なしにやっちまったから情報の違いとか知らなくてこれは『狩りに行こう』だと思っていた。

「で、なんでそんなめんどくさいことになってるんですか？」

「はっはっは、聞いて驚け……。箱開けてディスク解析したら箱が行方不明になってたからとりあえずそこら辺の空箱にいた」

「じゃあせめて一言いつて渡してくださいよ」

「いや、まあゲームしてたら気づくだろう？」

まったく気づけないんだよな、これが。CHAOS ONLINE
NEってゲーム中まったく出てこないしディスクも黒一色でタイ
トル書いてないし

「無理だ！」

「そうか！ところで二日間いや、あっちの時間なら六日間か？
やってみてどうだ、面白いだろ？」

癪だが確かに面白い………って待て、そうだよもうすぐ
決勝始まんじゃねーか

「部長、箱は頂きます。『狩りに行こう』は明日、返します。
じゃ、そういうことで」

俺は足早に部室、学校を出て家に帰った。

家に帰る途中思ったが部長も『CHAOS ONLINE』や
っているのか聞きそびれた……明日『狩りに行こう』を返すつ
いでに聞こう。

次回予告

トー「きたぜ！俺メインの話・・・いや、おかしいな本来はもとからこうあるべきだったはずなのに何故」

シェ「ほう、トール君の現実^{リアル}の話ですか」

トー「あんたのせいだ」

シェ「なんですか？大声だしたりして、どうかしましたか？」

トー「ほぼ、主人公の座を奪いかけてるだろ」

シェ「なんのことですか？私はただ普通に」

トー「あんたの普通が俺の主人公の座を奪っているのか！」

シェ「さすがにそれはどうしようもありませんね・・・どうです
いっそ、主人公になってみましょうか」

トー「なっ！くそっ、そんなことはさせん。次回ぐはっ」

シェ「次回、シェイドオンライン第一話、主人公の座は私のもの。
次回予告でまた逢いましょう」

s t o r y 3 1

決勝（前書き）

どうも、ジャッロです。

やはり思つ事は更新速度が遅いわりには文章量が少ないということです。

story 31

決勝

さて、ログインしたぜ。こっから闘技場《陰》までダッシュ

ログアウトした場所はいつも使ってる宿《葉落亭^{はつらくてい}》、そこから30分歩いた場所に闘技場《陰》がある。走れば10分ぐらいにはなるだろう。

今はだいたい・・・三位決定戦をやっているだろう。

「うおおおおおおお」

叫びながら全力で走った

・・・闘技場《陰》

よし、この階段上りきればもう見える。

・・・うおおおおおお・・・

ん？三位が決まったのか？

駆け上がる

「……白騎士とベクトさん達が戦っている……いやもう終わったのか。」

どうやら三位は《聖騎士団》のギルドマスターのレウルさんらしい。ベクトさん達が負けたようだ……。ん？っことはだ。シ Eid さんは決勝進出してたのか

え？マジ？シェイドさんってそんなに強いのか？

疑問になりながらシルクの隣……指定席まで行った。

「シルクいつからいた？」

こいつは俺と同じ学生だから多分ついさっきだろうが

「ちよつと前に来たばっかだよ……。ベクトさん達があっさり負けたよ。」

「おー、シェイドよ。そろそろ試合した方がいいんじゃないか？」

「そういえば、そうですね。いやゝすっかり忘れてましたよ。では」

シェイドが大鎌を構えた。

「始めるかの」

じーさんも杖を握りなおした。

先制はじーさんの《ファイアーボール》から始まった

三つの炎弾がシェイドに当たるが、シェイドは霧散――《空蝉》、シェイドさんの得意技。シェイドさん本体はじーさんの真後ろ、シェイドが鎌を振り下ろす

しかし《エア・バースト》――自分の周りに吹き飛ばし効果のある衝撃波――によりシェイドは吹き飛ばされる。

すごいな、背後を見てすらいらないということはシェイドさんの攻撃を読んだ上での《エア・バースト》か

吹き飛ばされたシェイドもまた霧散、シェイドさんはじーさんの影から出現し、足に手で掴もうとして

「《詠唱破棄》《ロック・ブレイク》」

《ロック・ブレイク》：自分の足場を中心に小さな地割れにより影が不安定になりシェイドさんは影から飛び出た

「《詠唱破棄》《ブラッディ・レイン》」

飛び出したシェイドはすかさず、魔法を放つ。紅い槍の雨を降らす。

「《ナルカミ》」

雷の一閃で槍の雨ごと貫き、そのままシェイドへ雷が向かうがシェイドは《ルナ・セイバー》で雷を断ち切り、じーさんへ振り下ろす。

「《ホムラ》《ナルカミ》《レイアン》、複合アーツ《緒言》」

三つの上位アーツによる複合アーツ、じーさんの前に大きい三分の一ずつ赤、黄、青からなる魔法陣が現れる。

「いや、残念です。こんなに隙をつくるとは思いませんでした。」

「

が、シェイドはじーさんの後ろで鎌を首に突き付けていた。

「……目の前におるのはお主じゃないのか？」

その通り、じーさんの前には《ルナ・セイバー》を使っているシェイドがいるがじーさんの後ろにもシェイドがいる。

「わしの記憶違いじゃなければ実体を持った分身は自由に動きまわったり、多数のアーツを駆使したりしなかったはずじゃが？」

シェイドにしか聞こえない音量でじーさんは言った。

「何度か使ってましたよ？一回戦や二回戦に……まあ、

あなたならもう予想はついたでしょう……では降参してもらえますか？」

「ふむ、では最後にそれは何体まで増やせる？」

「三体です」

シェイドとジーさんは聞き取れないぐらいに小声で話した。

――闘技場《陰》観客席――トール視点

今、ジーさんの方が降参した。つまり、シェイドさんが優勝した。周りが一斉に声で包まれる。

「シェイドさんってあんなに強かったんだな……なんで霧夢、第五位ギルドなんだ？」

「ギルドのランクはギルド全体のクエスト達成率、依頼達成率やいろいろあって誰か一人だけすぐくてもランクには直接関わらないからね」

そうなのか、まあ何にせよ自分の所属するギルドマスターが優

勝したんだし喜ぶべきところだよな

「今から、打ち上げだつて」

「優勝したから賞金三億ノールだつて」

「だったら、シェイドさんなら打ち上げに盛大に金使っただろうな」

「ギルドホームでやるんだつて」

近くにいる同じギルメンの声を聞いて

「シルク、俺達も打ち上げ行こうぜ」

「ああ、行こうか」

俺達はギルドホームへ向かった

次回予告

トー「今回はシェイドさんについて語るのでゲストにベクトさんに来てもらいました」

ベク「よっ」

トー「はい、それではまずシェイドさんとはどうして知り合ったんですか？」

ベク「闘技場でシェイドと闘った事がきっかけだな」

トー「ちなみにどっちが勝ったんですか？」

ベク「一方的にやられて負けた、つーかあの時はシェイドについてまったく知らなかったからな」

トー「そうですか。シェイドさんのファンクラブ、SFCはいつ頃からできていたんですか？」

ベク「あゝ、あれは実質ホリイがシェイドにふられた後から……
つてこれ言っているのか？……すまんやつぱ今は無し
で」

トー「では、シェイドさんに一言」

ベク「会議に出席しろ」

シェ「はい、ありがとうございます。では最後の質問私は誰でしょう」

ベク「………はっ！何故シェイドがここに、さっきまでいたツールは！？」

シェ「では、またの次回予告で逢いましょう」

ベク「いや待て謎解きしてけ、おい待て！中途半端すぎんだろ」

s t o r y 3 2 打ち上げにて（前書き）

どうも、ジャツロです。

ゲームに忙しくて・・・いろいろな事情により更新が遅くなりましたが、もう大丈夫片は付きました。まあ、そりゃあ百時間もプレイ時間が経ってれば・・・では、お読みください

「はい、ではシェイドさん優勝、ベクトさん達4位を祝しまして乾杯」

いろいろな音が広がる。

今はギルドホームで打ち上げをしているわけだが

「おつうううう、俺も見に行きたかったのに、なぜだなぜじゃんけんに負けた」

試合を見れなかったジンさんの愚痴を聞かされてる。事の顛末を言つと、ギルドホームを開けたままにしておくのはあまりにも無用心だ、ということは何名かシェイドさんに呼び出され「では、この中から居残り組を決めようと思います。私とじゃんけんで負けた人にしましょうか」でジンさんは負けた、そして、今に至る。

「いや、もうじゃんけんの話はいいです。つーかもうそれ四回は言ってます」

ちなみにジンさん酒飲んでて相手にしてられない

『あー、あー、マイクテス、マイクテス。聞こえますか？』

何か始まった、シェイドさんがマイクを持っている。

『今日もう一つお知らせがあります』

なんだろうか……。ろくな事ではないような気がする

『なんと！ユニークスキル持ちが増えました。彼はたった五日間でレベル20に達し……。』

……。おい、それって俺のことか？

『……。というわけで、ユニークスキル《蒼狼》を手に入れた、
トール君です』

いきなり周りの明かりが全て消え俺だけに明かりが……………

『トール君、かもーん』

ふっ、俺が言うことを聞く……わけがない

「嫌だ、断る！」

後ろを向き走りだし……たかった。

「はい、ご愁傷様」「ツール君、あきらめなよ」「周りに君の仲間はいないよ」

名前も聞いてない人達に捕まえられた。そのまま連行

『残念ですが逃がしません。いや、保険に何人かツール君の周りに捕獲部隊編成しておいてよかったです。』

「っーか、シェイドさんギルメンに話すのは止めとくんじゃなかつたんですか!？」

『そのとおり、と言いたいですが……みなさん、一つだけ言わせて頂きますと彼のユニークスキルたいしたことないスキルだったんですよ。なので報告しました。以上です。あ、あともう一つありました。明後日より第五回ギルド内レベル帯最強決定戦やりますよ。はい、これで本当に以上です』

シェイドがマイクを離れた。

「で、シェイドさん……………くられ！」

いろいろな負の感情を込めたパンチを繰り出したが

「シヨウリュウケン（なぜかカタコト）」

パンチが当たる前にシェイドさんのアッパーが顎にジャストミート。

「危ないですね、短気はいけませんよ。」

「いや、受けてくれてもいいんじゃないですか。」

「痛い嫌ですし」

「くられ！」

「ハドウケン」

不意打ちのパンチも当たらなかった。《戦烈虎咆砲》放たれて
トールは気を失った。

- - - - -

- トール、起きろトール

うるさい、と思いながらも起きた……ここはギルドホ
ム……

「……なぜ！」

「あつ、起きたか」

シルクがいた。

「なあ、なんで俺はギルドホームで寝てたんだ？」

シルクは一度、は？みたいな顔をしたが納得したように、あ
みtainな顔をして

「じゃあ逆に聞くけど昨日の記憶は？」

「昨日・・・・・・・・・・シェイドさん殴りにいく」

思い出した、いろいろ振り回されたあげく俺に《戦烈虎咆砲》まで放たれたことを

「シェイドさんなら別支部に行ったから当分いないよ」

「なんだと！」

「いや、それよりも昨日お前が気絶したあとひど・・・・凄かったんだ・・・・」

シルクから聞いたかぎりこうだ。

俺が気絶したあと、ギルメンの数人がパーティー組んでシェイドさんに挑み乱闘が起きたそう。さらにその乱闘がヒートアップしていきシェイドさんVSベクトさん&ライカさん&p:シエルさん&ホリイさんのギルドマスター対福ギルドマスターのカードが組まれたようだ。で、勝者はライカさん。ちな

みにこの対戦シェイドさんに勝った人がシェイドを連れていける権利が与えられるそうでライカさんの支部行きになった、と。

「うわっ、俺もその試合見たかったな……シェイドさんめ」

「ていうか、ツールいつの間にユニークスキルなんて持ってたんだよ」

その話にきたか、と思いあったことをシルクに話した

「……ユニークスキルって何なんだろうな？」

「僕はそんな経験すらしたこともないからもつと謎だよ」

こんな結論でない会話を打ち切るためにこれからの事について話した。

「なあ、シルクこれからのレベル帯ならどこがいいよ？」

「ん？ああ、そうだな……いや、僕もレベル19で近いしこっちの知り合いでいつも狩りに行ってるパーティーに君も入りなよ」

「いいのか？」

「いいよ、というよりソロでたった五日でレベル20になれるぐらい強いんだしかなり期待もしてる。」

そんな感じでシルクのパーティーに入る予定

次回予告

シェ「ああ、鬱です」

ライ「どうしたんですか？シェイドさん」

シェ「あなたが私に勝ったから本編で私の出番が確実にない！」

ライ「負ける方が悪いんじゃないんですか？」

シェ「いやいや、それにしても酷すぎますよ。だって、ベクトやシエル達を盾に私をラッイライにしてくれたじゃありませんか」

ライ「シェイドさん、ラッイライはどうかと思います。」

シェ「イツカイカよりいいとは思いませんか？」

ライ「……そうですね」

シェ「ああ、私の出番は次はいつたいつなんでしょうが」

ライ「知りません。ですがこちらの支部の雑用をいっぱいしてもらわないといけないので」

シェ「そんな殺生な！出番がない上に雑用まで！いやだー！あつ、ガーちゃん離してください。嫌だ！タスケテー、私に自由を」

ライ「シェイドさん壊れましたね。こんなシェイドさんでは次回予告にも出させませんので、次回の次回予告ではツール君達がやってくれるでしょう。…………オチなんてありませんよ?」

s t o r y 3 3

オブジェクトブレイク（前書き）

どうも、ジャツロです。

スキル集・アーツ集のまとめはいつだそうかお悩み中

story33 オブジェクトブレイク

「グロっ！こわっ！」

目の前にブルーゾンビが三体、青い肌所々皮がめくれてたり血を流していたりした人型。

それを《ソニックエッジ》や《狼波》などの飛び道具で倒す。つーか近接戦闘はしくない。

四度目の《狼波》により三体目のゾンビを倒した。

ベチャツベチャツ

気色悪い足音、後ろを振り向くとまたブルーゾンビが三体……
…なれないことはするんじゃないかったか

- - - - -

俺がそんなことになったかなり前

「よ！シルク」

「ああ、来たか」

噴水前で待ち合わせしていたシルクとあった、シルクの後ろに三人ぐらい人がいる。

「そっちの人達が？」

「うん」

やはり、今回一緒にパーティーを組む人達だった。ちなみにこのゲームではパーティーは最大12人まで組むことができる。

「そいつがトールか？」

体格がいい人でいかにもパワータイプの人。最初の挨拶は肝心だ

「初めまして、トールです。よろしく」

「おう、俺はレッツァ今日はよろしく頼むぜ」

なかなか人が良さそうだった。で、レッツァの後ろに二人女の子がいる。赤髪と金髪、赤の方が前に出て来て

「今日はよろしく、私はミュ、炎・雷系魔法使いだから護衛よろしくね……。で、後ろのこの娘は回復補助が得意な地・光系魔法使いのレインなんだけど、人見知りな部分があるから……。あ、でも大丈夫多分今日一緒にパーティー組んでたら普通に会話できるくらいにはなるって」

「こっちこそ、よろしく」と言っつてこのパーティーの構成を見て中々良いパーティーだなと思う。前衛にはレッツァ、中衛には魔法も剣も使えるシルク、で後衛には攻撃型の魔法使いと回復補助系の魔法使い。

かなりバランスがいいと思う。ということで俺の役回りは

「俺は前衛で戦えばいいか？」

「そうだね、レベルが1番高いし壁にもなるし、頼むよ」

そうそう、このパーティーの中でどうやら俺が1番レベルが高いらしい

トール：Lv・20
シルク：Lv・19
レッツァ：Lv・19
ミユ：Lv・18
レイン：Lv・17

とまあこんな感じだ

「じゃあ、そろそろ行こうか」

シルクの声で皆が動き出した。

-
-
-

来た場所は<湿地の墓所>、レベル30代のアンデッド系モン
スターがいる。

「じゃあ、入ろっか」

入る、というのはこの<湿地の墓所>は地下にあって一階下が
る度にレベル2ずつ強くなっていく。というわけで地下一階

「なあ、レッツァこのモンスターってどんなのがいるんだ？」

ここに来る途中で同じ前衛職として仲良くなり普通に会話できるぐらいになった。ちなみにレッツァはアクス使い

「あーつと？でかいネズミのゾンビとかカラスのゾンビとかゾンビだらけだったはずだ。じゃなかったかシルク？」

レッツァは考えるのを放棄しシルクに聞いた

「デスマウスとヤタガラスとデスハウンド系が大半で奥の方にボスモンスターとしてスコルピオン・・・蠍の化け物がいるから。今日はそいつと戦うのは止めようまだ僕らはレベルもたいして高くないしね」

シルクが言うにはそのスコルピオンは一階下と同じレベルが2高いそうだ。

「・・・おっと、いやがるぜ。犬四匹に鳥三羽。」

さて、じゃあ闘いますか。

- - - - -

順調に狩りはできている。犬は狼より敏捷がたいしたことがなかったのでちゃんとダメージを蓄積すれば余裕だった。鳥は主に俺の衝撃波系の攻撃かミュの炎魔法で楽々倒せた。最後に鼠、こいつはうざい。モンスターアーツを持っていて、ライフがぎりぎりになると《捨て身》を使い始める。《捨て身》を使うとたとえどんな攻撃をつけてもライフが尽きるまで怯まずに執拗に攻撃できるようになる。まあやつかいだったが慣れてくると対処の仕方も出て来た。

「ふう、大分狩ったな。レッツア今何レベルになった？」

「24だ。それにしてもお前凄いな。よく初見で敵の攻撃パターン把握してさらに対処法まで見つけられるな」

俺にとっては普通なのだが、でもまあ賞賛してくれるならいいさ。

「じゃあ、レインがもう少しでレベル上がるそうだからレインがレベル上がったなら今日は帰ろう」

シルクの提案に皆が頷いた。

そして、狩りを続けていたがここで事件は起こった。

ドゴンドゴン

地鳴りがする不審に思っ てシルクに声をかけた

「シルク、これはなんだ？」

「わからない・・・みんな前方に警戒！」

俺の《探知》スキルに反応があつた。多分モンスターだ。地鳴りが近づいてくる。今いる通路はL型の通路でもう見える頃だ

「・・・・・・・・なんだあいつは！」

巨体で大きな棍棒を持ちいかにも知識がなさそうな阿呆顔の人間所々ゾンビ化している

「ゾンビトロールだ！逃げろ、奴にはまだ勝てない。地下三階のボスモンスターだ」

このシルクの言葉を聞いた瞬間みんな動き出した。逃げる際に前衛にレッツァが切り込んで次に討ちもれをシルクが倒しその後ろにミュ、レイン、俺の順番で逃げた。

「あうっ」

が、レインがこけてしまった。後ろからはトロールが追いかけてくる。

俺は「大丈夫か」と、声をかけ立ち上がらせた。

「……まずい、かなり近づいてる

トロールとの距離がかなり近くなっていた。あと数分で目の前まで来るだろう。

「……俺が足止めするから、早く行け！」

大剣を構えた。

「……カッコつけすぎだろうか。だが仲間のために壁になるのも悪くない」

「え……でも……」

レインが固まっている。

「シルク！レイン連れて逃げてくれ、俺が時間を稼ぐ」

「ちょっと待てよ、ツールお前、仲間置いて先に行く真似なん
かできるか！」

「その通りだ、僕らは仲間じゃないか。こういう時こそ仲間
力を合わせるときだろ？」

レツアとシルクにそんな風に言われた……。感動した。今
までソロプレイしかなかったから仲間という言葉が1番効いた。だが

「わかった……。と言いたいがやっぱりダメだ。早く逃げろ。
それに……」

これ以上は口にしなかった……。俺が今から行つ捨て身の作

戦をするから・・・そして、それ以上言わずトロールに単独で向かった。不意をついたので誰も反応できなかった。

ズシンズシンズシンズシン

地鳴りがどんどん近づいている。トロールはもうすぐ目の前。

そして、俺が行う作戦は・・・オブジェクト・ブレイク・・・破壊可能な建物、置物、木などを耐久度を喪失させれば破壊できる。俺が破壊するのは・・・

「《ヴォルフソード》・・・《フレムレイド》！」

《ヴォルフソード》は《蒼狼》スキルのアーツで剣技の攻撃力を上げる。そして、《フレムレイド》 - 斬撃と爆撃による攻撃 - 向ける先は・・・足場

簡単な話だ足場を崩壊させる。それによりトロールをこれ以上近づけないようにする。

「《フレムレイド》！ 《フレムレイド》！」

もちろん通路なのだから簡単に破壊できるわけがなく何度も爆

撃を床に与える。

トロールはもう目の前まで来ている

・・・これが最後だ！

《エクспロージョンブレード》！、《フレムレイド》の強化
版爆発力が《フレムレイド》とは比較にならないくらい強い

「うおおおおおおお！」

ピシリ

・・・来た！

床面にひびが入りトロールがその床面を歩いたことにより床が
崩壊した。

そして、俺とトロールは地下二階に落ちた

・ ・ ・ ・ 回想長かったな、とりあえずブルゾンビの群れは片付けた

ここは地下二階、さあ、どうしようか

次回予告

トオル「まさか次回予告を現実^{リアル}でやるとは思わなかった」

部長「はっはっはっ、あまり気にしない方がいいんじゃないかな。そして私の名前は部長じゃない空木ひ」

トオル「いいじゃないですか部長で。で、なんで部長いるんすか？」

部長「ゲームのことだったら私だろ」

トオル「いや意味わかりません」

部長「むう、これ以上言くと本編に差し支えるから説明できませんね」

トオル「なんでいんの？いなくても変わんねーじゃん！」

部長「失礼な、君みたいに何度も本編に出れないのだよ私は！」

トオル「やっぱ、それが狙いか」

部長「悪いか！」

トオル「いばるな！」

部長「ちっ、仕方ありません……………してやる」

トオル「はっ、本編に関わるから言葉が消されてるぜ」

部長「何！？では……………も、……………も……………言え、ないだと！」

トオル「残念だったな部長、あんたが出て来るにはまだ早過ぎたんだよ」

部長「あきらめんよ、私はまだ……………消されている！えっ、今の関係ないですね？トオル私は今何か間違えたか」

トオル「……………部長とうとう天（筆者）にも見放されたのか……………」

部長「そんなばかな……………」

「さてと……」

ただ今地下二階……うん、みんなを助けるためとは言え
自滅覚悟でやって生き残ってしまったからには生き延びたいのだが・
・・

「どこ行けばいいかわかんねーしな」

マップは初めて来た場所なのでまったくここがどこか確認できない。

「まっ、進むに限るか」

とりあえず、左側の通路を進んで行った。

ああそうそう、ゾンビトロールいたじゃん？あいつ俺が落としたことにより地下二階の床も抜けて元の地下三階に落ちたらしい。
俺が落ちた地点から少しの所に穴ができてたからな

とりあえず進んだ。ここに出て来るモンスターは主にブルーズ

ンビ、たまにレッドゾンビ、まあブルーの上位種だな。おもにこいつら二種しかない。ライフ、防御力が高いが俺の攻撃力重視の大剣の前にはただのライフが多いザコモンスターだ。しいて言うならたまにレッドゾンビが使ってくるモンスターアーツの《ハンドキヤノン》・ロケットパンチ・が要注意だ。一発もくらってないがこのロケットパンチ壁に食い込む威力。

「…………そろそろ上にあがる階段があってもいいんだが、おっ？」

遠目に階段が見えた。よっしゃ、と思いながら階段まで走ったが

カチリ

……？、カチリ？

下を見ると足は何かスイッチらしきものを踏んでいた

……………嫌な予感かしねえ！

グアアアアアアア

両サイドの壁から一体ずつ包帯を全身に巻き付けた人型・マーブルマミィ・があらわれた。包帯の色がやばい緑と紫と茶がぐちゃぐちゃにいれ混ざっている。

二対一しかも多分どっちも中ボスクラス、これはさすがにきつい……APの残量を気にしてられないか……

「サモン、《チャイルドウルフ》そして、サモン《グレイウルフ》！」

俺は《蒼狼》スキルの召喚系アーツに新しいのが加わった《グレイウルフ》以前闘った、灰狼。これで三対二、APは消費したがこれならなんとかなるだろう。

- - - - -

一体は狼二匹に任せた、俺は目の前の包帯男に意識を向けた。そして、奴の腕が飛んできた

「うおっ、こいつもロケットパンチしてくんのか」

さらにそいつのロケットパンチには回転がかかっておりレッドゾンビよりも威力が上がっていた。

「恐いけど接近しなきゃなっ！」

まず手始めに普通に包帯男の肩目掛けて縦斬りをした。

- - 固い！

意外なほどに頑丈だった。包帯のしたは鋼鉄じゃないのか？と思っぐらいに。

「だったら」

《フレムレイド》をした、爆撃による属性攻撃、《フレムレイド》は炎属性の爆撃付加の技・・・基本、アンデッド系は炎・雷・光の属性に弱いことからトールは炎属性がある《フレムレイド》を使った。

「うおりゃあ！」

斬撃、爆発。

ライフが一割減った・・・効いている。

これで、属性ダメージが効くことがわかったが・・・・・・
《フレムレイド》は後五回使う分しかAPが残っていない。AP回復アイテムは一階での狩りとここまでの道中で尽きた。

ここでツールが考えた戦略は地道にダメージを蓄積させてフィニッシュに《エクスプロージョンブレード》をお見舞いする・・・という方法を考えた。《エクスプロージョンブレード》を使うなら二発、だが一発が強力で予想で三割を削れるとツールは考えに至った。

- - - - -

地道にライフを削っていき包帯男のライフがようやく三割に到達

・・・・・・今だ！

《エクスプロージョンブレード》！大爆撃、そして包帯男のライフが一気に削れていき・・・・・・ライフは削れ、なかった。

倒した！と思ったツールには隙ができていた。そこにギリギリライフが残った包帯男のロケットパンチが飛ぶ。

「ぐはっ！」

まともに命中した。トールのライフが一気に削れていき……全快だったライフの六割を削られた。

剣を手放し、壁に打ち付けられたトールは軽く身動きできなかつた。

そんなトールの状態にお構いなしにマミィはトールに攻撃をかけようとする。

マミィの腕が回転しだす、発射前の予備動作……放たれた

うっわ、もう少しで戻れたのにな

「《グレイブシールド》！」

突然の人の声、そしてトールの前に岩が隆起し壁となりマミィの放った腕から守られた。

「トール！大丈夫か！」

「レッツァ、今はこいつを倒すのが先だ《シャイン・ランス》」

みんなが来てくれた、光の槍が残りわずかのライフを削り一体は消滅した。

「うおっしゃ、くらえ！《ダイナミック・ボンバー》」

- - - - -

みんなが来てくれたことによりマミイは倒すことができた。どうやらあの後、スコルピオンを倒して、地下二階に来てくれたそうだ。で、今は墓場前の安全地帯……今、俺は正座させられています。

「……で、なんであんな無茶した！みんなで闘ってもかわなかったんだぞ！なのにお前は……」

シルクに説教を受けてます。

「結果的に僕達が間に合ったからいいものの」

「待ってください」

ん？レインが俺の前に出てシルクを止めてくれた。

「トールさんは悪くありません・・・私があそこでドジしなかったらトールさんがあんなことしなくってもよくて・・・だから・・・」

なんか、すつごく庇ってくれてます。・・・別にみんなのためにやったからそんなに思い詰めなくてもいいのだが

「はいはい、シルクそのへんで説教は終わりにしましょ？トール君も反省してるみたいだし。レインもかなり思い詰めちゃってるから」

「・・・わかった、ただトール今後はそんな真似するなよ？」

「わかった、俺が悪かった。今後はこんな行動しません」

アに

「よろしい」とシルクが言ってみんな街へ帰ったが道中レッツ

「お前中々罪作りな奴だな」

意味がわからないことを言われた。

トールだけは知らない、レインが道中トールの事を見続けてい
ることを

次回予告

トー「疑問に思っただけだよ」

シル「なんだ？ 藪から棒に」

トー「これも次回予告でもないと思うのに次回予告ってのはどうだかな」

シル「このコーナー始めたのって確かシェイドさんだったよね・・・シェイドさんいないし」

シェ「ところがどっこい私もいますよ！」

トー&シル「うわっ！」

シェ「酷い反応ですね、久しぶりのシェイドさんですよ？」

トー「いきなり中継繋げる方が悪いですよ・・・って、ライカさんは？ 確かライカさんに止められていたのでは？」

シェ「ライカ君は今出かけたのでその隙に」

ライ「どの隙ですか？」

シェ「なっ！ ライカ君何故・・・まさか嵌められた！」

ライ『シェイドさん、仕事しといてくださって言っていましたよね？』

シェ『ライカ君？話せばわかるおちつ』

トー「……………」

シル「……………」

トー「中継切れたな」

シル「うん」

トー「次回予告は謎のままで」

シル「うん」

s t o r y 3 5 強さ(前書き)

どうも、ジャツロです。

なんだか最近変なテンションです！

・・・これって、「私はヘンタイです」って言ってるのと同義かな？

「よし、こっちは終わったぜ」

「おう、俺も倒した」

また俺達は、《湿地の墓所》でレベル上げしてるわけだが今日は地下二階、俺がブルーゾンビを一人で倒せたことからたいして強くないということになり来ているわけだが

地下二階に下りる前のスコルピオンは結構強敵だった。形状は蠍とちあえず大きい。でモンスターアーツを三つも駆使してくる。《硬化》 - かなり硬くなる - 《毒針》 - 尻尾から針連射、毒付加 - 《デザートショット》 - 俺が初めて見たモンスターが使う魔法、土系の砂の塊を討つアーツ - 。なかなか強かったが昨日シルク達が俺を助けるために一度闘ったため攻撃パターン、どの属性に弱いかが把握されていたので、てこずったが結構楽に倒せたと思う。

ああ、ちなみにダンジョンの破壊されたオブジェクトは零時にすべてが修復されることになっていて今日来たら穴が塞がっていた。

「今のでレッツアレベル上がったんじゃない？」

ミュがそう言ったのでみんなのレベルを確認した。

トール	・	・	・	・	LV	・	2	8
レッツア	・	・	・	・	LV	・	2	7
シルク	・	・	・	・	LV	・	2	6
ミュ	・	・	・	・	LV	・	2	6
レイン	・	・	・	・	LV	・	2	5

まあ、俺がレベル高いわけは昨日ブルーゾンビやらレッドゾンビの群れを倒しまくったからでいつの間にかレベルが上がってた。

「でもまあ、トールが入ってからレベルが上がるのが早いな」

レッツアがふとそんなことを言い出した。

「いやいや、みんなで頑張ってるからだろ」

俺はすかさず訂正した。

「そんな謙遜することはないって、まあ心強い前衛が二人になったからでいいんじゃないか？」

ナイス、シルクそういう話に持っていつてくれ

「でも実際、前衛が二人になったっていうのもツールが入ったおかげなんだし」

ミュ止めてくれ俺をそんなに上げなくていいから

そんな俺を誉めまくる会話と狩りをして一段落つき。

「じゃあそろそろ行くか！」

地下二階ボスモンスター《マッドレッド》へ

- - - - -

地下二階・地下三階への階段前フロア、ボスモンスターが必ずいる場所

マッドレッドは赤い泥のモンスター、シルクの情報で判明していることは、まず弱点属性は光のみで次にモンスターアーツ、これが厄介一つは《従者召喚》・モンスターによって従者は変わるが召喚系アーツで召喚してくるモンスターはマーブルマミィ、幸いなこ

とに二体までしか召喚してこないし倒してしまえばもう召喚してこない。でもう一つ《形質変化》・マッドレッドの最大の特徴、ドロドロな時とカチカチに固まる時がありドロドロの時は物理攻撃の一切がくらわなくなり、カチカチの時は魔法攻撃の一切が効かなくなる・これは常に変わりまくるのでタイミングを誤るとかなりの隙ができてしまう。

とまあ、かなりの強敵なのでみんなで作戦をたてた。俺の役割はまず一体のマミィを《フレムレイド》《エクスプロージョンブレード》で一気に片を付ける。もう一体はレッツァとミュが引き受ける。でその間のシルク達はシルクが光の束縛系、レインが地・光による補助でマッドレッドの足止め。後はマミィを片付けた方から一気に攻撃。

「…………あれがマッドレッドじゃないか？」

レッツァが遠くにいる赤い物体に指を指す。

「ああ、多分……まだ発見される距離じゃない。みんな準備はいいか」

シルクの声にみんなが頷く

「じゃあ、行こうー」

レッツァと俺はその掛け声とともに赤色目指して走った。

発見されたようで、赤色の両サイドに魔法陣が出現しマールブルマミイが召喚された。

「《エクスプロージョンブレード》！」
ヒクダキ
「《火砕》！」

俺とレッツァの炎系の大ダメージのアーツをマミイに叩きこんだ

当たりどころがよかったのかマミイのライフを四割削った。

――まだまだ！

《エクスプロージョンブレード》に繋げる技は補助系しかないが

「《ヴォルフソード》」

その少し間も無駄にはしない。そしてさらにそこから《狼牙尖旋》 - 突き、斬り上げ、斬り下げ、横一文字の四連撃、攻撃中蒼い

ライトエフェクトがなびく。

マミィのライフは残り一割

――まだ俺のコンボは続いている！

蒼いライトエフェクトが白色になり大剣が真っ白な光の剣となり

「終わりだっ！」

《レイ・エッジ》、《両手大剣》スキル、アーツレベル4（アーツレベル上限5）今ツールが持っているアーツで一番攻撃力が高いアーツ

光による斬撃、マミィのライフは尽きる。

1コンボでマミィを片付ける異常な強さ。シルクはマッドレッドを抑えながらトールの強さに唖然とした。

さて、次はマッドレッドか！

トールはAPを瓶に入っている青い液体を飲み回復させマッドレック
ドに向かった

部長のアーツ紹介コーナー

部長「とうとう私のコーナーができましたか！良い行いはするものですね」

トオル「何故、部長なんだ・・・ていうか、部長でいいのか？」

部長「構いません、出番があるなら背に腹はかえられません！時間が惜しいですね。では今回紹介するアーツはこちら」

アーツ名

《ステイルフォール》

内蔵スキル

《二級罾》

派生

《罾師》

《一級罾》

《二級罾》

《三級罾》

効果

プレイヤーのアイテムだけを落とす落とし穴を設置。《二級罾》マスターで二つ設置可

トオル「なんでこんなえげつないアーツをわざわざ紹介する」

部長「ちなみに、落とし穴設置場所を通ったプレイヤーのアイテム欄から一定確率でかかります。なお、落としアイテムはなんの注意音もならないので。恐いですね」

トオル「つゝか、マジになって説明してる！」

部長「出番がないのだよ！出番が！君が現実^{リアル}に戻ってくれれば私はこんなことしないでいいのです！」

トオル「知るか！所詮部長はサブキャラにも満たない存在だ」

部長「キサマー言っではいけないことをおおおお！」

extra・1 PV50000突破記念(前書き)

どうも、ジャツロです。

……いや、うん。

読めばわかりますがまず先に謝らさせていただきます。

自重しきれませんでした。すいません

後悔してないけど後悔してます。

extra.1 PV50000突破記念

トール「え〜っと、なんとこのCHAOS ONLINE、PVが50000アクセス突破してました。」

シルク「それにより今回はいろんな方に50000という数字について聞いていこうと思います。司会は僕、シルクと・・・」

トール「俺、トールです。ではまずこの方から」

.....ジンの場合

トール「ジンさん。よく名前忘れられるジンさん。最近出番がなかったジンさん。50000という数字に何かありますか？」

ジン「トールウウウ！お前俺に何かうらみでもあるのか！あ？」

シルク「ダメですよジンさん。ただでさえ『出番』が少ないのに印象悪くしてどうするんですか？」

ジン「さりげに俺の事を気遣ってるようにしてるが何故出番が強調されてるんだ？だいたい50000なんて」

トール「はい、時間切れ。では次の人に行きましょう」

ジン「え、ちょ・・・」ブツッ

- - - - - ハンクの場合

トール「はい、じゃあ次は久々のハンクさん」

シルク「今回の企画って出番少ない人を出すための・・・」

ハンク「おお、久しぶりだなあ。」

トール「お？ジンさんとは違う反応。始めの方で出てきて強いキャラなのかな？とか思わせつつのベクトさんへのやられ役だったハンクさん、50000という数字に何かありますか？」

ハンク「ない。というかなあ」

シルク「はい、じゃあ次行きましょう」

ハンク「なっ！お前らあ」

- - - - - ベクトの場合

トール「はい、次は俺も所属する霧夢ギルドの副ギルドマスターにしてユニークスキル《神速剣》の使い手ベクトさんです。・・・
・今までで初めてまともな紹介だったな」

ベクト「おう、何の質問だったか？」

シルク「50000という数字についての質問です。何かありますか？」

ベクト「50000か・・・・・・・・・・おう、あったぜ」

トール「やっとまともな解答そうですね！それは何でしょうか？」

ベクト「シェイドの逃亡・脱走回数」

トール& amp ;シルク「・・・・・・・・・・」

ベクト「つか、あいつどうやったら捕まえられるっつーんだよ・
・ブックサブックサ」

トール「・・・・・・・・よし、さあ次いつてみよう」

・・・・・・・・ライカの場合

シルク「こちら霧夢ギルドの副ギルドマスターにして《調和》スキルの使い手、ライカさんです」

ライカ「どうも、ヤッホー」

トール「いや、無理にヤッホー言わなくてもいいですよ、棒読みになつてますし。」

ライカ「どうもただだと愛想ないよ？」

シルク「・・・・気を取り直しまして、アンケートにライカさんのスリーサイズについて質問があつたのですが・・・・・・・・」

ライカ「胸ないですが、何か？」

トール「誰もそんなこと」

ライカ「ロリ属性ですが何か？」

シルク「落ち着いてください。誰も無理に答え」

ライカ「不愉快なので帰ります・・・シェイドさんでストレス発散しようかな・・・」

トール「・・・・・・・・」

シルク「・・・・・・・・」

トール「・・・まさか質問者側が先に消えるとは思わなかった。てか、最後かなりすごいこと言わなかったか？」

シルク「・・・次に行こう。僕らじゃ止められない・・・」

・・・・・・ホリイ・シエルの場合

トール「あゝ、軽くテンションダウン・・・いやしっかりしろ俺！」

ホリイ「何やってるの？」

トール「あ、ホリイさん。模擬戦の節はお世話になりました。」

ホリイ「いいって、いいって。で、用があるんじゃないの？」

トール「は、はい。こちらの方は霧夢ギルドの副ギルドマスターであり《魔神》スキルの使い手のホリイ様です。」

シルク「えらく言葉が……」

トール「……シルクちょっとこっちこい……。ホリイ様に何か粗相を起こすのはダメだ！身の安全を保障したかったら言うとおりにしとけ！」

シルク「……まあ、わかった……。ではホリイ様……。50000という数字に何かあたりしますか？」

ホリイ「ん？50000か……。シェイドを一日に想う回数ね！」

シルク「さいですか……」

シエル「ホリイのシェイドを想う回数はその程度？私なんか一日に100000回は想ってるわ！あ、もちろんライカちゃんもだけど」

トール（うわあ、嫌な組み合わせ……。これ、危ないかな？）

ホリイ「で、訂正するわ、わたしなんか一日に10000000000回はシェイドの事想ってるし！」

シエル「あら？なんで嘘ついちゃったの？あゝ、今のが嘘なのね？」

シルク（うわー、ガキの喧嘩だ……。え？こんなこと口に出して

言えるはずないじゃないか)

トール「なあ、シルク今のうちに逃げよう。ここはいずれ戦場にうわああああああ」

ホリイ「馬鹿っていう方が馬鹿なんだー！」

シルク「トール、トールウウウ！」

シエル「あら？手を出して来たわね・・・いいわ、決着をつけましょうか」

――――――キーリーの場合

シルク「トールはホリイさんの炎弾の流れ玉により負傷しまし「ハッハー」・・・また後から出てく「イーヤッハー」・・・すいません、ナレーションしている間は静か「俺様がやって来たー！」・・・」

キーリー「俺様の名はキーリー！愉海賊団の船長をしている！俺の武勇伝聞きたいか？そうだよな！じゃあまず俺様の愉海賊団結成秘話からしよう。あの日は・・・」

シルク「・・・誰だ、こんなバカこの企画に入れた奴は・・・
・・・はあ、次行こう・・・」

キーリー「ところがその時クルードとクルーEがマストを支え・・・
・・・」

――――レン・ロートの場合

シルク「こんなサブキャラにまで回ってくるとは……なんだこの企画は……」

ロート「どうも、はじめまして。今日はこちらで何かあるはずですが？」

レン「ねえ、ロート何やってるの？」

シルク「あつ、すいません。親切に名刺までどうも……では、こちらのお二方はギルド《ミラー・メイト》のギルドマスター、副ギルドマスターのレンさんとロートさんです。」

レン「あなただれ？」

ロート「ギルド《ミステイドリーム》のシルクさんですよ。ちなみに平。」

シルク「……では質問ですが、50000という数字に何かありますか？」

レン「んゝ五万個のパフェが欲しい!」

シルク「いや、そういうのじゃなく……ロートさん、少し」

ロート「何でしょうか？」

シルク「この人は一応ギルドマスター何ですよね？」

ロート「？はい・・・ああ、レンさんが対応能力がない分は私が補佐しますので」

シルク「・・・こういつちゃ何ですが・・・あなたがたのギルドよく成り立ってますね」

ロート「レンさんに不備の無いように《ミラー・メイト》には優秀な人材がいます！」

シルク「・・・じゃあ、質問の回答変わりにお願いします」

ロート「まず、50000という数字について。この数字はある規則性により・・・」

・・・???

トール「はあ、やっと復帰できた・・・？トールどうした？」

シルク「いや、君が抜けた間ちよつと凄すぎた。キーリーさんは暴走するし、レン・・・ちゃんはさんじゃなくちゃんづけにしろってしつこいし、ロートさんは50000という数にまったく訳の分からない理論話すし・・・」

トール「・・・お前はよくやった！で、これで最後のはずだよな・・・誰だっけ？」

シルク「それが企画書に場所だけ書いてあって名前が載ってないん

だよな」

トール「・・・いや、シルク。そんなことする人は一人しかいないぜ」

???「はははははははははは！」

シルク「いや、僕も薄々わかったけどね」

???「え？なに？いやいや私が誰だかわかるまい！」

トール& amp ;シルク「シェイドさん」

シェイド「何故わかった！」

トール「いや、そこは驚くところですか？」

シルク「読者の皆さんも???が見えた瞬間予想ついたんじゃない？」

シェイド「馬鹿な、完璧な隠蔽工作及び私を引き立てるための順番にしたのに」

トール「やっぱあんたか！このふざけた企画書」

シルク「なんで僕はこんな企画に乗ったんだろう・・・メインレポーターとかおいしい話には裏があるのか・・・」

シェイド「ですが大丈夫！私もちゃんと50000という数字について考えてきました。さあ、質問してください」

トール「はあ、まあこれが最後ですしね。ではシェイドさん5000という数字に何かありますか？」

シェイド「50000という数字はですね・・・私が会議を脱走した回数です！」

シルク「・・・・・・・・・・」

トール「・・・・・・・・・・」

シェイド「あれ？何かしましたか？いつもなら、あんたそんなに会議抜けてたのかー！、みたいなツッコミ入れているところじゃないですか？」

トール「シェイドさん・・・・・・・・」

シェイド「お？くるか！」

シルク「・・・・被ってます・・・・・・・・」

シェイド「・・・・はい？」

トール「ベクトさんがそれ先に言いましたよ・・・・・・・・」

シェイド「なんですと！」

シルク「最後の最後で・・・・・・・・」

トール「これ、最後だよな。こんなグダグダに終わるのか・・・・・・・・」

シェイド「はっはっは！いつもこんな感じじゃないですか。」

「あんたが言うなー！」

シルク「・・・ライカさんに連絡するか・・・あ、ライカさん？今ここにシェイドさんが」

シェイド「シルク君それは卑怯ではないですか？・・・では、私は逃げます。さらばっ！」

「さあ、さらばってさう、サラダって聞こえない？」

シルク「トール……落ち着け、このままグダグダに終わらせる訳にはいかない……最後の締めは主人公であるお前がやるべきだ！」

「ツール……ああ、わかったぜ。CHAOS ONLINEを見
てくださってる方々これからは「カオス」に精一杯……
シェイドオオオオオ！」

シェイド「私があのまま終わらせるはずがないじゃないですか！」

「トール、威張るなー！くそっ、《エクスプロージョンブレード》！」

シェイド「《ルナセイバー》」

トール「うわあああああ！くそっ今日は負けられるかー！」

シェイド「無駄ですねー、《ダークニードル》！ふはははははは」

シルク「・・・こんなCHAOS ONLINEですがこれからも読んでもらえると嬉しいです。これからも期待を裏切らないようがんばるふっ！・・・お前らー！人が締めやっているのに！」

トール「うっせー！こっちは余裕ねーんだよ！」

シェイド「ははははは、その程度で終わりですか？」

シルク「くられ、トール！《袈裟斬り》」

extra.1 PV50000突破記念(後書き)

・・・・これがCHAOS ONLINEの住人なんです。仕方がない、うん。

彼らに代わって、これまで読んで下さった方がありがとうございます。これを励みに今よりも一層精進を尽くしますのでこれからもCHAOS ONLINEをよろしく願います。

シェ「《ルナセイバー》！」

ト「《エクスプロージョンブレード》！」

え？こっちまで飛び火がうぎゃあああああ！

story36 マッドレッド戦(前書き)

ん？ストックのはずなのに気づいたら手が勝手に

どうも、ジャックです。

ストック作ってたのに気がついたら次話投稿しようとしています。
いいや、やってしまえ！

story 36 マッドレッド戦

「シルク、待たせた！」

「いや、早過ぎるだろ。まあ、いいさ。今物理攻撃しか効かないから僕と一緒に畳み掛けるぞ」

「ああ！」

トールがマッドレッドを見ると固体のような人型の赤い泥になっていた。この状態が魔法攻撃無効状態だとすぐにわかった。

まず、トールが先制を入れた。綺麗に人型の肩目掛けて縦真っ直ぐに切り付けた。

カキン！

「うおっ、硬っ！」

すかさず、シルクも《オールエッジ》 - 横一文字の回転斬りを二回 - をマッドレッドに斬りかかるが

カキンキン！

鉋物を剣で斬る感覚がしなく、まともにダメージを入れられてないという感じがわかる。実際、マッドレッドのライフは1ドット動いたように見えるだけだった。

「なあ、シルク・・・」

「言うな、わかってる・・・．．．．．ツールはレッツアと一緒にもう一体のマミイ倒してくれ。ついでにミユをこっちに呼んでくれ」

どうやらマッドレッドは固体時に物理攻撃を与えられるがその硬さによる防御力は高いことによりダメージは与えられるが微々たるダメージしか与えられない。

よって、物理攻撃メイン俺とレッツアはまったく使いものにならない。だから俺はミユと交代しマミイを倒す方に行くにかぎる

「ミユ！俺と交代だ！あいつに物理攻撃があまり効かない。だから魔法攻撃メインのミユはあっちに参戦してくれ」

「え？・・・．．．．．うん、わかった。ってもうマミイ倒し

てたの？」

そんなことを言われて俺とミユが交代した。

「お前、なんでそんなに早くマミィ倒せるんだ？まだライフ4割残ってるんだが……よっと」

ロケットパンチを躲しながらレッツァに言われた。その飛ばしている間に俺が割り込み

「弱点属性のアーツ連発したらあっさり終わるぞ？……」
《フレムレイド》！」

《フレムレイド》をお見舞いした。マミィのライフが一割ぐらい減る。

「仕方ねーだろこつちには消費がでかいアーツしかねーんだからよ《両手大斧》スキルなめんなよ」

「つと、つと、でも《火砕》三回使うぐらいにはAPあったよな？一気に三連発……まさか！」

俺が気づいたことは

「……………いや、俺もびっくりなんだがそのまさかだ」

レッツアが言った“その”は初撃の《火砕》以外の二回の《火砕》を外したらしい。よく見たらレッツアのAPがもう一割あるかないか……このぐらいだと《両手大斧》のアイツは使えない。

「……………」

レッツアの動きが軽く鈍いなと思ったら、このミスが響いているのか……レッツアはいつも豪快な口調や闘い方をするが意外と神経質な奴でミスを引きずり易いという。

「あ……………うん、ドンマイ」

「よしてくれ、俺がもっとみじめになる……………」

まあ、死なない程度には動けるからいいけどな。これで本当にダメダメになっていたらぜってー邪魔だし。

「しゃーない、一気に終わらせるぞ！俺がマミィの隙をつくるからとどめまかせた！」

「・・・わりい、だがとどめならお前が刺せ・・・そのほうがいい」

「いいや、とどめはお前がやるべきだ！それに、俺はまだあの時助けてもらった借りを返してないんだ・・・レッツァ、俺は補助にまわる、だからマミィにお前の大斧を叩きこんでやれ！」

ああ、レッツァ達には俺が地下二階に落ちたときの貸しがある、それにここでキメてもらってメンタル面で回復してもらいたい・・・カッコつけすぎか・・・

「・・・わかった、一気に片付けるから援護任せたぜ？」

「おう、やってくれ」

俺のこの言葉によりレッツァは動き出した。

「うおおおおおおお！」

レッツァは叫びながらマミィに突っ込んで行った。マミィが両腕を前に出し、ロケットパンチをした。それをツールが《狼波》でレッツァに当たる前に撃ち落とした。隙だらけのマミィに大斧がまともに当たる。一発だけじゃない、二発、三発と思いつきり斧を振り回し、マミィに三連撃を与えた。マミィの腕は元に戻っていて、至近距離でレッツァにロケットパンチをしようとしていた。ツールは間に合わない、と思ったが。レッツァはそのロケットパンチを器用に斧で威力をこらし軌道修正し直撃を避けた後、縦一文字の大斧による攻撃でマミィを倒した。

「レッツァすげーじゃん」

あの距離でロケットパンチをずらせるのはレッツァの力があってこそできる芸当である。

「お前ほどじゃねえよ」とか言いながら、レッツァは左拳を前に出した、俺も左拳を前にだしレッツァの左拳にぶつけた。

「さーて、マッドレッドはどうなってるかな？」

俺とレッツァはシルク達を見た。炎弾、光弾が飛んでいた。その先はもちろんマッドレッド今はドロドロの液状、マッドレッドも触手みたいなもので鞭のように攻撃はしているがシルク達はそれを躲す。マッドレッドのライフはもう二割ぐらい。

油断していたのかレインに鞭が当たりそう……だと思った俺はレインの前まで振るわれた鞭を大剣で弾いた。

「レッツァはミユを護ってやれ！」

こうして、俺とレッツァの護衛もあり攻撃に集中できるようになったミユとレインのおかげでマッドレッドは難無く倒せた。

- - - - -

「マッドレッド意外と弱かったな」

帰り道、レッツァがそんなことを言ったのでミユが

「何言ってるの？マミー一体にも手子摺ってた人が何言ってるんだか……それに較べてツールは今日一番活躍したんじゃない？」

「いやいや、俺はただみんなの護衛しただけじゃん。それよりもレインがみんなの補助をしてくれたから勝てたんだと思うけどな」

マッドレッドとの闘いで実は細部まで気をつかってみんなのラ

イフが常に全開だったのはレインの回復魔法のおかげだ。

「・・・そんなことないよ・・・．．．．．トールくんが私を護ってくれたおかげだよ・・・」

んーなぜかみんな俺のこと褒めるな〜じゃあちよつとくさいがこのセリフを言おう。

「いや、それも・・・」

「みんなが力を合わせたから、だろ？その通りさ、みんなで闘えば負けることなんてないよ」

シルクに取られました。だがまあ俺が言うよりこのパーティーのリーダー的存在のシルクが言った方がしっくりくるな。

そして、今日もまた終わった。

・トオルの質問コーナー・

トオル「げ！現実^{リアル}じゃん・・・っーことは」

部長「その通り私が顯れるのだよ」

トオル「出たか、妖怪部長！」

部長「いや、妖怪つて」

トオル「今回は俺のコーナーだしな！っーわけで予定通りに部長に質問しなければならぬようだが・・・だが、断る！」

部長「トオル君やめたまえ死ぬつもりか！そんなことをすると天（作者）の裁きがくだるぞ！」

トオル「・・・・・・・・・・」

部長「・・・・・・・・・・あれ？」

トオル「はははははは！主人公であることを忘れていた！そうだ俺は主人公なんだ、その替えが聞く部長とはちがアーーーーっ！・・・時間差、だと・・・・・・・・」

部長「・・・・・・・・・・さて、誰が次の主人公になるのでしょうか？もしかしてわたシアアアア・・・・・・・・・・」

とうとう総合評価100越えました！しかし、この総合評価って何だ？イマイチこのシステムを理解できてませんが多ければそれだけ評価してもらえてるってことでもいいのでしょうかね。

アンケートの方も気が向きましたら好きなキャラだけでもいいので答えてもらえたらうれしいです。

ここ数週間、CHAOS ONLINEに没頭していたので部活には参加していなかった・・・なので、久しぶりに部活に顔を出した。

「久しぶり」

「・・・・・・・・」

「よっ！久しぶり、部長に今話しかけても無駄だろ？」

部長は今、ありえない数の弾幕を華麗・・・とは言えないが人と会話できないぐらいに目の前の縦スクロールのシューティングゲームに熱中している。

くたばれ！くたばれ！くたばれ！死んだー！イエー！

部長は自分が操作していたキャラが弾に当たりgame overの文字がでると同時に倒れた。

「あ、部長死んだ」

「お前らホントに暇人だな」

さつきから会話しているのは俺含めて五人しかいないゲ同のメンバーの一人、俺と同年の黒田悟くろださとし、クラスは違う。こいつはかなりの頻度でここにいる。

「おや？ トオル君か？ 久しぶりですね」

部長が復活していた

「久しぶりです」

ゲ同は基本ここでグータラ遊んでいたりゲームについて語りしているダメな部活（俺には聖地だけだな）。

「どうだ、CHAOS ONLINEやっているかい？」

「ええ、楽しいですね。」

俺には今日ここに來た目的があつた。それは・・・

「で、部長ってCHAOS ONLINEやってるんですよね？」

これが聞きたかった。

「ええ、やってますよ」

部長のことだから、まったく言わない・・・やってるのか・・・はやつ！聞きたい事終了・・・いや、どうせだからいろいろ聞こう。

「部長はもう何レベルなんですか？」

まず聞くのはここだろ。

「70ですよ。ついでに言うとギルド《インパクト・マジシャンズ》のギルドマスターをしています」

・・・レベル高っ！つかギルドマスターかよ。

「どうです？うちのギルドに入りませんか？」

「あ、俺もう別のギルド入ってますんで・・・《ミスティドリム》っていう「なに！」」

「・・・トオル君、それは有名な第五位ギルドのことかな？」

ん？部長の様子がおかしい

「ええ、そうですけど？」

「トオル君・・・どんなコネを使って入ったんだい？金か！金か！金「うるせー」」

部長がおかしく・・・前からおかしいがさらにおかしくなりやがった！

「どうした部長、何なんですかさつきから・・・」

「・・・君は霧夢に入れることがどんなにすごいかわかっているのか！？あこはな〜ネクロマンサーと会って気まぐれでしか入れてもらえないギルドなんだぞ！」

いや、意味がわからん。だがまあ俺は始めてすぐにシェイドさんにスカウト？されたからなしゃーない。

その辺の所を部長に話した。

「なんて君は運がいいんだ。だいたいそんな上の人と偶然でも会えたのは奇跡的です。しかもゲームを始めてすぐに！それに・・・」

すっげー力説してくるんだが・・・・・・・・そろそろ本当に熱苦しくなってきた。

「だいたいなんで君はいつもそうリアルラックが高いんだ。」

そんなこと言われても、せいぜい町内の福引きで二等当てたぐらい・・・すごいかな？

「・・・まあ、それは置いときたくはありませんが置いといて。一度一緒にやりますか？」

「いや、まあいいですけど俺まだレベル32ですよ？それにもし手伝ってもらうにしても似通ったレベルの人達とレベル上げしたいです

し」

「心配ご無用！レベルについては差がありますから私は見ている形で、レベル上げなんて始めから手伝う気なんてありませんよ。というわけで今日帰ってからやるでしょうから・・・現実19時に旧王都で会いましょう。私のプレイヤーネームはエル、アイ、エヌ、イーでLINEです。そういえば、トオル君のネームは？」

「トオルです。ティー、オー、エルエル」

「・・・もう少し捻ろうよトオル君。まあ、いいでしょうでは帰宅だ。入ったらメールを送りますよ」

部長か・・・部長のキャラはどんなだろうか。楽しみだ。さーて俺もとつとと帰るか。

次回予告

トー「・・・次回予告に戻ってやがる・・・」

シル「部長、いやこちらではラインか？ラインさんが今話で出てからこっちで出番なして方向らしい。」

トー「まあ・・・部長だからいいか」

シル「それよりも最近聞いた話なんだが・・・シェイドさんも当分出番ないって」

トー「いい気味だ、つーかライカさんにさらわれて今強制労働中だったっけ？とうとうこっちに顔を出せなくなったか・・・」

シル「あと、ハンクさんの名前最近まったく聞かないよね」

トー「ああ、いたなそんな人・・・あれ？ハンクさんってギルドにもいるのに出番なし？」

シル「いや、だからあの人はベクトさんのやられ・・・」

ハンク（以下ハン）「おまえらあ・・・とその前に久しぶりだあ、久しぶりすぎて次回予告に初めてきたキャラ扱いされてやがる」

シル「本当に久しぶりですね。でも、もう収録終わりますよ？」

ハン「なんだとお」

ト「リアクションもイマイチだしな・・・またの次回予告で会い
ましょう。」

ハン「なっ！本当に終わっ・・・ブツッ

スキルについて（前書き）

簡単にスキルについてまとめました。この文章は後々変えたりするかもしれませんが今はこんな解釈です。

スキルについて

スキルの特性には二種類あります。一つは《アクティブスキル》。もう一つは《パッシブスキル》。この二つの説明はあとに書いてあります。次にスキルのグレードについて、これはスキルのレア度をつけるために区分しました。CHAOS ON-LINEですでに説明されましたがもう一度。スキルのグレードには《コモンスキル》《エクストラスキル》《ユニークスキル》の三つがあります。記述の順に希少性が上がります。

☞ 《アクティブスキル》について

・《アクティブスキル》はアーツ・必殺技を使うことができるスキルです。スキルスロットにセットすることによりスキルにあるアーツを使用することができます。スキルの熟練度を上げることアーツを修得していきます。ただしスキル自体には何も効果がなくアーツを使用するためだけのスキルです。

例) 《両手大剣》の場合

熟練度0の状態ではアーツ《ソニックエッジ》しかありませんが、熟練度50になると《フレムレイド》を修得します。スキルによりアーツを修得する熟練度数は違います。

☞ 《パッシブスキル》について

・《パッシブスキル》はスキル単体に効果を持つかわりにアーツを一つも会得しないスキルです。スキルスロットにセットすることに

より常時、効果が反映されるスキルです。スキルの熟練度を上げることにより効果がより強力になります。

例) 《索敵》の場合

《索敵》スキルは範囲内にいるモンスターを察知するスキルです。熟練度により効果の性能が上がります。つまりこの場合索敵範囲が熟練度の上昇により拡がります。

『《コモンスキル》について』

・《コモンスキル》はキャラクターのレベルの上昇だけで修得できるスキルです。これといった条件は無いのでレベルが上げるだけで誰でも手に入れられる。

『《エクストラスキル》について』

・《エクストラスキル》はある条件を満たした時に修得できるスキルです。修得する方法はいくつもあり一つのスキル熟練度を上げるだけで修得出来るものもあれば二つのスキル熟練度を上げなければ修得出来ないスキルもある。はたまた、スキルだけでなくパラメータの量やギリギリのライフを長時間維持することにより修得出来るスキルもある。

『《ユニークスキル》について』

・《ユニークスキル》はエクストラスキルと同じ様にある条件を満たした時修得出来る。違う点をあげると一つしか存在しないスキルであること、二人以上同じスキルを持つていないものが《ユニークスキル》と言える。その人一人以外ユニークスキルを持たないので修得条件は不明。

スキルについて（後書き）

非常に悩むところはスキル集アーツ集をどうするか。
本当にスキルもアーツも増やし過ぎた・・・

story 38

覚醒（前書き）

注意！

- ・ トールが覚醒するわけではありません。
- ・ 部長の名前は空木裕樹またの名を部長という。
- ・ 主人公はトールです。

「えーっと、こいつはリアルで部活の先輩の部長です。」

「いや、ちょっとツール君そんな紹介はないんじゃないかな」

今俺はシルクとレツツアに部長を紹介している。あのあと時間通りに入ってメールを送ったら噴水前での待ち合わせになった。それで、そういえば今日もみんなと噴水前で待ち合わせしていたので部長と合流して今の状況。

「おーい、待った？」

まだ来ていなかったミュとレインが来た。

「いや、さっきみんな集まったばかりですよ」「おや？」

シルクがそうやって言ったあとすぐに部長・・・ラインはミュを見て何かすぐに言った。知り合いか？

「ミュ、レイン紹介するよ。この人は「え？なんでラインさんがいるんですか？」・・・は？」

ミュ知り合いなのか？

「いやー、ツール君と一緒にいるパーティーにミュさんがいるとは思いませんでした。」

ん？話がわからん

「ちょっと待て・・・ぶちよ、ライン！どいうことだ？ミュと知り合いなのか？」

「ええ、ほら言ったじゃないですか。私はギルドのギルドマスターしてるって。ミュさんはうちのギルドの人ですよ。で、ミュさん私がここにいるのはツールとはリアルで部活の先輩、後輩の關係にあります」

「・・・ラインさん」

「ん、なんだいミュさん？」

「燃え尽きるーーーー《エイトフレア》！」

「え？ええー！《ウォーターシールド》」

いきなりミュがラインを襲った。八つの炎弾を放つがすべて水の壁によりラインまでは届かなかった。

「おい、どうしたミュ！」

「どうしたも無いわよ！ラインさん見つけたらギルドに連行しなきゃ最近不在でギルド内ごたごたしてるのよ！」

お怒りの様だ。ギルド不在でどっかのネクロな人と同じじゃねーか。俺はラインに目を向けた。

「……ああー、そういえば最近顔出してませんね……
ってちょっと待ってください！落ち着いて話せば分かり合えます、
きつと」

まったく今の状況が理解しがたいが……多分整理すると、ラインが今日は俺と一緒に行動するつもりでした。しかし彼はまったく自分のギルドをほったらかしにするあまりギルド内はぎくしゃく、同じギルドメンバーのミュに見つかり「あんた何やってんのよ」みたいなことになり攻撃された、と。

「・・・ライン、それはダメだと思うな」

「ダメとかダメじゃないとか関係ない！気絶させても連れてく
！」

ミユは本当にご立腹です。とばかりだけはごめんだ。とりあ
えずラインを睨んだ。がラインは少し何かを考えた後に閃いたよう
な顔をして

「はあ、仕方ありませんね。では条件付きで行ってあげまし
よう。私と決闘して1ダメージでも私が受けたら行きます。ただし、
私がノーダメで勝ったら見逃すということで・・・フッフ、さあ私
の屍を越えて逝け！」

・・・何て言うか部長らしい。なんでもそうだこういう展開の
時は毎回試練っぽくされる。そして、この時の部長は負ける試合を
しない・・・いや、勝ったためしがない。

「それで戻って来てくれるんですか？」

「ええ、私は嘘偽りなく今の事はちゃんと守りますよ」

「いやいや、ミユいくらなんでも無理だ。だいたいレベル差がありすぎる。こんな勝ち目が無いものに乗らない方がいい」

「ん？でしたらみなさん全員で掛かってきてもいいですよ。それぐらいでいいぐらいのハンデでしょう」

いや・・・なんか部長に腹が立ってきた。なんかすっげー上から目線なんだが、部長のくせに

「シルク、レイン、ツールついでにバカ手伝って、お願い」

「お前、バカって俺のことか？俺なのか？」

「・・・だめ？」

「うつ・・・いや、いいけどな」

見ましたかみなさん今レッツアがミユにバカ呼ばわりされたことに講義したけどミユの涙目& a m p ・少し声を掠れさせての「だめ？」に撃沈されましたよ。ここまでならいいんだがそのあとミユが小さくガツポーズとやってやったっていう笑みがありましたよ・・・ミユの見る目が少し変わるな・・・

「じゃあ決まりですね・・・では闘技場一カ所適当に借りてやりましょうか」

- - - 闘技場《悪》

ちなみに闘技場の名称は場所を区分するだけの文字でしかないから神とか悪とか書いてあっても特になんの関係もない。

「なあ、ミュ。ラインってどんな戦闘スタイルなんだ？見た感じ後衛タイプの魔術師のようだが・・・」

ミュは頭を横に振った。

「杖はただ魔法攻撃力を上げるため。ラインさんはインファイト型の魔術師よ」

ミュからいろいろ情報をもらい一先ず作戦も立てたとりあえず陣形はいつもとは違い前衛レッツァ、ミュ真ん中にシルク後衛はラインと俺だ。この配置はラインのトリッキーな動きに対応するためである・・・さらに言ってしまうえば一撃当てればいいのだから慎重に闘えば数で圧倒しているこちらが負けるはずがない。

「作戦タイムは終わったかね？では始めましょう」

みんなが武器を構えカウントが始まる。

3・・・2・・・1、fight！！

カウントが終わった瞬間にミュ、レッツァが動き出す。

「《火砕》！」「《サンダーショット・散》」

レッツァの炎属性による攻撃とミュの雷属性による魔法でレッツァは真正面からミュは囲むように雷弾を放つ・・・一発でも当たればこっちの勝ちだからな

「《覚醒》、オン。《アイスランス》、《グレイブブラスト》、《カオスエッジ》」

「な！」「きゃっ！」「《シャインシールド》！間に合ってくれ！」「ミュ、レッツァ！」「ミュちゃん！」

いきなりラインの体から黄色いオーラが出たあと魔法を連発してきた。レッツァの《火砕》は氷の槍とぶつかりレッツァが押し負

けた。ミユの《サンダーショット・散》は土の弾丸に全弾撃ち落とされた。最後に唱えてきた《カオスエッジ》ラインの頭上から大量の黒い剣が出現し弾丸のように射出されミユとレッツァ襲った。ミユは少し後ろの方にいたのでシルクの《シャインシールド》で防がれたがレッツァは二本ほど剣が直撃しもうライフがあるかないかのぎりぎり、生き残れたのはただ運がよかっただけだと思われる。

「悪いね、君達。私は初めからクライマックスですよ」

ラインは笑っていたが、異変もあった・・・ライフとAPがほぼ無い、いやAPに関しては0だった。俺はラインを見る顔に出ていたのかラインは

「ライフ、APともにあなたがたに削られたものではありませんよ。これは《覚醒》というスキルでね、ライフを1にAPを全て消費することにより初級魔法系は全てAPを消費せずに使えるのですよ。しかも・・・」

「な、に？」

かなり距離があつた俺との差をかなりの速度で近づいてきた。軌道が読めない。

「敏捷、魔力パラメータの上昇もあります。《エイトフレア》

《サンダーショット・散》 《ウィンドボム》」

「《エクスプロージョンブレイド》！……………」
はっ」

《エイトフレア》の八つの炎弾は《エクスプロージョンブレイド》の爆発で相殺し、《サンダーショット・散》の包むように狙ってくる雷弾を前に進むように回避したが、それはラインの狙いで《ウィンドボム》 - 緑の球体の射出、何かに衝突すると衝撃波を発生させる - をまともにくらうことなり吹き飛ばされた。

・・・手数が違い過ぎる！

まず初級魔法系と言っても初級魔法系スキルのアーツレベル5のアーツは中級魔法系スキルのアーツレベル4並の威力、性能はあるそれをAP消費がないから連発できる。まったくふざけたスキルだ《覚醒》っていうスキルは。

「ああ、勘違いしてもらっては困りますね。このスキルにだって欠点がありますよ。まあ今はそれを言いませんがこのスキルを修得していることはミュさんは知りませんでしたからあなたたちが対応できなくてもおかしくはありませんよ？ですがこれで終わりですか？」

ラインはまったく余裕な顔だった。ライフは1で一発当たれば

負けるというのに

「ただだぜ、部長！俺もあと一撃くらったら負けるが・・・俺が勝つ！」

《ソニックエッジ・散》を放ち分散した風の刃を飛ばして闘いを再開させた。そして、みんなと立ち向かった。

- - - - -

「ちくしょー、ラインさんって何者だー！ー！」

俺達はあれから二分後には全滅した。今叫んでいるのは初めに負けたレッツァ。

「何故負けた？レベル差か？いや、レベル差だけじゃないな圧倒的に経験の差が・・・」

とブツブツ独り言を続けているのは最後まで粘ったシルク。負けていった順番を言うとレッツァ ミュ レイン トール シルクだ。

そうそうあの理不尽スキル、あれは《覚醒》というスキルでライフを1にAPを全て消費することにより『5分間』魔力、敏捷パラメータの上昇と初級魔法系スキルのアーツをAP消費することなく発動できるようになる。しかしこれは再度使用時間が24時間つまり丸一日経たないともう一度は使えない。一見最強なスキルに見えるが同レベルの相手だったらライフを1にしてギリギリの状態で闘うにはリスクが高すぎる。さらに言ってしまうと再度使用時間が一日なので一回きりの『5分間』を耐え抜かれたらライフ1、AP0はただ何もできず一撃で葬られるだけ。諸刃の剣といえるだろう。

でもってそのスキルを使って大暴れしてくれた張本人はなんだった言ってギルドへ行った。ミユが「私は何をしていたんだろ・・・」とか言いながらガーン！っていう効果音が似合いそうな感じになっている。

・・・まあ、俺もまだまだ弱いという事だな・・・部長に負けるとか屈辱的過ぎるな。いつか、ぜってー倒す！

・シルクとレッツアの反省会・

シル「このコーナーなんでもありだな・・・」

レッ「いやゝ今日の人すげー強かったな！」

シル「なんで僕がこんな熱苦しい奴と・・・」

レッ「どうした？何さつきからぶつぶつ言ってるんだ？」

シル「・・・いや、なんでもない。レッツアは今回ラインさんと闘って敗因は何だった？」

レッ「魔法は卑怯だ！」

シル「いや、質問の意味理解してるか？」

レッ「男なら魔法なんか使ってんじゃねー！」

シル「・・・黙ってる」

レッ「うおっ、あぶねっ！剣なんて投げるなよ」

シル「話が進まない・・・主旨がまったく意味をなさない」

レッ「何落ち込んでんだよ。なんかあったか？」

シル「お前のせいだ！」

s t o r y 3 9

2組余り1（前書き）

ふゝ・・・どうも、ジャツ口です。

ご無沙汰してます。ネットゲって麻薬なんかですかね。やめられない止まらない・・・かつ えびせんか！

すいませんでした。遊んでて執筆進みませんでした。

story39 2組余り1

「そろそろ何か目標決めないか？」

ここ最近はずっとマッドレッド狩りばかりしていてみんなのレベルも30以上となってそろそろ別の狩場へ行こうかという話の中心になりレッツアが言い出した。

トール	．．．	LV	．	32
シルク	．．．	LV	．	30
レッツア	．．．	LV	．	31
ミュ	．．．	LV	．	30
レイン	．．．	LV	．	30

「いきなりどうしたの？前から変だから気にしないけど」

「最近ミュの俺の扱いひどくないか？．．．まあいいが、実はこれに出てみたいんだが．．．」

レッツアはみんなに見れるように紙を配った。紙にはでかでかと『第38回レベル別タッグマッチ出場者募集！』なることが書かれていた。

「これの30〜45で出ないか？」

30〜45・・・俺達は今ようやく30レベル代、いくらプレイヤーの技術が高くてももし45レベルのタッグと当たったら勝てる気はしない。

「無理だな、いくらなんでも僕らはまだ30レベルになつたばかりだ。負けが見えている」

多分シルクも俺と同じ考えだったのだろう。普通に考えればそうなる・・・だが

「俺はでたいな、べつに負けてもいいじゃないか。やってみないと分からないしな。」

正直言つて上のレベルの人と闘つて絶対はつかないが勝てないこともないと思っている。旧世代の数値だけの闘いじゃないのだから。

「・・・わたしも・・・やりたいな・・・」

「あら？珍しいじゃんレインこついうのやりたがらないと思つたけど・・・でもわたしもやりたいな」

レインにミュも俺と同意見のようだ。みんなの目線がシルクに向かう。結局みんなはシルクがパーティーのリーダーでシルクの一
声でみんなの最終決定になると考えている。俺もそのうちの一人だ。
シルクがNOと答えればみんなもその意見を認める。俺もシルクを
見た。

「……………はあ、いいよ。確かに勝ち負けがすべてじゃ
ないしな……………だけど出るからには勝つぞ！」

「よっしゃーっ！やったぜ！」

提案したレッツァがすぐに大声で歓喜の声を上げた。だが

「でもさ、俺達って五人だから一人余るよな？」

俺は疑問を口にだした。……………レッツァが口を開けたままこっ
ちを見て固まった。……………こいつ人数のことまったく考えてなかつ
たな

「それは僕も考えていたが誰か抜けないといけないが……………
だったら僕が抜けようか？」

「え？わたしシルクと組もうと思ってたんだけど、バランスいいし」

シルクの辞退はミュが組みたいということで辞退がなくなりーペアが出来た。あとは俺とレッツァとレインだが

「わたし・・・トールくんとやりたいです！」

レインが真っ先に辞退すると思っていたが俺をご指名のようだ。回復・補助が得意な後方支援型のレインと組めれるのかなりいい。

「わかった。レインは俺が絶対守ってやるよ」

ん？レインの顔が赤いような・・・

「なあ、やっぱりレインって・・・」

「だよね、トールの今の言葉を素で言ってるのもすごいけど」

「ていうかトール本人は気づいてないようなんだけどな」

「でもトールの最近の活躍っぷりはレインに・・・」

気のせいだろうか、シルクとミュが二人で何か喋っているんだ

がたまに俺の方見たり俺の名前がでたりしてないか？二人が聞こえるぐらいの声の音量だからうまく聞き取れない。

「うおおおおおおおいいいいいいいい」

みんながびくつとした。・・・レッツアが吠えた。

「何故だ！何故提案した俺が出れないんだあああああああ
！？」

そういえば忘れてた。俺とレイン、シルクとミユでペア組んだからレッツアが余りに・・・

「チキシヨウ、こうなったら俺はペアを組んでくれる奴探してお前らに勝つてやる！大会で覚悟しろよ！」

レッツアはパーティーから抜けた。・・・あゝ、まあ暴走するアタッカーのことはいいか

「そういえばこれっていつあんの？」

「リアルだと今週の土曜の昼間だな」

意外とすぐだった、あと二日しかない・・・目標って言うけど二日じゃあできること少くないか？

「じゃあどうするこれから」

「とりあえずペアどうしであと二日何をやるか決めればいいと思う。コンビネーションとか作戦立てるとか、だらうな。」

それから「じゃあな」とシルクとミユはどこかへ行った。レインを見る・・・あんま喋んなーからどうやって切り出そうか・・・と、考えていたら

「あの・・・ツールくんよろしくお願いします。」

挨拶は大事だ、だから俺も

「よろしく、レイン。あと俺のことは普通にツールでいいからくん付けしなくてもいいよ?」

・・・あれ、今までちゃんと顔見たことなかったけどレインってすっごく可愛い・・・

「ん、わかったツール」

この返事とともに笑顔で俺を見た。

ズキユン

この効果音が鳴ってもおかしくない。誰が見てもこの笑顔には胸を撃たれるだろう。

・・・さて、大会までどうしようか。

「部長のためになるCHAOS ONLINE講座」

部長「最近ずっと私のターンですね」

トオル「つか俺には部長が第二のシェイドさんにしか思えないんだが」

部長「ではでは今回はオブジェクトについて」

トオル「俺の発言スルーか!？」

・『オブジェクト』

CHAOS ONLINEの世界には現実と同じようにガラス窓に石をぶつけたら割れる、木造の家に火を点ければ燃えるなど現実に物理的に起こることは物体に働きます。なのでダンジョンの壁に穴を開けることも可能です。ただし多くの物体は一日経つとすべてが自動修復され元通りになります。あらゆる物体には耐久度がありそれを越えると壊れます。例えば、壁の耐久度が100だったとしますプレイヤーの剣の威力は1という場合壁を剣で100回切ることにより壁を破壊できます(オブジェクトにも弱点属性があり弱点属性で攻撃するとより耐久度を減らせます)

部長「そっといえばトオル君は床を破壊したそうですね」

トオル「あゝ地下があるダンジョンだったんで《フレムレイド》《エクスプロージョンブレイド》とかの爆発系ので破壊しました」

部長「いい判断ですね。今後もまわりの環境が戦況に響くこともあるのでよくまわりを確認することは大事です」

トオル「・・・すっげー今までろくな次回予告がなかったのに今までで一番まとまだったんじゃない」

部長「それではまたのこのコーナーで」

トオル「いいのか、こんな普通で！」

story40 二人で一人(前書き)

どうもジャツロです。はじめまして、前から読んでいる方久しぶりです。

ん〜ちよくちよく出すとか言ってたのにぜんぜん投稿してない私があります。すんまへん

story40 二人で一人

――レツツア視点

・・・飛び出したのはいいがあてがない・・・

「ちきしょー何故俺だけちよつと残念なんだ!」

その性格がだめだ、と言ってくれる仲間もない現状では彼は暴走し嘆いている。時折「うがああああ」や「うおおおお!」など叫んでいるので誰も近づきすらない。が、一つの陰がそんな彼に近づいた。

「やあ、こんなところでどうしたんだい?」

灰色の外套を纏って身長と同じぐらいの杖を持った男がいた

声までかけてくれたその人に レツツアは感激し事情を話し尽くした。そしてその男は

「では私が一緒にいきましょうか?」

その男は手を前にだして握手を求めた。レッツアはその手をすぐに握った

「感謝するぜ、えーっと名前教えてくれるか？」

「ああ、ラインと言います。大会ではよろしくお願いします」

――大会当日――トール視点

大会当日になった訳だが二日で出来ることなんてたかが知れる……簡単なコンビネーションとか合図とかそれぐらいしか出来なかった。

「おいトール遅いぞ」

会場にはシルク、ミユ、レインがいた。つまり俺が最後、といつても時間5分前なのだが？

「じゃあ受付いこうぜ」

受付へと向かったが途中でふと思ったことがあったので言

つてみた

「そついえばレッツアは来てないのか？」

いまさらだがレッツアのことを完全に忘れていた。

「ん？・・・ああ、レッツアならあの逃亡からまったく連絡がつかないな。何やってんだろ？」

シルクが答えてからミュやレインも知らないと言った。そして受付で選手登録した。

この大会のタッグ戦のルールを簡単に説明しよう。まず、勝敗条件はタッグの内片方でも負けたらそのタッグの敗北だ。どちらか一人でも倒れたら終わりなのだ。次にスキルの制限について召喚^{サモン}スキルで召喚可能数は二体までそれ以上は召喚できなくなっている。同じくPモン^{ペット}スターも二体までが上限である。武器防具について魔法武器の使用は不可。アイテムについて試合中に持ち込めるアイテムは素材アイテム（装備品は別）のみただし精製、製造、調合などでつくったアイテムに限り使用可（それ以外は持っていてても使用できない）。最後に試合中にログアウトした場合その時点でその人の負けが確定する。

まあこんな所だろう。回復アイテムの使用ができなくなるのは

厳しい。APの回復はアイテムに依存してしまっている俺にはかなり厳しい。APは攻撃を当てるか何もせずに待機しているかアイテムを使うかAP獲得スキルorアーツを使うしか回復手段はない。

でもって、タッグ戦のトーナメント表ができた。名前は伏せてありアルファベットと数字にで表記されていて選手登録したさいに教えられたC3が俺とレインの番号だ

ちなみに参加者が多いのでABCDブロックに別れていて各ブロックに8組。各ブロックの勝者で一位を決める。というわけで俺達の番号は見た通りCブロックの三番目。

- - - - -

「はっ！」

俺はエクスプロージョンブレイドを相手の肩から斬りつけてライフを大幅に削っていきゼロにした。この瞬間勝ちが確定した。

「・・・ふう、お疲れレイン。この後もいけるか？」

意外も意外、俺とレインは準決勝まで勝ち進み次にはCブロックの決勝だ。ここまできたら勝ちあがりたいと思うのは普通の感情だと思う。だがレインが心配だ。彼女はあまり闘うことが得意じゃ

ない補助・支援型の彼女はその役職からまず真っ先に狙われる。さっきの試合でも何度が危ないところだった。そしてさっきからびくびくしてるのが誰から見ても分かる・・・だから彼女がやめたいと言えは辞退するつもりなのだがレインは「いけるか？」に対して頭を縦に振ることで肯定した。

「・・・わかった。じゃあ時間もあるしシルク達の方見に行こうぜ」

シルク達はAブロック一回戦は勝ったところを見た。そしてCブロックに来てないところを見るとまだ勝ち続けているのだろう。

Aブロックのやっている闘技場に着いた。シルクとミュはまだ闘っていた。相手は剣士が二人。二人の剣士をシルクが前衛でギリギリで凌いでいる。

――シルク視点

目の前にいる剣士は完全に純粋な物理攻撃しか持っていないように見える。だが飛び道具系のアーツを使ってくる可能性も考慮しておく

「シルクあとちょっと粘って！」

ミユの詠唱がもう少しで終わるようだ・・・だが僕のライフもミユの大型魔法詠唱の時間稼ぎの防戦をしていたのでかなりきわどい。

相手の剣士は型をつくった

・・・まずい！

ミユの掛け声でミユの詠唱の妨害するよりもライフを削った僕のライフを削りきってしまったおうとアーツの型をつくっている。

だがここで倒れるわけにはいかない！

シルクは腕につけているバックラーを前に出しアーツを使った。

「《セイントタワーディフェンス》！」

《セイントタワーディフェンス》 - 光の壁を出してダメージの軽減ができるスキル。シルクが今もつ防御系最強スキル

相手の剣士の一人が《連続斬り》のアーツを使い12撃の乱舞

を壁に斬りつけた。壁に輝が入り壁の耐久度がもう少しだと分かる。そこにもう一人の剣士が《エビルレイザー》のアーツを使い紫のライトエフェクトが剣に纏いそして強力な突きを放つ。

壁は割れたが勝負はシルク達が勝った。そう、ミュの詠唱が完成した。

「《インフェルノパニック》」

《インフェルノパニック》 - 指定範囲内を焼き尽くす。さらに範囲内にランダムで爆発が起きる。最後に範囲中心で大爆発。《中級炎魔法》スキルのレベル4アーツだ。

二人の剣士は為す術なく燃やされ爆風に当たりラストの大爆発によってライフが尽きた。

- - - トール視点

ミュの魔法がここまで凄くなっていることは知らなかった。正直すごいと思う一撃必殺の大魔法・・・これから闘うのが楽しみだ。さて、次はこっちのCブロックの決勝戦か・・・ぜってー勝つ！

- - -

相手は小学生みたいな……というより小学生が二人のタッグ。本当か？と思ったが確かだそうだ。こんな子供が決勝まで上がってくるということはそれ相応に強いのだと思う。油断だけはないことにした。

相手は小学生の男の子が二人カケルとユウタだ。獲物は二人ともナイフのようだ。《小剣》^{ナイフ}スキルは確か状態異常付加効果があったはずだ……試合がはじまる。

トールは大剣を構えたがこんな子供に剣を向けるのはどうなんだろうかと戸惑った隙はカケル、ユウタに不意を疲れた。

カケル、ユウタはナイフでトールを切った。そしてトールは切られてから気がつく毒と麻痺の状態異常にかかったことに。

「バカじゃねーの？このにーちゃん。何棒立ちなってんだよ」
カケルの方の声

「仕方ないよ」。前の人達もだけど普通は子供に斬りかけられる人は少ないよ」ユウタの方の声

……よくわかった。ようは今と同じで隙を疲れて状態異常で何もできなくなったところをやられたのか

「《パージライト》」

俺は上の方から射す光に照らされた。毒と麻痺から回復した。
後方にいたレインが状態異常回復魔法をかけてくれた。

「もう容赦しない。今みたいな方法じゃ俺は倒せないぜ？覚悟しろよ」

今度はマジに大剣を二人の子供に向けたが、

「だから無駄話するから回復してるんじゃない」

「うっせ、どうせ俺が倒すんだから関係ねーだろ」

「だいたいもつとしんぷるにできるのになんでさ」

「ぐちぐちうるせーな！。お前それでも男かよ！？」

「……やっぱガキだね。あと無視されるのって結構腹立つな……やっちまえ」

「《フレムレイド》オオオオ！」

隙だらけの二人に斬撃を叩きこんだが躲された。

「うおっ！にーちゃんひどくね？つーかせこいな」

「あぶないな」後で今の話の続きやるからね？」じゃあ僕は後ろのおねーちゃんの方妨害するから。うわっあぶな」

危ないのはこっちだ。もう少しでレインの方にいかれるところだった。つーか今普通にこっち警戒せずに向かわなかったか？

「後ろのねーちゃんどうせ補助とか回復しかできそーにねーじゃん。いっしょにこいつたおそーぜ？」

なんつーかこのタケルはあんまり考えて闘ってないな。んでこのタッグの頭脳はユウタか

「えーうしろのおねーちゃんぜったい光攻撃魔法持ってるよーじゃあ僕補助にまわるからあのおにーちゃん任せるよ？」

「よっしゃーきたー。いくぜいくぜいくぜー」《ストライクエッジ》

ナイフを両手に一本ずつ持ち突っ込んできて右手の一本は投げ
てきた、それを大剣に当てて躲したがその後の攻撃が《ストライク
エッジ》だった

「たあああああああ！」

大剣に青いライトエフェクトを纏ったナイフがぶつかった。

重い！軽く一步後ろに後ずさった。かなり一点集中攻撃なのか
体格に似合わないかなり重みのある攻撃だ。

「まだまだあ《ブレイズエッジ》《炎火脚》えんかきやくとどめ《刺突》しとつ」

長いコンボを繰り出された。《ストライクエッジ》から炎纏つ
たナイフの斬りつけ《ブレイズエッジ》を大剣でガードしたがこれ
が相手の狙いだった。次手の《炎火脚》により炎纏った蹴りで大剣
を蹴り飛ばされた。俺は丸腰になってしまった。そこに《刺突》黒
いライトエフェクトを受けたナイフによる突きを繰り出された。

「ぐはっ」

「《ホーリショット》」

「《ローバーマジック》」

タケルはユウタによって俺にとどめを刺す前に蹴り飛ばされた。レインの光弾を躲させるために。ユウタは光弾を《ローバーマジック》 - 魔法吸収アーツによって防いだ。

ユウタの判断力、タケルの行動力が半端なく相性が良くなり強い……。これはかなりてこずりそうだ。

story40 二人で一人（後書き）

帰ってきたシェイド

シェ「私の場所に帰ってきました。そうシェイドが帰ってきましたよ！」

トー「いや、帰ってこなくてもかまわなかったんだが」

シル「シェイドさん・・・残念です」

シェ「え？何故強制転移発動しちゃっ」

トー「なあシルクー」

シル「なんだ？」

トー「シェイドさん何しに来たんだろうな」

シル「……………」

トー「……………ま、いつか」

story 41 二人で一人・続（前書き）

どうも、ジャックです。

・

・

・

．．．．．強いて言うことがあれば更新遅くてごめんなさい

story 41 二人で一人・続

ユウタ、タケルが不意打ちだけで勝ち上がったわけじゃないのはわかった。だがレインの《ホーリシヨット》を無理にでも躲したのを見てわかった。ライフはかなり低い。《ホーリシヨット》は《初級光魔法》スキルの中でもダメージが少ないアーツだ。それを無理に躲すのを見た限りライフは少ないのだろうと予想がつく。

「あーっ、もう少しだったのになんで邪魔すんだよ」

「うしろのおねーちゃんやっぱ魔法攻撃持ってたから助けてあげたんじゃないか」

「あこは俺があこのコンボでにーちゃん倒して終わってただろ」

「よく見ようよーあのおにーちゃんライフはぜんぜん削れてないよ」

「……こいつらよく敵の前でこんなに喋ってるな」

だがこれはチャンス！この間に飛ばされた大剣を回収した。

「あゝ、弾いた剣回収された〜！」

「お前が無駄な説教するからだろ」

「僕は悪くないよ〜つかかってきたのそっちだし〜」

「・・・お前らよく喋るな」

大剣を回収したあとにまだ口論になったのでとうとう俺は口を
はさんでしまった。

二人は俺の方を向いて獲物を狩るように目を光らせた。

「よし、そっこーで狩る。『アレ』やろっぜ」

「んー、いいよ。僕ももう飽きたし」

二人はナイフを前に出し俺に刃を向け

「『『『20本の刃』』』」
トウエンディスライス

彼らのまわりに20本のナイフが空中を回転して舞っている。
そして、

「ゴー!」「討てー!」

掛け声とともにナイフが俺目掛けて飛んで・・・来なかった。
的外れに俺の横を・・・横を通ったナイフを見てすぐにわかった。
俺狙いじゃなくレイン狙いの遠距離攻撃だと!

すぐに飛んできたナイフを大剣で打ち落としていった。飛んできたナイフは速くはないから打ち落とすことに問題はない。だが打ち落とす作業しかできない。

二人の子供は俺に向かってきた。

「『ストライクエツジ』」

咄嗟に大剣を構えて防御したが二人分の重みには堪えられず

「がはっ」

おもいきり飛ばされ壁に叩きつけられた。二人分の《ストライクエツジ》はかなり重い一撃になる。

「今だ！」

タケルの掛け声の意味、俺がダウンしている隙にレインに向かった。まだだ、まだ手はある！

――レイン視点

あつ、ツール君が飛ばされた！どうしようあそこじゃ回復魔法も届かないよ

「今だ！」

タケル達が自分に向かってくる。対処はとりあえず光弾（《ホーリショット》）による牽制。

光弾を数発放つがタケル達にはかすりすらしない。

「よつと」「《ローバーマジック》」

着実に近づいてくる。そんな彼らをみてレインは焦りを感じ初

め命中精度が下がりさらに彼らが近づくのに拍車がかった。

「終わらせるぜ《ストライクエッジ》」

とうとうタケルの攻撃範囲内に入ったので彼はアーツを使ってきた。だがその攻撃は途中で終了した

ウワオォーン

灰狼がタケルにタツクルをかまし吹き飛ばした。それは最近トールが召喚できるようになったアッシュウルフだ。チャイルドウルフの上位種。子狼の子犬っぽさが消えた灰色の毛並みの狼。

灰狼はレインを背中に乗せ走った。

「うわーあのおにーちゃん召喚できるんだ」

「いってーなんだあの狼、ム力つくな。必殺コンボで終わらすようぜ！」

「あーでもさー」

「何だ……」

「ごめん、捕まっただけ」

私と灰狼に氣をとられている間にトール君はユウタ君に剣を突き付けていた。私も灰狼の出現に驚いて灰狼ばかり見てたけどトール君はすごいな。

いつでも倒せる状態になったトールにユウタ達は降参してブロツクの勝者となった。

「次あったらぜってー勝つからな」「そのセリフものすごく負け犬っぽいよ」とまあ前者がタケル君でユウタ君、降参した後に言われた。タケル君はトール君に指差して言っていました。男の子ってよくこんなやりとりしてますね。トール君も意地悪く「お前一人なら余裕だ」とか笑いながら挑発していました。

その後ミユ達はどうだったか見に行った。

――トール視点

「ダメだったよ、相手大剣使いと弓使いだったから僕らの苦手

なパワータイプと魔法詠唱妨害の遠距離型がいたからまったく相手にならなかったよ」

シルクとミュは決勝で負けたそうだ。どうやら相手は大剣使いのパワータイプと弓使いの妨害遠距離型らしい。シルク達が最終トーナメントに残らなかったことを残念に思う気持ちはあったがシルク達と戦わずに済むことにホッとした気持ちもあった。

大会決勝トーナメントは明日だ。

story 41 二人で一人・続（後書き）

次回予告

トー「久しぶりのまともな次回予告らしいよ？」

シル「……のようだな。で、誰が次回予告するんだ？」

トー「シルクじゃないのか？」

シル「僕は何故呼ばれたのかすらわからない」

トー「……………」

シル「……………」

ミュ「やつほい……………って何でシルクいるの？」

トー「お、ミュか。次回予告ってミュがやるのか？」

ミュ「うん。じゃあ早速やっていい？」

トー「そうだな。とつとやって解散しよーぜ」

ミュ「次回、story 42 猛撃。あの人がまた出てきます。……
……たったこれだけのセリフのたまに呼び出されたんだ……」

トー「……………まあ解散しようぜ？じゃあな」

ミユ「またね」

シル「なぜ僕は呼ばれたんだ………」

あゝはい、お久しぶりです。
ジャツロです。

言いわけしたいですが私事ですのでとくに何も言えません

遅れて申し訳ありません。

そして、まだ更新は遅いかもしれません。

気長によろしくおねがいします

今日は決勝トーナメントの日だ。俺達はまず初めにDブロックの勝者と戦う。これに勝ち上がればA、Bブロックのどちらかとなり一位を決める。負けても三位決定戦がある。

Aブロックの勝者はシルク達が闘っていた。大剣使いと弓使い。

Bブロックは・・・

「なっ・・・」

レッツァがいた。だが驚くところはそこじゃない。レッツァといっしょにいたのはラインだ。

だが考えてみよう。ラインはレベル60越えだったはずだレベル制限のあるこの大会にまず参加すらできないはずだ。

そんなことを考えていたらA、Bブロックの一回戦が始まった。

始まりの合図とともにレッツァが大剣使いに駆け込んだ。だが駆け込んだのはレッツァだけではなくラインもレッツァの少し後ろ

にいるが駆け込んだ。

大剣使いは上等手段である《ソニックエッジ》で牽制をいれた。

だがそれでは彼らの勢いは止まらなかった。レッツアは《ソニックエッジ》を大斧で断ち切り勢いを殺すことすらなかった。さらにラインはこの間に強化系魔法によりレッツアがさらに強くなった。見た限り攻撃上昇・防御上昇の強化が施されただろう。

しかし、さすがと言うべきかブロックを勝ち抜いただけはある弓使いは強化されたレッツアに《ブレイクショット》 - 防御力を下げ矢を放つ - を放った。レッツアは《ソニックエッジ》の対処をしたばかりで回避行動をとれず強化分の防御力を相殺した。

・・・レッツアがいい感じに立ち回れているように見える。そう見えるだけで実際はラインの魔法がレッツアを補助しているためだ。レッツアに向かつてくる大剣は《バリア》 - 一秒だけ展開できる防御障壁 - を使い防ぎ、遠距離から放たれる矢は水弾や雷弾によって撃ち落とされる。さらに隙があればレッツアに強化魔法を掛ける

わかつてはいたことだがラインは強い。ライフが多くあったであらう大剣使いはもう二割を切った。対するレッツアはほぼノーダメージ一割も削られていない。

「うおおおおおおおおお!!」

叫びだしたのは大剣使い。何やら大技を出すようだ。白色の大剣のまわりに赤いオーラが纏った・・・が。

ズドン！

大剣使いの技が発動するまでには至らなかった。叫んで大剣にオーラを纏わせている間にラインが大剣使いの真正面まで高速で近づき《初級雷魔法》スキルアーツ、《サンダーライオット》- 最速で雷弾を放つアーツ、ただし射程距離が短く1m - で妨害後、連射。

一気に大剣使いのライフが削られていき大剣使いのライフがゼロとなった。

ラインの強さが半端ない。レッツアは相変わらずの正面突破だったが・・・このコンビは強い！だがまあ先にDブロックの選手に勝たなければならぬ。どんなやつらだったか・・・。

-
-
-
-
-
-

俺達の相手は槍を持った軽装の男と二丁拳銃を持つ女性だ。どちらも中距離能力に長けていそうだ。

接近戦に持ち込むのが常套手段だと思うが相手は相当な手練だと思う。簡単には接近戦へもっていけないと思う。

- - - 試合が始まった。

初めに動いたのは俺だ！まず直進で加速し槍使いに《ヴォルフファング》- 振るった剣より1m先从上からと下からの二本の青い刃で切り裂く- を使い青い刃で奇襲した。

しかし相手も俺が剣で虚空を斬ったところを見た瞬時に攻撃動作だと理解し回避行動をとった。腕にかするだけにいたった。

だが隙も生まれた。ここで追撃したかったが銃弾が跳んできて距離をとらざるをえなかった。

「おう、助かったシロン」

「うっさい、そんなこと後でいいからとっとあっちの後衛倒してよ」

「へいへい〜っと、つっても前衛がちょー強そうなんだが・・・」

「ヘイト！無駄口叩くな！」

槍使いがヘイトで二丁拳銃持つてるのがシロンだそうだ。俺は大剣を前に構え牽制しながら

「レイン、『アレ』の準備しといてくれ！絶対守りきる！」

レインに『アレ』の準備をしてもらった。

ヘイトが槍を構えながらゆっくりと近づいてきた。

「いやあ少年結構強いやる。なあ、少年なんちゅー名前や？」

「・・・ツールだ」

攻撃じゃなくしゃべりかけてきた。俺は攻撃がくると思っていて咄嗟のことについて名前をいってしまった。だがこれで隙をつくってしまった。一瞬の出来事だったかなりの速さで俺の横を抜けて行った。

「悪いなツール、勝てば官軍や。やらせてもらうで！」

……だがまだ間に合う！

と思ったがここでまだ一つミスをしていた。

銃声が三つ鳴り響く。

ヘイトに気を取られシロンに注意がいつていなかった。一発だけまともに脇腹に当たってしまった。そんな中でもヘイトはレインに近づいている。

「サモン、《チャイルドウルフ》！サモン、《アッシュウルフ》！レインを守れ！」

「なんや、少年召喚スキルももったんかい！」

レインの前に守護するように二匹の狼が立った。

だがどちらレベル20以下のモンスターヘイトが臆することなく突撃した。

「……！ヘイト、下がって！」

シロンは気づいたようだ召喚したモンスターには召喚モンスター用のスキルがあることを

「チャイルドウルフ、《ダッシュフアング》！アッシュウルフ、《ワーストハウリング》！」

《ダッシュフアング》は名前の如く高速移動&かみつくだ。だが速い！そして《ワーストハウリング》、移動速度低下の咆哮。

高速攻撃と速度低下のコンボ、ヘイトはどう見ても回避主体の軽防御力だろう。あたれば致命打にはならないものの痛手にはなるだろう。

「うおっ、足が・・・だがあ《イリユージョンブラスト》！ぶっ飛ばえ」

ヘイトは移動速度低下を《イリユージョンブラスト》- 槍先から風弾を放つ- の反動を推進力にし子狼の牙から逃れ灰狼の咆哮の範囲外に逃げ切った。さすが準決勝というべきか対処能力が高い。

だが、もう試合にけりはつく

「……闇よ、閉ざせ《光牢結界》」
ミラージュウインドウ

レインの魔法が完成した。

ミラージュウインドウ
《光牢結界》 - 《結界》 スキル中級アーツ、複数体の対象へ対象者中心に三角錐の結界で閉じ込めるアーツ - これによりヘイト、シロンは結界内に閉じ込められた。

ヘイト、シロンは槍で突き銃で撃ったが結界は崩れることがない。
そして……

「《エクスプロージョンブレイド》！」

内側からだと抜けられないが外側からだとは攻撃が通るという反則な結界。

「そんなあほな……」

これがヘイトの最後の言葉になった

次回予告

シェイド「今回は初のPC投稿DA」

トール「シェイドさん何いつてるんですか？」

シェイド「知らなくてもいいことはいっぱいあるんですよ」

トール「はぁ・・・」

シェイド「まゝそんなことより、久しぶりにあとがきに現れましたよ！シェイドですよ！」

トール「・・・あ、ライカさん」

シェイド「なに！ばれないように抜けだしたはず！」

トール「・・・やっぱですか」

シェイド「トール君はめましたね！私がなにをやったと・・・」

トール「あ、ライカさん・・・トールです、ええ。シェイドさんこっちにいますよ。ええ、ええではお引き取りお願いします」

シェイド「ト、トール君。きみはなんてことするんだ！私がどんな気持ちで今いるかわかってるのですか！」

トール「知らん！はたらけ！」

シェイド「く、働かないのが何がわるい！」

トール「悪いわ！あ、ライカさんこつちです。」

シェイド「ちいっ！次回、決勝戦：挑むは部長！ではまたの次回
よこっ・・・」

トール「あ、あつちです。ライカさん」

ライカ「・・・私の出番これだけ？・・・シェイド・・・
・ふふふっ」

s t o r y 4 3 狼&a m p・結界VS斧&a m p・雷撃（前書き）

どうも、ジャックです。

ええ、アンケート書いて下さった方ありがとうございます。

更新遅いですがどしどしアンケート募集中です。

「いよっ!」「やあ」

声をかけてきたのはレッツァとラインだ。俺達は先の戦いに勝利し決勝へ駒を進めた。でもって今日の前にいるこいつらは決勝で戦う相手だが

「レインあんなすげー技もってたのかよ!すげーな!」

「いや〜トール君のスキルはなかなか見所が多いですね〜」

次戦うというのにずけずけと話しこんでくる。・・・まあ、それはいい。こつちも1番知りたい疑問を投げ付けた。

「なあ、ライン。なんであんな大会に出れるんだ?確かレベルは60・・・は?」

トールはラインのレベルを見た・・・Lv・39・・・は?

わけがわからずラインのことを見ていると

「なに、簡単な事ですよ。キャラデータを消して初めからやりました。」

・・・何言ってるんだこの人は・・・このCHAOS ONLINEはその特性上よくあるMMORPGのように何種類かのキャラを作ることができない。

一人に一つ自分の分身を作ることができる。『トランスギア』・・・この仮想世界へ入れる唯一のハードウェア・・・を起動するにはまず登録した網膜スキャンがある。それにより個人の判定を行う。これがあるため一人が二つ以上分身を作れなくなっている。

そして、ラインのレベルは39レベル・・・

「・・・って、ラインレベル上がるの早過ぎだろ!」

つい先週までは60越えのレベルでいたのだからあの日からレベル1からの再スタートではいくらなんでも早過ぎる。

「ふむ・・・まあ、トル君の反応は予想通りですが普通に種明かしも面白くありませんねえ。・・・では、決勝で私達に勝てましたら教えてあげましょう」

「・・・・・・・・気になるな。ああ、気になる。」（棒読み）

こういう場合、期待するだけ無駄な事が多い・・・・・・・・だが部長へのリベンジになるこの試合は負ける気はない。

「んー、だったらもう少し気になる素振り見せてもいいと思います
がね・・・・・・・・おっとそろそろ決勝ですね。では、試合であいましょう」

- - - - -

レッツァとラインが前にいる。ラインの存在感が大きい・・・・
強い相手が一人いるとそいつばかりに注意がいき他の存在を隠して
しまう。

・・・・・・・・視野を広くもとう

注意すべきはもちろんラインだがそこで動くレッツァはもっと
要注意だ。

試合の始まりを告げるサインが出た。

初めに仕掛けたのは、トールだ。チャイルドウルフとアッシュウルフを召喚し、《ソニクエッジ》をライン目掛けて放った。ラインへ放たれた風の刃はレッツァの大斧に阻まれた。

だが、ここまでトールの作戦通り風の刃を防いだレッツァはその大斧という隙が大きい武器ではまさに今隙だらけである。

ここで、レインの光弾が三発レッツァに向かって飛ぶ・・・だがこれだけでは終わらない。召喚した二匹の狼にラインへの攻撃命令さらに俺は光弾の後ろをつくようにレッツァへ向かう。物量攻撃による鎮圧が目的だった。

「・・・・・・・・なっ!」「!?!」

俺とレインは驚いた。何にか? 光弾の回避と狼の対処に、だ。レッツァとラインの立ち位置が逆転した!

突然ラインとレッツァが入れ代わった。前に出たラインは光弾を雷弾で相殺し、俺の剣を魔力補正が高そうな長い杖で受け止められた。後ろにいるレッツァのほうには向かっていた狼が斧に吹き飛ばされる。

未知のスキルやアーツがまだまだ多くあるのはわかっていた・・・だが今のは対処の仕方がわからない。

位置入れ替えアーツ？への対処法がわからない・・・がラインの境界ならなんとかなるかもしれない・・・

「レイン！アレまた頼む」「はいっ！」

レインが詠唱を始めた。――あと三分

この三分は長くなりそうだ・・・

ライン・レッツア二人を止める必要がある。「《サンダースピ
ア》」！？

「だあっ！」

思考が長かったようでラインから放たれた雷槍を剣で叩き斬る形で防いだ。だが相手の攻撃は止まない。

続いてレッツアが大斧を縦一文字に俺目掛けて振り落とす。それを俺はぎりぎりで見切って左に躲す右側に斧が通過する。そして、今がチャンスだと思いレッツアに仕掛けようとしたが

「まだ俺の攻撃は終わってないぜ」

続いて飛び込んでくるのは《フルスイング》 - 大振りで空振りすると隙は大きい。技の出ははい - によりさらに追撃される。だがレッツアの残念なところで追撃するぞ！ - という意志表示していることを言ってしまったことによりツールは次の攻撃を読んでいた。

バックステップで《フルスイング》を回避し、そのできた隙をツールは逃がさない。

「ぶっ飛べ！《ウルフ・バレット》」

《ウルフ・バレット》 - 転移召喚アーツ、すでに召喚している狼を自分の前に再召喚し青い弾丸にして前方一直線に放つ - により二つの弾丸はレッツアにあたった。

「ぐあっ………フッ！」

レッツアの堅さには驚かされる。レッツアはまだ生きていた。そして、レッツアの最後の微笑は………！！！！

……大きなミスをした。レッツアに気をとられラインが大き

な魔法の詠唱をしていた。そして、さっきのレッツアの笑みは・・・！？

考えるよりも先に動いた。レッツアに狼で牽制させた。

「・・・轟け雷鳴、穿て雷槍」・・・貫け《トライデント》
『！』

ラインが詠唱を完成させ魔法を放ってきた。《トライデント》
・三つの雷槍を対象者に向かって放つアーツ・がレインに近づいていく

・・・まだだ！

トールは全速力でレインの前に行き《トライデント》が届く前にでることができた。

「俺が絶対守りきる！《一匹狼の勇氣》」
ロンリーウルフ・ブレイブ

《一匹狼の勇氣》
ロンリーウルフ・ブレイブ
・蒼い闘気を剣に纏わせ相手へ放つ、溜める
ことにより範囲、威力が強くなる・本来溜めることにより真価が発揮されるアーツだが目の前の危機を回避するにはこれしか方法が思いつかなかった。

蒼い闘気が三本の雷槍にぶつかる。結果はすぐにでた雷槍一本との相殺に終わった。だが目的としては時間稼ぎ、闘気を雷槍にぶつけたところの一瞬の均衡により抱きしめるようにレインを捕まえて横っ跳びに雷槍を躲した。

ここから周囲を確認しようとしたが

ドスン！

目の前に斧が降ってきた。いや目の前にレッツァがいた。

「わりいな、ラインの旦那が強すぎた」

内心で同感だ、と肯定した。そして、俺達は負けたと認識した。

- - - - -

「おい、ライン！」

大会の上位勝者には賞金が授与され、その授与が終わってみんな

なと別れた後だった。

「最近ツール君の私の扱いひどくありません？」

「うつせー……一つだけ聞かせてくれ」

「はい、なんでしょうか？」

「前回から含めてこのゲームのプレイ時間は？」

フフツ、と笑われたがここは重要である。

「こちらの時間で四ヶ月ですよ」

「……四ヶ月の差があるのか……だったら二ヶ月で追い越してみせる！」

次回予告

トール「そろそろさゝ次回予告じゃなくてもいいと思うんだが・・・」

ライン「そんな細かいこと気にしなくてもいいではないですか」

トール「言葉がおかしいぞ？」

ライン「そんなcom（ry）」

トール「ありえないくらい短くなったな・・・」

ライン「どうしたのですか？トール君」

トール「いや、上げるだけ上げて落とされた時の気持ちがよくわかったわけだが・・・」

ライン「ああゝ、そういえば負けましたね」

トール「・・・」

ライン「そういえば新しいアーツも出していましたね。一瞬で終わりましたけど」

トール「・・・」

ライン「ハッハッハッハ」

トール「《エクспロージョンブレード》」

ライン「あぶなっ！トール君暴力はいけませんよ！」

トール「あんたを殺して俺は生きる。それですべて解決だ」

ライン「ははっ、私を殺すと？今のあなたじゃ私に勝てませんな」

T o b e c o t i n u e d

s t o r y 4 4 強さの次元（前書き）

どうも、ジャツロです。

めずらしく速い投稿です。

そして、なんだか最近読んでる方が増えてる！

これからも更新、頑張ります。

よろしければ感想、アンケートをくれると嬉しいです。

story 4 強さの次元

「ふわぁうぁうぁ」

トールが伸びとともに木陰で大きなあくびをあげていた。

「たまにはいいな、こういうのも」

場所は狼の森だ。みんなの都合があわず今日は一人だ。そしてやることなく眠っていた。もちろん敵が出てくるダンジョンなので子狼と灰狼に番犬となつてもらった。ここは子狼の出現地域なので上位の灰狼がいるだけで近づいて来ることもない。

「だが・・・暇だ・・・」

トールは立ち上がり森の奥地へ向かって歩き出した。

「そういえばまだここの奥まで行ってないな・・・このレベルなら大丈夫だろ」

トール LV・33

レインと大会前にモンスター相手に闘っていたら１レベル上がったスキルが増えたりした。

「さて、何が出てくるか・・・」

トールと狼二匹は森の奥へと進んでいく。

- - - - -

「《エクスプロージョンブレード》！！」

銀狼の横腹に振り上げの《エクスプロージョンブレード》をぶつけた。銀狼は上に吹っ飛び消滅した。

銀狼相手だと今のトールでは余裕すらあるようになった。今は森の奥手前あたりだとトールは踏んでいる。

数十メートル進むと

「おっ？」

三つの下に向かう穴があった

「んーどうしようか・・・」

迷う理由としてはこの先にボスクラスのモンスターがいるのじゃないだろうかそして負けてしまうんじゃないだろうかということ

だが

「まゝとりあえず行ってみよう」

1番右側にある穴に入ろうとしたが

クウウーーンクウウーーン

尻尾を垂らしながら二匹の狼は足を引っ張ってきた。

「ん？危険なのか？」

初めて見る狼達の行動に一瞬驚いたが、これは自分を止めてい

ることはわかった。そして穴に入ることを拒むように。

「……止めとくか」

三つの穴に背を向け帰ろうとしたとき地鳴りが起きた。

「っ！……嫌な予感しかしないんだが！」

どうやら真ん中の穴から地鳴りが起きているようだ……音が大きくなってきた。

狼達が低い唸り声をあげている。剣を構えた。

ヴウウウウン

真ん中の穴から朱色の《ソニックエッジ》が飛んできた。周りにあった木が一瞬で灰になった。

《ソニックエッジ》よりも倍は速い火属性の刃。ツールは突然のことに認識が遅れたが大剣を真ん中の穴を前に構えなおした。

穴から何かが出てきた。

全身真っ黒、ところどころ白い紋様があり頭には角、背中には羽、その姿は悪魔。

完全に認識したところで悪魔の姿が消えた。

いや、ちがう！

「つくそが！」

穴の前にいた悪魔は俺の横にいた。大きな腕を振り落としてきた。

それを大剣を振り上げるように斬撃をかましたが

「堅いな・・・」

悪魔の腕は斬れることなく弾く形に終わった。

そして、悪魔の攻撃はまだ止んでいなかった。悪魔の白い紋様

が朱色に変わっていった。トールは見たわけではないがこれがさっきの朱色のソニックエッジの発動動作だとわかった。

だが発射する場所が見当がつかない。

・・・羽か？口か？それとも腕か？

トールの予想はまったく当たることはなかった。

トールは距離を取るよりも相手の死角へ周り込んだ。

悪魔はいきなりサマーソルトをした。足から朱いソニックエッジが飛んだ。

死角にまわったことで躲すことはできた。しかしこの悪魔は異常だ。3mはある巨体で5m近くを一瞬で移動するわサマーソルトはするわとありえない。

逃げるのが1番得策だと思うが逃げれると思わない、というよりも背中を見せたら即死確定だという確信がある。

「ここにいやがったか！もう逃がさねーぜ、デルエト」

剣を二本持った男が顕れた……ベクトさんだ！

「ん？……おっ、ツールか！」

ベクトさんも瞬間移動したかのように悪魔の脇腹に斬撃を叩き込んで悪魔を吹き飛ばし、俺の存在に気づいて声を掛けてきた。

「わりいな、あれは俺の獲物だわ……っと《断絶》」

ベクトさんが飛んできた朱いソニックエッジを《断絶》-居合の太刀により魔法攻撃を無効化する斬撃を繰り出す-によって消滅させた。

「まあ、あとは俺が頂く」

- - - - -
- -

悪魔……デルエトとの闘いはもはや一方的だった。まず速さが違った。デルエトはまだ視認できる速さだったがベクトさんのものは見えなかった。気づいたら何発もの斬撃がデルエトに刻まれていた。

「っしゃー！羽二枚きたぜ」

ベクトさんがメニューのパネルを見て喜んでいた。

「っと・・・わりい、あいつ狩ってしまったな。だがあれはもと俺が追ってたからな」

「いえ、あんなの今の才、私じゃ狩れませんって」

そういつとベクトは、ん？と頭を捻り

「トール今お前のレベルって何だ？」

「33ですよ」

「ありゃ？そうだったか・・・見間違いか？まあ、いいか」

何か勘違いをしていたようだ。

「ところで、この穴ってなんですか？」

「おう、全部地獄界に繋がる穴だ。推奨レベルは160だな」

冗談もほどにしてほしい。そんな化け物に勝てるわけないじゃないか。

「ちなみにさっきのデルエトは69レベルだったな。穴入口付近はレベル低いがいいアイテムが手に入るからな」

あれで69レベル・・・100越えモンスターはいい・・・いや、よそつとりあえず今はこつこつ強くなるだけだ。

その後、ベクトにいろいろ助言をもらいながら街へ戻った。

story 44

強さの次元（後書き）

次回予告

シェイド「はい、始めました！私のコーナー！！！！」

トール「シェイドさん久しぶりですね……じゃなくて、前回の次回予告で T o b e c o n t i n u e d になってましたよね！」

シェイド「まったく、そんなこと結果なんてわかったようなものじゃないませんか。トール君が負けましたよ、やゝい。」

トール「いつかゼッター倒す。シェイドもラインも……」

シェイド「トール君暗黒化とかありそうで恐いですね」

トール「あ、あぶないあぶない次回予告を……」

シェイド「次回、story 45シェイドによるシェイドのためのシェイドの団。SSS団結成！」

トール「いやいやそんな……ってもういない、このオチはそろそろだめだろー！待て！シェイドさん」

s t o r y 4 5 ミライア支部にて（前書き）

どうも、お久しぶりのかたはお久しぶりです最近読まれたかたははじめまして。野に咲く雑草ことジャツロです。

わけがわからん

久しぶりの投稿にも関わらず本編は進みません！

story45 ミライア支部にて

「ツフ、わたしは今ライカ君がいる『ミライア』支部にいます。ちよつとした賭けに負けてライカ君にこき使われています。ギルドマスターなのに！」

一人の少年がツツコミを入れた

「何やってるんスカ・・・」

「なぐに、ちよつと神の視点で見ている人達に訴えてみただけです。」

「そつスカ・・・じゃあこれの整理お願いしますわ」

「世界は非情だ〜！」

「何言ってるんつスカ。あんたがギルドマスターなのにまったく仕事しないからでしょうが！」

「遊び人なめんなよー！」

「だまれ、ニート！」

「世界は非情だー！」

バサバサバサッ

「そうですね、シェイドさんの前だと非情になれますね。ではこれとこれとこれの資料をまとめといてください」

「ラ、ライカ君話し合えばわかり合えると思うんだが・・・どうだろうここはひとはい、じゃあこれもお願い」すいませんでしたー」

シェイドが座っていた椅子から立ち上がろうとしたら肩に・・・笑顔のライカの手が乗っていた。

「・・・」「・・・(ニコニコ)」「哀れっスね」

シェイドは立ち上がることができなかったとか・・・

- - - - -

- - -

「終わったー」

「もう終わったんスか？」

あれから三百枚近くあった資料を30分ぐらいでデータ化を終わらせた。ちなみに三百枚もあったのは今までのツケ

「・・・そんなにすぐ終わるのなら始めからやればいいと思うっス」

「私を縛ることは誰にもでき「ライカさ」るに決まってるじゃないですか」

かなりヘタレだと言うことがよくわかった。ん？ああそういえば俺の名前紹介されてなかったっスね。ミュートっスあの音無しのあれが由来っス。

「で、だミュート君」

いつになく真面目な顔、口調で俺のことを呼んできた

「いつも思っんスけど、ギャップありすぎて面食らっんスけど・
・なんスか？」

「あからさまに嫌そうな顔しないでください」

・・・そんなに嫌そうな顔してるんスかね自分。

「まあ、いいでしょう・・・」

多分そこはよくないと思うっス

「最近このあたりで上位種が連携して襲ってくるというのは本当ですか？」

ミライア周辺の平均レベルは120だいたい平均±20レベルが普通にいてもおかしくないモンスターだ。ここでいう上位種は140オーバーだったり他とは能力値が違うボスモンスターのことをいう。

「あゝ、そうっス。たしか天使系モンスターの新種らしいっス。レベルが170で常に三体で一組で物理軽減スキルもってたり距離は短いらしいけど転移スキルを持ってるらしいっス」

「フム・・・それは確かにこの人達では倒せませんね。レベル差もあるかも知れませんが新種にイレギュラー要素がつきものですし・・・それで、他ギルドはこれの対応をどうしてます？」

ミライアにあるギルドで一番支部が大きいのはシェイドのギルドである『ミステイドリーム』だ。大型ギルドにはモンスターの討伐依頼があつたりする。

「シェイドさん」

「おや、ライカ君どうしたのですか？」

シェイドがいた執務室にライカが入ってきた何か紙を手にもって

「もう知ってると思うけどネル&セル&メル
の討伐依頼きたよ？」

紙に載っていたのは三対の天使のようなもの。顔の部分が真っ平で能面のようになっている。それぞれ大剣、大斧、杖と片手に持っている。そしてなにより特徴的なものが真っ白な身体のところどころに赤が血のようについているところだ。

「なんて恐い天使っスか」

「さて、討伐にいきますか。ライカ君、ミュート君いっしょに行きましょうか」

「じゃあ私はキュイちゃんとミーちゃん連れてくね」

「あゝ俺の出番ってあるんスか？」

正直言ってミュートに出番がまわってくるとはあまりどころかまったく思ってた。まずレベルが……。

ミュート・・・Lv・163
ライカ・・・Lv・254
シェイド・・・Lv・287

けっしてミュートのレベルが低いわけではない。ミュートのレベルはこの支部では高いほうだ。ライカやシェイドはCHAOS ONLINE最前線の攻略組である。シェイドに至っては最上位のレベルである。

「さて、行くとしますか」

天使達に炎弾、雷弾、光弾の三種の弾が降った。天使に炎弾はダメージがあつたが雷弾、光弾は回復していた。天使達のライフは減らなかった。

「ほお、属性吸収をもっているのですか・・・では」

シェイドが動き出した・・・時には大斧を持った天使セルのその武器を持つ左腕が飛んだ。シェイドがセルの背後で大きく構えていた。

「《ヘルズリーパー》」

《ヘルズリーパー》 - 大振りの横一文字の斬撃とにかくダメージが大きく切断能力が高い - でセルの上半身と下半身が別れポリゴン片となって消滅した。

シェイドにかかれればただか170レベルの敵は一瞬なのだ。

だが天使の一体杖を持っているメルが蘇生呪文を唱えた。

セルの別れた身体がふたたびひとつになった。

「ほお、蘇生呪文まで使いますか・・・ボスモンスターですかねえ・・・むっ？」

シェイドが考察しながら闘っていると天使達がシェイドを中心に三角形に囲んだ。

「「「ギイイイイイイイイイイ」」」

シェイドを中心にピラミッド型の青い結界を展開した。

「あゝやられましたねえ・・・ミュートくん2分ほどがんばって」

・・・なにやってんスカ！？うわっ天使こっち向いたよ

だが支部で実力を認められているミュートはそんなことを愚痴りながらもとづくに攻撃モーションに移っていた。弓を空に向けて構えている。矢は三本。

「《サンダートライデント》」

青白い雷を纏い空へ向かって飛んだが森の木を越えたところで急激に方向転換した。方向が変わって三本の矢先には三体の天使がいた。そこから矢はさらに加速して天使達に向かった。

「《フレイムアジャスト》」

《フレイムアジャスト》 - 鏃^{やじり}に炎の魔力を込めて放ち着弾と同時に爆発する - を《サングラントライデント》が上がっている間に準備し雷と炎、上と下からの同時攻撃。

「いつけえええアッ！」

ミュートは技を放ってから気がついた雷属性は効かないむしろ回復することを・・・。

赤い斑点を持った天使達に攻撃は当たったが回復とダメージが相殺され若干回復されてしまった。

このミスがさらに悪い状況を作り出した。天使達が完全にミュートの存在を認識した。

認識した天使達の動きが変わった。剣を持ったネルと斧を持つ

たセルが消えた。

――嫌な予感しかしなっ！？

「あぶなっ！」

セルが背後から斧を振り落としてきた。ある程度予測出来ていたミュートはその攻撃を躲すことができたが・・・。

「えっ、ちょ・・・」

躲した先にネルが剣を構えて待機していた。

この時ミュートはそれはずるいだろと思いながらこれは終わったかなあと思考を巡らしている間にネルはバチバチとなっている雷をのせた斬撃が近づいた。

「諦めるには早いですよ。ミュート君」

斬撃はミュートまでは届かなかった。そこには真っ二つになっているネルと呆れた表情をしたシェイドがいた。

誰のせいだよ、と言いたかったが助けられた手前そんなことは言えなかった。

その後は一瞬だった。ミュートが助けられる前に蘇生できるメルを倒していたためもう蘇生することはなかったが、残り一体となつたからなのかセルが奇声をあげ赤い斑点から赤が白を塗り潰していき全身赤い天使となった。たぶんステータスが上昇したのだろう。たぶんやだろうと言ったのはその状態の赤い天使をシェイドは一撃で葬ってしまったからだ。

「まったく恐いモンスターでしたねぇ」

その時のシェイドの言葉である。恐そうに見えないのは俺だけじゃないと思う。

そうそう、途中から援護がこなかったライカさんはなんとそつちにも新種のモンスターが出たそうだ。そのモンスターは人狼と合^キ成^{メラ}獣を足して二で割つたようなモンスターだったらしく二足歩行、頭と翼にキメラでいて格好はボクサーのようなファイティングポーズ。だが所詮はレベルの差が違ったライカさんの相手ではなかった。ただタフだったためにこずらされたがほぼ無傷で倒した。

「それにしても、今回俺ってなんでいたんだろ・・・」

ミュートはギルドに帰って今回のことを見直して嘆いた。

「ふむ、最近の突発と新種の出没は異常ですね・・・そろそろ
ですか・・・」

一人で何かをつぶやいていた言葉は誰にも聞こえなかった。

「トール」・・・計画通り」

カースト遺跡にて・前編（前書き）

どうも、はじめましてのかたははじめまして。久しぶりのかたは…
ごめんなさい。リアルが忙しす。

カースト遺跡にて・前編

- - - トール視点

「ちよつ、てめえこつちくんじゃねえよ！」

「うるせー、死なばもろともや！お前だけ助からせるかい！」

オレは今走ってる・・・何故かって？後ろからデカイケンタウルス・・・上半身が人で下半身が馬・・・みたいなのが追いかけてくるからだよ！

会話からわかるようにこいつはけっしてオレを追いかけてるわけじゃない。このオレの隣でオレについて来るバカ野郎が狙われているんだ。

- - - 3時間前

オレは今カースト遺跡にいる。今日もみんなと都合が合わなかったためこの前部長がソロにいい場所としてススメてきたこの遺跡にきた。

この遺跡に出てくるモンスターはゾンビなどのアンデッド系ではなくこの遺跡の設定である古代人の遺産がモンスターとして出てくる。基本的には普通のモンスターと変わらないが種族が『未知』となり弱点の属性がないのが特徴だ。

簡単に例を挙げるなら、カーストウルフという種族『未知』モンスターがいる。こいつはよく倒していたチャイルドウルフの外見の形と攻撃パターンが同じの弱点属性がなくなった感じた。

で、事前の（部長が教えてくれた）情報ではアンデッドナイト・まんまだな・騎士甲冑の中身がない大きな盾と長い槍を持ったモンスターが原型のカーストナイトがいるそうだ。ここまでに察したかもしれないがこのモンスター名は『遺跡の名前』+『モンスターを象る名前』である。

今回はこいつに用がある。部長の言うかぎりであれば連戦しても勝て、かつ経験値がいいそうさ。

――カースト遺跡1F

このカースト遺跡は上に5F下にB3Fがあり目的地はB2Fだ。行き方、敵の情報も把握しているのでさくさく進める。

「・・・あれは、カーストドッグか・・・スルーしていこう」

俺は犬のようなものの横を通り過ぎた。カーストドッグはノンアクティブ・・・こちらが攻撃しないかぎり向こうから襲ってこない・・・モンスターなので1Fはすぐに抜けた。

・・・カースト遺跡B2F

という訳でB2Fなんだが・・・え？B1はどうしたって？語るまでなかったから省略だ。いや、B1を下りたすぐ近くに下に落ちる穴があるんだけどそこからわざと落ちることでショートカットできたりする・・・というかした。

で、目的地に着いた。このB2にいるモンスターは三種いる。ひとつは今回のメインターゲットのカーストナイト、あと二種は触手ウネウネの植物モンスターが原型のカーストテンタクルとカーストナイトの上位種のカーストガーディアン、ナイトの時は魔法は使わなかったがガーディアンになると火属性の魔法を使うようになる。あとはナイトより武装がごつくなる。まあこのガーディアンはB3へ行くための門番のような存在でB3へ続く階段手前にあるフロアに三体ぽーんというそうだ。近寄らなければ害はない。でもってテンタクルについても・・・こいつもほとんど害はないだろう床に生えていて自分で自律して動くことができない・・・植物系モンスターによく見られる特徴だ。

と、実質お目当ての敵以外はほぼ害無しとかなりいい狩り場なのである。だが余裕があればガーディアンに闘おうとトールは考えていた。

「・・・っと、いたいた」

いたのはカーストナイト三体、テンタクル一体。テンタクルは無視していいがカーストナイト三体が編成を組んでいるようにいた。

情報通り槍と盾を持った騎士のようなモンスターだ。

「さてと、どうしようか・・・」

トールはこのモンスターが経験値においていいモンスターでたいてい強い（はず）とだけ部長に教えられた。攻撃パターン、モーションは教えてくれなかった。

部長が言うには「そこまで教えたらおもしろくないでしょう（トール訳：まあ苦しんでください）」。くそっ、あの部長め！

思考した結果まず大技で先制攻撃をすることにした。1番近くにいた騎士目掛けて走り距離を詰めた。

「ぶつつぶれる！」

『ヴォルフフアング』で騎士一体を狙った。本当は『エクспロージョンソード』の方が威力があるのだがこいつには火属性に抵抗を持っている。だから属性のない『ヴォルフフアング』の方がおのずとダメージが高い。

狼が牙を向けたように上からと下から蒼い斬撃が騎士を襲った。それと同時に『閃撃：大剣』 - 大剣による居合斬り - も蒼い斬撃と同時に繰り出した。

「え？」

ツールが間の抜けた言葉を出した。自分がやったことに驚いている。

ナイトをアーツ二撃で倒した。その後は他二体も同じように倒した。かなりあっさり倒してしまったツールは自分の経験値、アーツポイントAPの消費量を確認した。

まずAPは大剣スキルや蒼狼スキルで威力が高いがAP消費が大きいスキルを使ったので三分の一は消費していた。そして経験値

は三体で全体の約10%の経験値が入っていたようだ。

「おいおい、いいのかよこんな簡単に経験値入って・・・」

さらに言うならば他に人がいない。狩り場を独占できるのもいい。APを保持していればまず負けないうことがわかったので次はアーツなしで闘ってみることにした。

ちょうどよく一体だけ騎士がいたので斬りかかった。奇襲は見事に盾や槍を抜けて斬撃が通った。騎士をじつくりと見HPを見るとこれだけで二割を削っていた。

そこからは剣撃のラッシュ、まともに入った振り下ろした剣を今度は同じように振り上げてまったく同じ場所に斬りかかった。これも攻撃が通ったがさすがの騎士もこれ以上はやられないように槍でトールを貫こうとした。

しかしトールはこれを読んでいたのですでに間合いをとっていたため槍は虚空を貫いた。そして、この虚空を貫くという隙を見逃さなかった。騎士の左よりに距離を詰めた。騎士は左に槍右に盾をもっており槍を前に突き出している今左側は隙だらけだ。

騎士のから空きの左半身に大剣をフルスイングして横腹に当たった。体勢を崩すどころか吹き飛ばした。最後に吹き飛ばしたあとに追撃として『ソニックエッジ』でとどめを刺した。

「ふう……………あっ！」

トールは『ソニックエッジ』でとどめを刺していたことに気づいた。アーツなしの検証だったことを倒してから思い出したのだ。た。

「……………まっ、いいか」

トールのこの検証は通常の斬ることがどれくらい効くものなのか知るものだったので斬撃が効くことがわかったので結果オーライということであとめた。

ここからのトールの狩りは順調かつペースアップした。攻撃パターンは槍で突くのと構えてから槍を前に突撃することと盾によってPCも使用するアーツ盾系スキルにある『シールドバッシュ』・盾を使って相手に攻撃する。当てた部位に一定確率でスタン（麻痺）する効果をもつ・の三つでとくに『シールドバッシュ』さえ注意すればもう相手にならなかった。

狩りは順調で一時間続きレベルもひとつ上がり34となった。ここでナイトと戦うのに飽いてきたトールはガーディアンと戦うことにした。

「・・・つとあれか」

さらに下の階層に下りるための階段の前でナイトと同じ形状で色が朱色がかっている甲冑が左腕の盾を前に右手の剣を矛先を天井に向け前に片膝を立て祈るような格好で三体いた。

その三体からは異様な威圧感があつた。ナイトのようにはいきそうにないとトールは直感でそう感じた。

階段前は広い部屋となっており入ったら戦闘が始まることは明白だった。

「・・・よし、いくか！」

部屋に入る前に『ソニックエッジ』を放ってから部屋に突撃した。

案の定トールが部屋に入ったすぐにガーディアンが動き出した。ソニックエッジの衝撃波は盾で防がれた。

だがそれがトールの狙いだった。ソニックエッジの真後ろを追いかけるように這っていたため衝撃波を盾で防ぐ行動でできた隙で

すら大きな隙になるぐらいガーディアンに接近していた。

トールはガーディアンの左側にまわり左腕の盾で衝撃波を防いだためすぐにガードはできずから空きとなった左側の腹あたりに大剣を振り上げるように剣撃をいれ、続いてアーツをいれようと思ったが嫌な予感がしたのでそこからバックステップして退いた。

ある程度距離をとろうと下がっているとさっきまで斬り掛かっていた場所に火柱がたった。忘れていたがこのガーディアンは火魔法を使う。今のは『ファイアラビリンス』 - 地点指定の魔法、指定した地点から10mぐらいの火柱をあげる。各属性にラビリンス系魔法有り - 中心でくらったら逃げ切れず死んでいただろう。

そして、ガーディアンと間合いを空けたのはミスだった。槍によるリーチ、盾によるガード、魔法による遠距離攻撃、そして連携。大きな一撃を当てることができなくなった。初めにいれた一撃も1割削ることもできなかった。防御力が上がっているのかHPが上がっているのかもしれない。その両方か、どれにしても防御力を犠牲にして攻撃重視にしているトールにとって回復してくれる味方がいない状況で長期戦はじり貧である。

「さて、どうしようか・・・ッッ！」

《シールドバッシュ》を使わずに盾で攻撃してきた。今までにない攻撃に大剣でガードせざるを得ない状況になった。このガーデ

イアンに限らず敵モンスターは長時間戦闘することでAIが学習し、今までにない行動パターンを出したりする。おかげで今以外盾を攻撃するものと認識されていなかったが盾も使って攻撃してくるようになった。

これで近距離戦闘では盾での攻撃が戦闘パターンに追加されたわけだ。

「くそっ…….…….こうなったら…….…….」

一か八かの大技連発で一体できれば二体倒す！

「『一匹狼の勇氣』ロブリーウルフ・プレイフ」

溜めてから使用するほうが強いが今回もすこしでもステータスが上がるために使用。ここからアーツの連発が始まる。

トールはまず狼二匹を召喚し、その後すぐに三体いるガーディアンのうち二体に一体ずつ《ウルフバレット》で突撃させ二体の抑止力にしガーディアンと一対一に持ち込んだ。

まずは、厄介な盾を破壊するため『レイ・エッジ』 - 光属性付加の斬撃 - 、つづいて『ヴォルフフアング』でガーディアンにダメージを稼ぐ。

一対一に持ち込んだガーディアンは盾を無くし、手に持っている槍も一緒に吹き飛ばしたので全くの無防備となった。

「ここで決める！」

隙だらけとなったガーディアンにもう一度とどめのヴォルフフアングを叩きこもうとした時、背後から何かが近付いてくる気配がした。見なくてもわかった他のガーディアンが背後から攻撃しようとしていることを…。

トールは確信して、「ああ、負けたな」と思った時

ズドン！

その音とともに何かが固いものにぶつかる音がした。トールに衝撃がくることなく『ヴォルフフアング』が隙だらけのガーディアンに当たり破壊した。

カースト遺跡にて・前編（後書き）

《質問回答コーナー》

トール「わーぱちぱち…この原稿はどうかと思っただけど…」

シルク「深く悩んだらだめだよ。たぶんこれはこの原稿を書いた人の思っつぽだと思っ」

トール「…そう、だな。よし、気持ちを切り替えて！」

シルク「今回はどこかでとられていた質問を回答します」

トール「えつとまず…『部長の成績は良い方なんですか？』」

シルク「部長ってラインさんだっけ？どうなんだトール？」

トール「残念なことに馬鹿じゃない…学校内での成績としては上の中ぐらいはある」

シルク「そんな悔しそうな顔するなよ…じゃあ気を取り直して次の質問『シェイドさん、私もかつて某MMOでギルマスしてました。ついでに面倒みがよかったためか、複数の方から言い寄られギルド内の雰囲気…』…」

トール「…はい、じゃあ質問コーナー終わりとなります。またこういう質問があればいいな」

シルク「…そうですね。僕やトールについての質問が無いのが残念

ですが…いや、僕はいらないですけど…」

トール「さて、オチがないのもひどいから何かしないか？じゃんけんとか」

シルク「いいですが、負けませんよ？」

トール&シルク「最初はグーじゃんけん」

シルク「チョキ！」トール「パー！」

トール「うあああああああああああ……！！！」

シルク「…こんなオチは誰も望んでないですね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2425j/>

CHAOS ONLINE

2011年1月28日13時16分発行